331
Ka94
(1)

0019894000

0019894-000

３３１－Ｋａ９４ウ

経済学大綱

河上肇・著

改造社

上巻

昭和２２

ADB

5

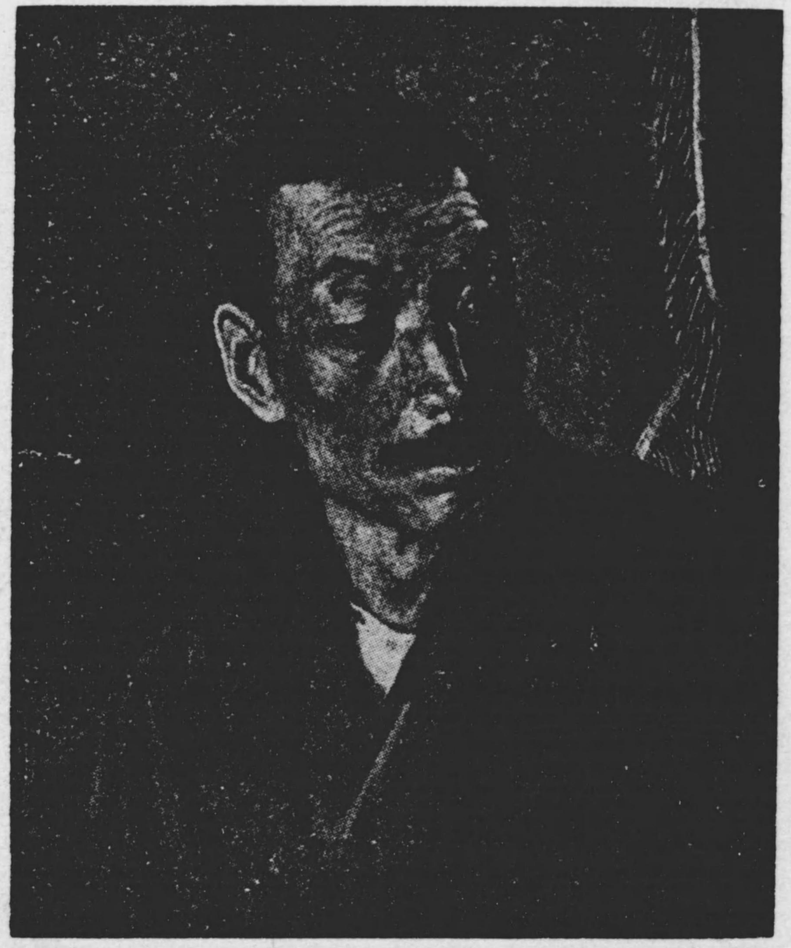
331
K94
(1)

河上肇著

經濟學大綱

上卷

改造社版



河上肇氏（鹿子木孟郎氏筆）

1014
54

序

本書の上篇を形成せる『資本家的社會の解剖』は、昭和二年（一九二七年）四月より昭和三年（一九二八年）三月に至る學年に、京都帝國大學經濟學部で、私のなした經濟原論の講義の稿本に屬する。私は右の大學にほゞ二十年間在職したが、講義のためには年々稿本を改めることを習慣としてゐた。たとひ內容には變化を加へない部分でも、新らしくそれを書き直して、ノートのインキが鮮かになつてゐないと、私は元氣よく講義をすることができなかつた。しかし最近には內容を改めうる部分が甚しく減少した。それで今後は毎年ほゞ同じやうな講義を繰り返す苦痛を忍ばねばなるまいかと、密かに氣遣つてゐたところへ、私は當局から辭職の機會を與へられた。私は悅んでその機會を捉へ、大學の研究室から私宅の書齋へ退いた。私はこれによつて、同じ題目に關する稿本の改訂を年々繰り返す義務から免れた。私はこれを一期として、私の研究をより以外の領域に進めたく思つてゐる。しかし私はそれ以前に、一應私の講義の最後の稿本を整理して、印刷に附することに決意した。本書上篇はそのためのものである。たゞ改造社の『經濟學全集』の計畫遂行上の必要により、今はこれが補訂に十分の時間を得ることができなかつた。それゆゑ私は遠からざるうちに、今一度これに加筆した

く思つてゐる。

この稿本を公けにするについては、私は若干の報告と説明とをなさねばならぬ。先づ第一に、右は經濟原論の講義であるとはいへ、一見して何人にも明かなやうに、その實質は、殆どマルクスの『資本論』の解説の如きものである。多くの人々は、それを奇異に感ずるかも知れないが、私から見ればマルクスの『資本論』は最上の經濟原論であるがゆゑに、自身で經濟原論の講義をなすといふ場合には、全く『資本論』に依據せざるをえないのである。それにしても、それは餘りにマルクス一點張りではないか、といふ人もあらうが、眞理に二つはないのだから、マルクスの學説がもし眞理を把握してゐるならば、吾々の研究は如何にしても彼れの打ち建てた基礎の上に行はれるの外はないのである。またマルクスの研究法および敍述法からすれば、『資本論』第一卷の内容は、專ら資本の生産過程の考察でなければならぬし、(從つてそこでは流通過程が捨象されてゐる)、第二卷の内容は、專ら資本の流通過程の考察でなければならぬし、(從つてそこでは生産過程が捨象されてゐる)、なほ第三卷の内容は、これら生産過程および流通過程の統一としての總過程の考察でなければならぬ。またこれを第一卷について言へば、そこでは敍述の進行が必ず商品——貨幣——資本といふ順序を採らねばならぬ。これを勝手に拔き差しできるものの如く考へるのは、まだマルクスの方法を理解せぬのである。自然、私の講義の構成は、一々『資本論』のそれに依據せざるをえなかつたのである。もちろん

ブルヂ・ア經濟學の陣營内における諸學者の著作は、現在ではその體系が甚だまちゞであり、曰く何某の經濟原論、曰く何某の經濟原論といふやうに、その内容なりその敍述の順序なりが著しく互に相違するの狀態にあるがゆゑに、その篇別が他に對して何等かの異色を有つでなければ、學者としての恥であるかの如く考へられてゐる。だが、或る學問が苟くも科學たるの名に値するものであるならば、その領域における諸學者の研究は一個の體系に統一されるのでなければならぬ。研究上における諸學者の協力は斯くして初めて可能であり、科學の發展は斯くして初めて實現されうる。そのことは、讀者諸君が理學または醫學の領域における狀態を顧みられたならば、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。マルクス學の陣營内にあつては、總ての研究がマルクスの据ゑおいた基礎の上に統一されてをる。そしてその基礎工事は、甚しき改修を許さざる程度に、秩序正しく且つ鞏固に建築されてある。經濟學の基礎的部分を説明した私の講義が、殆ど『資本論』の解説の如くなつてゐるのは、根本的には斯かる理由からである。

次に、私の講義は、一學年に亘り毎週六時間に限定されてゐた。そこには、かゝる限られたる時間を、對象の重要さに適應して前後の均衡を失はざるやう、各種の問題に配分する必要があつた。このことは、私をして、たとひ俗流經濟學派の著作では一般的に多くの頁が費されてゐる題目でも、それがさまで重要でないか又は單なる常識に過ぎないならば、全くこれを無視することを餘儀なくせしめ

た。なほそれのみでなく、私は大學において隔年交替に經濟原論と經濟學史とを講義せねばならなかつた。交替講義の相手方となつてゐた田島教授が辭職された後も、私の受持は依然舊の如く原論と學史との隔年交替となすべきであるといふのが、教授會での申合せであつた。自然このことは、學史の講義に讓りうる諸學派の批判を原論の講義において省略することを、可能または必要ならしめた。私の講義に他の學派の批判が輕く取扱はれてゐるのは、一つはそのためである。

なほ私の最後の講義は、こゝに公けにする通り、殆どマルクス學の祖述に終始してゐるが、しかしそれは決して最初からさうであつたのではない。この最後の講義に先だつ前年度分の講義も、更にその前年度分の講義も、共に活版に附せられ、從來私の意志に反して、『非賣品』として販賣されてゐたが、世間に證據の殘つてゐる此の範圍について見ても、私の講義は終りになればなるほどマルクス學の解說に近づいてゐるのである。そしてこのことは、私が最初からマルクスを盲信して出發したものではないことを意味する。むしろ私は、私等が今日ブルヂョア經濟學または俗流經濟學の名のもとに排斥してゐるところの・非マルクス的經濟學から出發したのである。現に大正五年（一九一六年）から翌大正六年（一九一七年）に亘る分配論の講義――經濟學上の特殊問題なる題目のもとになせし講義――では、私はボェーム・バウェルク、タウシッグ、クラアク、カアバア、フィシャア、カムマンツ等の學說を紹介するに止まり、マルクスの學說には殆ど全く言及してゐない。なほ大正十二年（一九二三年）から翌大正十三年（一九二四年）に亘る經濟原論の講義案を見るに、緒論は『經濟學とは何ぞや』、『富とは何ぞや』の二節から成り、また本論は第一篇生產論、第二篇交換論、第三篇分配論の三つから成り、更に例へば第一篇は、第一章生產と勞働、第二章勞働の社會化、第三章生產手段、第四章再生產、第五章生產力と社會組織の五章から成り立つてゐる。たゞこれらの篇別だけを見ても、當時の講義は玆に公けにするものと著しくその體系と內容とを異にしてをり、それが甚しくマルクスから遠ざかつてゐたといふことは、恐らく何人にも推察されうるであらう。要するに私は、最初ブルヂョア經濟學から出發して、多年安住の地を求めつゝ、歩一歩マルクスに近づき、遂に最後に至つて、最初の出發點とは正反對なものに轉化し了へたのである。かゝる轉化を完了するために、私は京都大學で二十年の歲月を費した。このことは、私の魯鈍を證明するに外ならぬが、しかしまた、私の現在の立場をもつてマルクス說に對する無批判的な盲信に立脚するものとなす一部の世評に對して、或ひは一の抗辯となすに足るであらう。顧みれば、私のマルクス說への完全なる推移は、輕蔑に値するほどの多年に亘る躊躇と折衷的態度との後に、纔に實現されえたものである。だが思索研究の久しきを經て漸く玆に到達しえたる代りには、私は今たとひ火にあぶられるとも、その學的所信を曲げがたく感じてゐる。

本書の下篇『資本家的經濟學の發展』は、大正十二年（一九二三年）八月に公けにした『資本主義

經濟學の史的發展』に多少の加筆をなしたものである。(私は近頃、資本主義的生産とか資本主義的社會とかいふ代りに、資本家的生産または資本家的社會と言つてゐる。)『資本主義經濟學』を新たに『資本家的經濟學』と改めたのは、そのためである。また『史的發展』を單に『發展』と改めたのは、上篇の題名の字數と均衡を保たんがために外ならぬ)。些細なる表現の訂正などは各頁に及んでをり、またアダム・スミスの自然的自由に關する說明の條下の如く、著しく改作した若干の部分もあるが、しかしそれ以外の重要な變化は、冒頭に序說數節を加へ、また第二章と第三章とにアダム・スミスとリカアドウとの勞働價値說を加へたことである。

この著作は、その公刊に先だつこと何年かの間、經濟學史の研究のために主としてイギリスの經濟學者につき、私の蒐集し來つた材料を整理したもので、その當時大學において私のなしつゝあつた經濟學史の稿本の主なる部分に屬する。それと同じ時代における經濟原論の私の講義が、如何にマルクスから遠ざかつてゐたかは、前に一言したが、恰もそれに適應して、この著作も、マルクス學の見地からすれば、甚しき缺陷を有するものである。今重ねて之を印刷に附するに臨み、可能なかぎりにおいて之を現在の立場に引寄せんと試みたが、しかし、譬へば一旦書きおろされた南畫の修正が後からは不可能なやうに、それは殆ど不可能であつた。それのみでなく、むしろ若干の加筆が、それはそれで一の統一體を形成してゐた舊著の面目を傷けたかに感じられてゐる。——私はしばらく元の形態における此の著作について語るであらう。

私は明治三十一年(一八九八年)の秋から明治三十五年(一九〇二年)の夏まで東京帝國大學の學生であつたが、この期間に私は初めてペイブルを繙き、そこに說かれてある絕對的な無我主義とでもいふべきものに、ひどく心を打たれた。それ以來、利己主義と利他主義との問題が、いつも私の心を占領してゐた。大學を卒業して三年目の明治三十八年(一九〇五年)の十二月に、私が一切の職を拋つて、當時『無我愛』を唱道されてゐた伊藤證信氏の無我苑に飛び込んだのは、かゝる年來の問題を根本的に解決せんがためであつたので、決して一時の思ひ付きに出でたのではない。それより三年目の明治四十一年(一九〇八年)の秋には、私は京都帝國大學に赴任することとなり、爾來本年の春に至るまで殆ど二十年間そこに在職したのであるが、そこでの私の研究は、今から振り返つて見ると、經濟思想史の範圍では、最初約十年の間、やはり昔年の問題たる利己主義と利他主義との關係を中心としてゐた。舊著『資本主義經濟學の史的發展』が、最初はマンダギルによる利己心是認の主張に筆を起し、最後にラスキンによる之が否認の主張に筆を擱いてゐるのは、そのためである。それは經濟學史といふよりも、經濟學の領域に反映した道德思想の歷史といふが如きものであつた。それは、善かれ惡かれ、かゝるものとして一の統一を形成してゐたかに思はれる。今回これを重刷するに當り私が新たに追加したところの、アダム・スミスの價値說や、リカアドウの價値說やが、舊著に省略され

てゐたのは、當時の計畫から、むしろ當然のことであつて、かゝる事項を新たに追加したことは、却て全體を一貫せる脈絡を破壞したかに感じられる。

利己的活動是認の思想の歷史的變遷の敍述、――かゝる思想の成立、發展、および死と、その反對物による代位と、その歷史的過程の敍述、――かゝるものとして先きの著書は、なほ若干の價値を有ちうるであらう。そこにいふところの利己的活動の是認なるものは、本質的には、資本家の利己的活動の是認なのである。封建社會から資本家的社會への推移の時期――すなはち封建社會が崩壞してその廢墟の上に資本家的社會が成立せんとしてゐた時期――に當つては、ブルヂ・アジーは正に人類の勞働の生産力の發展を代表する立場に立つてゐた。當時の彼等は一の革命的使命を帶びてをり、その使命の實現のために、歷史は、何等拘束されることなき活動の自由を、彼等に保證せざるをえなかつたのである。封建的な道德思想に反抗して、『私惡は公利である』といふ主張の起つたのは、人間の生活の物質的諸條件の上に起れる變革が、人間のイデオロギーの上に反映したものに外ならぬ。かゝる思想は資本家的生産の發展につれて發展し、その崩壞期に及んで崩壞せんとしてゐる。私の勞作はかゝる變化の過程を表示するものとして、なほ何程かの價値を有ちうるであらう。

今や第二の變革期に當り、新たにプロレタリアートがブルヂ・アジーに代つて、人類の勞働の生産力の發展を代表する立場に立たんとしつゝある。社會形態變革の歷史的使命は、すでにブルヂ・アジーからプロレタリアートに推移した。しかもプロレタリアの一切の活動は、强力的にまた精神的に、全般的な拘束を受けてゐる。假に道德論の範圍について見ても、罷業、怠業、その他プロレタリアの企てる一切の階級鬪爭は、いづれも皆な道德的に非難されてゐる。だが千七百年代の初葉に『私惡は公利である』といふ思想が起つたのと同じやうに、吾々の住む現在の社會には、『勞働者階級が自己の階級の利益のために鬪ふのは、人類全體の利益のために鬪ふのである』といふ思想が起るべきでありまた現に起りつゝある。階級社會においては、公益の實現は必ず私益の實現を媒介とするのである。

これを要するに、本書下篇はブルヂ・ア經濟學の歷史的發展の一斑を述べ、本書上篇は斯かる歷史的過程の承繼者たるプロレタリア經濟學の大要を明かにしたものである。全體を名づけて『經濟學大綱』といふは、聊か僭越に似たれども、微力の能ふかぎりにおいては、實際のところ大綱を把握したつもりではある。

昭和三年八月三十一日

河上肇

追記。一たび本書の公刊を豫告するや、早くも著者をもつて無批判的なるマルクス狂信者となすの聲しきりに起り、今なほ斯かる非難を絶たない。だが人々は眞の批判とは果して何であるかを理解してゐるか？それは顧慮なき批判の謂ひであり、そして「顧慮なき」(rücksichtslos)とは、『批判が如何なる結論を生むとも敢て之を恐るゝことなく、また現存せる諸權力との衝突をも敢て之を恐るゝことなき』謂ひである。しかも斯かる批判的精神こそ、正に著者を導いて遂にマルクス說を承認するを得ざるに至らしめたものである。私が初めて唯物史觀に關する一譯書を公けにしたのは、明治三十八年の頃であり、それ以來すでに二十三年を經過してゐる。そしてその間私は絶えず自身の勞作を發表し來つたのであり、その思想の推移はこれを正直に世に公けにしてゐる。私が機械的盲目的にマルクスを狂信したものでないといふことは、私の研究の斯かる過程がこれを證明するであらう。その全般的連絡から見てマルクス學の正しきことを信ずるに至りし後もなほその根本的見地の把握のためには、私は幾度か誤謬を犯すことを免れなかつた。だが私は『科學的批判のあらゆる判斷』を常に歡迎するの心を持し、自ら誤謬を發見したる折は、いつも直ちに之を訂正するに躊躇せざりしつもりである。私の微力に對する非難の如きは、私の固より辭せざるところである。たゞその學問的態度に對する無責任なる罵詈に對しては、私の甘受するを欲せざるところなるがゆゑに、玆に重ねて以上のことを附言する。だが吾々の偉大なる敎師は、彼れの主著の序文の結語において、『私の曾て讓步したることなき謂はゆる輿論なるものの成心に對しては、偉大なるフローレンス人の次の格言が、今後も依然として私に妥當する。——Segui il tuo corso, e lascia dir le genti！（汝の道を歩め、そして人々をしてその言ふに任せよ！）』と言つてゐる。私はこの言葉に勵まされつゝ、なほ私自身の道を進むであらう。

（十月三日追記）。

例言

一、上篇に對する參考書の主なるものは、上篇の末尾に一括して掲載した。

二、下篇における脚註は、印刷の都合上、各節の終りに一括して掲げた。

三、下篇に挿入せる寫眞は、舊版のまゝを存したのである。そこには吾々の偉大なる敎師の肖像が脫してゐる。彼れは他の學者たちと共にそこに伍すべく餘りに偉大であるであらう。

資本家的社會の解剖

目次

序説……一
第一節　經濟學の研究對象および出發點……三
第二節　研究方法……六

第一篇　商品および貨幣……一三

第一章　商品……一三
第一節　商品の構成分としての使用價値および價値……一三
第二節　價値形態（價値の現象形態としての交換價値）……一四
（I）簡單なる價値形態……一四
（II）擴大された價値形態……一六
（III）一般的價値形態……一八
（IV）貨幣形態……一七

第三節　諸商品の交換過程……六六
第二章　貨　幣……八八
第一節　價値の尺度……八八
第二節　流通手段……九六
第三節　價値物自體としての貨幣……一〇七
(a)　蓄財手段……一一八
(b)　支拂手段……一二三
(c)　世界貨幣……一二九
第二篇　資本の生産過程……一三三
第三章　貨幣の資本への轉形……一三三
第一節　資本の運動の一般的形式……一三三
第二節　剰餘價値の源泉……一三六
第四章　剰餘價値の生産……一四六
第一節　勞働過程……一四六
第二節　價値增殖過程……一四六
第三節　不變資本および可變資本……一四九

第四節　剰餘價値率……一五三
第五章　絶對的剰餘價値の生産……一五七
第一節　勞働時間の延長……一五七
第二節　勞賃の引下げ……一六一
第六章　相對的剰餘價値の生産……一六六
第一節　相對的剰餘價値の意義……一六六
第二節　簡單なる協業……一六九
第三節　分　業……一七五
第四節　機　械……一八〇
第五節　相對的勞賃の遞減……一八四
第七章　資本の蓄積過程……一八三
第一節　簡單なる再生産……一八三
第二節　擴大されゆく再生産……一八七
第三節　資本の蓄積が勞働力の需要に及ぼす影響……一八九
第三篇　資本の流通過程……一九五
第八章　資本の變態および循環……二〇〇

第一節　貨幣資本の循環……二四〇
第二節　生產資本の循環……二四八
第三節　商品資本の循環……二五四
第九章　資本の回轉……二六三
第一節　固定資本および流動資本……二六四
第二節　作業時間および生產時間……二六九
第三節　流通時間および流通費用……二七一
第四節　景氣の浮沈と資本の回轉速度……二七八
第十章　資本の回轉と價値增殖との關係……二七九
第一節　回轉時間(特に流通時間)が放資額の大小に及ぼす影響……二七九
第二節　可變資本の回轉時間が剩餘價値の年率に及ぼす影響……二八四
第十一章　社會總資本の流通および再生產……二八七
第一節　簡單なる再生產……二八九
第二節　擴大されゆく再生產……三〇四
第三節　資本家的生產の行詰り……三一一
第四篇　資本の總過程……三一六

第十二章　利潤および利潤率……三一八
第一節　剩餘價値の利潤への轉形……三一八
第二節　種々なる利潤率の平均利潤率への轉形……三二五
第三節　一般利潤率の傾向的下落の法則……三三五
第十三章　商業資本および商業利潤……三三七
第一節　商取引資本……三三七
第二節　貨幣取扱資本……三五〇
第十四章　利附資本および利子……三五三
第一節　利附資本の運動形態……三五三
第二節　利附資本の物神崇拜性……三五八
第三節　利子歩合……三六二
第十五章　土地所有權および地代……三六五
第一節　超過利潤の地代への轉形……三六五
第二節　等差地代……三六七
第三節　絶對地代……三八二
第十六章　金融資本……三八九
第一節　株式會社の勃興……三八九

第二節　資本信用および銀行……二九頁
第三節　株式會社と資本集中……三〇頁
第四節　擬制資本および創業者利得……三一九
參考書について……三二一

資本家的社會の解剖

序說

『Raise the veil boldly; face the light.『大膽に帷を掲げよ、光に面せ』——眞相の隱蔽ではなく、その曝露が、プロレタリア經濟學の任務である。階級闘爭が未發展の時期に屬せしかぎりにおいては、ブルヂョア經濟學も、たとひ一定の限度を有せしとはいへ、なほよく眞實の曝露をなしえた。だが、一旦階級闘爭が社會の表面に登場的立姿をもつて現はれ來たるや否や、『經濟學はブルヂョア的であるかぎり、すなはち、資本制的秩序を歴史的に過ぎ行く發展段階としてでなく・逆にこれを社會的生産の絶對的な且つ終局的な姿として、理解してゐるかぎり、』もはや科學として止まることをえなくなつた。ブルヂョア經濟學の崩壞の過程はかくして始まる。それと同時に、忌憚なく現代社會の内的聯絡を曝露することにより、眞實に科學としての任務を果さんとするところの・プロレタリア經濟學が起る。いふまでもなく、それはマルクスを祖とする。

ブルヂョア經濟學の運動過程の一斑は、私が本書の下篇『資本家的經濟學の史的發展』において敍述せるところである。そしてこの上篇においては、私は『資本家的社會の解剖』を任務とするのであるが、それは當然に、プロレタリア經濟學の基礎的部分の解說をその内容とする。それはマルクス說の單なる祖述にすぎない。だが私は、今日それを自分自身の責任において主張するのである。

私は先づ若干の序說を述べよう。——

第一節　經濟學の研究對象および出發點

經濟學は、社會の基礎的生活過程としての物質的生活過程において、人間相互の間に結ばれる生產諸關係を、その研究の對象とする。

マルクスが嘗てクーゲルマンへの手紙のなかで言つたやうに、『一年といはず、ただ數週間でも、勞働が停止されたなら、如何なる國民も死んでしまふだらうことは、どんな子供でも知つてゐる。』この勞働は、人間と自然との間における Stoffwechsel（物質代謝）の一般的條件であり、人間の生活の永久的な自然條件である。それゆゑ、社會現象を形成するところの、人間と人間との間の相互作用は、實に多種多樣であるけれども、それら相互作用の永續性の條件となれるもの、言ひ換へれば、それなくしては爾餘のものが繼續的に維持されると考へられないところの、社會的連絡の基礎となれるものは、人間が意識的または無意識的に相互物質的生活のために行へる社會的勞働、すなはち社會的な物質的生產過程において、人間相互の間に結ばれるところの種々なる勞働連絡または生產關係である。今、これら生產諸關係の總和は、すなはち社會の經濟的構造（die ökonomische Struktur der Gesellschaft）であり、それが全社會の物質的な土臺を形成するのであり、そして我が經濟學は、かゝる社會の經濟的構造をその研究の對象とするのである。

だから吾々の研究にとつての現實の出發點（der wirkliche Ausgangspunkt）は、先づ、社會において生產しつゝある人々、從つて社會的に規定された人々の生產である。これが與へられた前提であり、吾々の表象の出發點である。

けだし人間は社會を離れて生存することはできない。人間の生存といふ以上、それはいつでも社會內における生存である。先づ個々の個人が生存し、しかる後彼等がその生活の便宜のために社會を造つたのではなく、人間は生まれながらにして社會のうちに存在すること、譬へば何人も生れながらにして親を有つが如くである。だから、社會の外における孤立せる個人の生存を假定することは、共に生活し共に話し合ふところの個人なしに、言語の發達がありうると考へるのと同じやうに、一の空想である。吾々は吾々の學問を斯かる空想から出發せしめてはならない。謂はゆる限界效用說に立脚せる心理學派は、後に至つて更に述べるであらうやうに、孤立せる個人の心理から出發して價格現象を說明せんとするものであるが、それは既にその出發點において、根本的な誤謬を犯せるものである。

學問を現實的な基礎の上に据ゑようと思へば、吾々は、何等の理論的構成を經ざる・何等思惟の加工を受けざる・最も根源的な事實を、研究にとつての最初の出發點としなければならぬ。あらゆる理論的思惟は、或る程度までは必ず一方的であり、何程かは眞の具體的現實からの抽象である。吾々の出發點は、此の如き思惟の產物たる抽象物であつてはならぬ。何故なれば、根本的には理論は理論から出發さるべきでないから。もし理論が理論から出發されてゐたならば、出發點たる理論が更に問題となるであらう。それは根本的に理論を確立するゆゑんではない。それゆゑに、理念ではなく、たゞ外的現象のみが、吾々の出

發點として役立つ。ところで、この外的現象をあるがまゝの姿で受取つたならば、言ひ換へれば、外界の事物が吾々の意識に反映することによつて直接に生ずる表象そのものは、いつでも種々な規定を受けてゐるところの或る具象的なものである。かゝる具象物が吾々の理論の前に豫め規定されて横たはるのである。それは理論が產んだ結果ではなく、理論がその素材として最初に受取るところの前提である。そして、その意味において、吾々は、吾々の研究にとつての現實の出發點は、社會的に規定された生產だといふのであるが、しかし、それは同時にまた、歷史的に規定された生產である。けだし人々がそのもとに生產するところの、社會の經濟的構造は、すべて歷史的、過渡的の性質を有するもので、永遠にわたる不變の經濟組織といふものはない。だから、社會的に規定された一定の生產といふことは、取りも直さず、一定の歷史的發達段階に於ける生產といふことである。この點につき特に注意すべきことは、互に相異なれる經濟的構造を有するそれぞれの社會は、各々特殊なる有機體であつて、それはその成立、發展、およびより高級なる形態への推移について、各々特殊なる法則を有す、といふことである。だから、或る社會形態と、より發展せる社會形態との差異は、例へば、子と親との相違ではなく、猿と人間との相違である。そして、猿と人間との全體の生理的構造が異なるにつれて、手とか足とかいふやうな・外見上はほゞ同じやうに見えてゐる・それぞれの器官の機能が、全く別種の法則に從へられるのである。かくて要するに、吾々の研究にとつての現實の出發點となるものは、社會的に・また歷史的に・規定されてゐる、或る特殊なる具象的な生產である。

今吾々がこの講義において本來の問題とするところは、現代社會における生產である。從つてそれが吾吾の研究にとつての現實の出發點である。ところで、それは一見して明かなやうに、種々なる諸要素から成り立つてゐるが、しかしそのなかで支配的の地位を占めてゐるものは、謂はゆる資本家的生產（kapitalistische Produktion）である。それゆゑ吾々の研究は、專らこの資本家的生產について行はれる。言ふまでもなく、純粹に資本家的生產のみが行はれてゐる社會――純粹な資本家的社會――なるものは、現實には存しない。それは思惟における一つの抽象である。吾々は與へられた現實の生產から、最も支配的な地位を占めてゐる一つの面として、かゝる資本家的生產を抽象するのである。だが、それは現代社會において支配的なものであるがゆゑに、これを支配する諸法則を、詳しくいへば、資本家的社會の成立、發展、およびより高級なる社會形態へのそのものの推移を支配する諸法則を、明かにすることは、やがて現代諸社會の運命の根本的な筋道を知るゆゑんである。これが吾々の研究の限界と意義とである。

此の如く、吾々の目的とするところは、資本家的生產に特有な諸法則の闡明にある。もちろん種々なる社會諸形態は、或る共通の規定を有つてをり、それらは之を吾々の抽象力によつて抽き拔くことができる。なほ斯樣にして抽象されたもののうち或るものは、二三の社會諸形態に屬し、他のものは總ての社會諸形態に共通するであらう。そして總ての社會諸形態に共通なものは、それなしには如何なる生產も考へられないところのものであつて、それは主體はいつも人間であり、客體はいつも自然であるといふことから生ずるところの、人間の物質的生產に關する永久的な自然條件である。今、あるひは二三の、あるひは總ての社會諸形態に共通するところの、これらの諸規定を知ることは、或る特定の社會形態にのみ特有な規定を明かにするために、もちろん必要とされる事である。すなはち特殊性を明かにせんがためには、同時に

斯かる一般性をも明かにせざるをえない。吾々の原論をそれが特殊なものであるといふ故をもつて非難する者の如きは、特殊は常に一般を前提とすることを理解せざるものである。吾々の原論には、一般をのみ目標とせる人々の發見しうるところのものを、當然に含む。たゞ注意すべきことは、それを發見することが吾々の目的ではないといふことである。吾々の研究目的は、吾々が現に住むところの現代社會において支配的の地位を占めつつある資本家的生産の特殊性を明かにするにある。かゝる特殊性を明かにしなければ、吾々は吾々の現に住みつゝある社會を理解することが出來ぬのである。生産一般に共通する諸條件を吾々が問題とするのは、ただそれが現在の生産の特殊性を明かにするための一の前提たるがために外ならない。このことは、經濟學の研究において特に注意する必要がある。今日殆ど總ての教科書には、例へば、生産の要素として勞働と生産手段とが必要であると述べてあるが、これは即ち生産の一般的條件に過ぎない。しかるに、多くの教科書は、この一般的條件に屬する單なる生産手段をば、いつしか現代の資本とすりかへることにより、言ひ換ふれば、かゝる生産手段は如何なる特殊の社會關係のもとに置かれて初めて現代にいふところの資本となるかを總て看過することにより、ただに現代の經濟組織に對する眞の理解に到達しえざるのみならず、更に現代の經濟組織を永遠化せんとする反動的役割を演じつゝあるのである。

第二節　研究方法

吾々は、思惟の道程において、最も簡單な範疇から出發して次第により複雜なものへ進み、最後に最も複雜な諸規定の綜合から成るところの・最も具象的なるものに到達する。

すでに述べたる如く、吾々の研究にとつての現實の出發點となるものは現代社會であるが、それは極めて複雜なる諸規定の綜合から成るのであるから、一見したところでは、それら諸規定の内的連絡が明かにされる筈はなく、それはもとより一個の混沌たる表象として吾々の頭腦に泛ぶにすぎないであらう。だから、もし吾々がそれらの諸規定を明かにすることなく、いきなり現代の社會といふものを持ち出したならば、例へば、それを構成してゐる階級、すなはち資本家階級、勞働者階級等を明かにしなかつたならば、全體の社會といふものが一の抽象的な空語になる。またこれら資本家階級、勞働者階級等は、その物質的基礎となつてゐる資本、賃勞働等の諸要素を明かにしなければ、やはり空に浮いたものになつてしまふ。更にまた、これらの資本、賃勞働等は、種々なるものをその前提としてゐるのであつて、例へば資本は、商品、貨幣、賃勞働等を前提としなければ、成り立たないものである。しかるに、例へば、過去の生産物にして將來の生産に役立つものが資本であるといふ風に考へたならば、それは、人間がこの地球上に生まれて今日に至るまで、また今日以後といへども人間がこの地球上に生存するかぎり、如何なる社會形態のもとにも常に必要とされるところの・すなはち生産の一般的な自然條件としての・生産手段に外ならざるものとなるのであつて、畢竟するに、それは eine Abstraktion, ein leeres Wort（一の抽象、一の空語）に過ぎざるものである。今吾々の研究は、此の如き空語を基礎として建設されうる筈はない。だから、例へばボヽーム・バウヽルクの『資本および資本利子』（Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins）の如く、

迂回的生産を資本的生産であるとなし、また斯かる迂回的生産に役立つ中間生産物を資本であるとなすが如き出發點をもつてしては、到底現代の社會を現實的に把握するに至りえないのである。

要するに、吾々の研究に向つて與へられてゐるところの、現實的な前提たる現代社會なるものは、種々なる規定の綜合から成るのであるから、それらの諸規定が明かにされざる以前に、最初吾々の意識に反映されたる現代社會なるものは、eine chaotische Vorstellung des Ganzen（全體に對する一個の混沌たる表象）に過ぎない。今かゝる混沌たる表象を概念に整理すること、それが吾々の理論的な仕事の職分である。そして、そのことは、次の如き方法によつて行はれる。

先づ吾々は、直接に與へられてゐる具象物について、先づ最も捨象的な一面を看取せねばならぬ。最初取り上げられる此の一面は、あらゆる雜多の諸規定を度外視したところの最も捨象的な面であるから、それは同時に最も簡單な一面である。吾々は斯かる最も捨象的な範疇から出發して、思惟の道程においてそれに種々なる規定、種々なる方面を加工することにより、次第々々により複雜なる・より具象的なる・範疇に進み、かくて最後に、吾々の目標とするところの現代社會を、吾々の頭腦のうちに再現するのである。簡單にいへば、最も簡單なる一面から出發して、順序に種々なる面を究明し、最後に多面性の統一物としてその研究對象を把握するのである。ところで斯くして得られたる現代社會は、最初直接に與へられてゐた混沌たる表象と異なり、既に明かにされたる種々なる諸規定の總括として、言ひ換へれば、順次に究明され來つた種々なる方面の統一物として、把握されたものであるがゆゑに、それは理論的に整理し構成されたものとして、吾々の頭腦に描き出される。すべての具象物は、種々なる諸規定の總括であるがゆ

ゑに、具象物である。だから以上述べたるが如き方法が、具象物を具象物として把握するための、唯一の科學的方法なのである。

この場合、吾々の注意すべきことは、吾々は最も簡單な・最も捨象的な・範疇をもつて思惟にとつての出發點とするけれども、しかしその出發點となれる捨象的な範疇は、決して吾々の思惟による產物ではない、といふことである。吾々の思惟を思惟の產物から出發せしめることの不當については、前すでに一言した。思惟を思惟に依存せしめることは、果てしなき論理の循環に陷ることである。それゆゑに、吾々が思惟の出發點となすものは、誰でもが現實の現象について經驗的に知りうるものでなければならぬ。これを當面の場合について言へば、現代社會が先づ吾々のために與へられてゐると同時に、この複雜極まれる具象物の一面として、商品交換關係なる最も簡單な・最も捨象的な・社會關係が、等しくまた吾々のために與へられてゐるのである。だから吾々は、思惟の道程において最も捨象的な範疇から次第に具象的な範疇に進み、最後に研究の目標とせる最も具象的な現代社會に到達するに相違はないが、しかしこの場合、その最初の出發點たる最も捨象的なものは、實は最後の到達點たる最も具象的なるものの一面であり、その具象的なるものが具へてゐる多方面の一つを抽象したものである。だがその抽象は、單なる思惟による抽象ではない。それは當該社會に生活せる人々が、彼等の實生活、彼等の實踐において既に現實的に抽象してゐるところのものである。だから、くだんの捨象的な範疇は、捨象的ではあるが、しかし同時に具體的であり、現實的である。かくて吾々の研究方法にあつては、一方において、最も簡單な・最も捨象的な・範疇をその思惟の出發點とするといふ點において、あらゆる科學的研究に共通な要求を充たしつゝ、同時

に他方において、かゝる捨象的な範疇を經驗的に與へられてゐる研究對象自體の上に——すなはち現實の出發點のうちに——求めることにより、思惟を思惟に依存せしめることから脱却してゐるのである。こゝに唯物辯證法の根本的な一特徴が存する。

かくて吾々の敍述の仕方は、研究の仕方と、形式的には相違する。研究にとつての現實の出發點は、最も豐富なる諸規定の綜合からなるところの・具象的なるものであるが、逆に吾々の敍述にあつては、極めて簡單な規定以外のものは總て捨象され無視されてゐるところの・最も捨象的な範疇をもつて、その出發點とする。畢竟、吾々の敍述は、具體物を精神上に再生産するための、思惟の過程を表現するのである。それゆゑ、それは決して具體物それ自身の發展過程ではありえない。例へば、最も簡單な範疇たる商品は、分業の行はれつつある社會、すなはちより具象的なものを、その存立の前提とするのであり、且つその最も完全なる發展は、資本家的社會といへる最も具象的なものを、その前提としてゐるのである。思惟における吾々の出發點が、その到着點たるべき最も具象的なものの現實的な一面であるといふことは、私のすでに述べたところである。だから、吾々はその敍述を、最も簡單な範疇たる商品から出發せしめるけれども、その場合、いつでも前提として、現代の資本家的社會が表象に浮べられてゐなければならぬのである。もちろん、商品は貨幣以前に、また貨幣は資本以前に、すなはち資本家的社會以前に、存在しうるものであり、また歴史的に存在してゐた。同一系統の範疇に屬するものにあつては、歴史的には、より簡單なものが、より複雜なものに先行するといふことは、自然の順序である。だから、かゝる關係において

は、最も簡單なものから複雜なものへ向上する思惟の過程は、具體物そのものの現實的な歴史的な發展過程に適應することとなると同時に、發展せる社會にとつての捨象的な範疇は、同時に、より未發展なる社會にもまた妥當するものである。かくて必然的に、敍述の過程においては、最初先づ、總ての又は二三の社會形態に共通な範疇が現はれる。吾々の敍述における商品および貨幣の如きがすなはちそれである。商品は貨幣以前に、すなはち諸商品の流通以前に、また貨幣は資本以前に、すなはち資本家的生産以前に、現はれると同時に、それらは總て商品生産社會に——單なる商品生産社會にも資本家的商品生産社會にも——共通するところの範疇である。

最も單純なものから複雜なものへの向上は、これを生物學について言へば、Omnis cellula e cellula（細胞は細胞より生ず）といふ原則によつて行はれる如く、吾々の研究においても、商品の自發的發展、または自己運動として現はれる。吾々は先づ、資本家的社會の細胞としての・この商品といへる統一物を分解して、その矛盾に滿ちたる構成分を認識しなければならない。ところで、矛盾は運動の母であるから、商品がもし互に矛盾せる對立物の統一から成るならば、それはそれ自身において運動しなければならぬ。それが即ち商品の自己運動であり、且つかゝる運動のうちに資本家的社會の成立、發展、沒落（より高級なる社會形態への推移）の過程が示されるのである。その運動はすでに自己運動であるがゆゑに、動力をそれ自身のうちに有つ。それは他の何物にも依存しない。そしてそれは他の何物にも依存せざるがゆゑに、根本的に把握される。もし他の何物かに——例へば神の意志、人間の精神、等々に——依存するのであつたならば、吾々にとつては、その依存されてゐるものが更に説明されなければならず、かくて吾々は茲に

もまた果てしなき循環論に陥るであらう。それゆゑに事物は自己運動の流れにおいてのみ、初めて根本的に把握される。そして斯かる把握の仕方のうちに、辯證法の根本的な一つの特徴が存するのである。

第一篇　商品および貨幣

第一章　商　品

第一節　商品の構成分としての使用價値および價値

資本家的生產が支配的の地位を占めてゐる諸社會の、最も簡單な・從つて最も一般的な・最も多量的な・最も日常的な・それゆゑにまた最も基礎的な・關係は、商品交換關係である。言ひ換へれば、かゝる社會の富の細胞形態は、商品である。この商品が、吾々の研究對象として與へられてゐる現代社會の最も捨象的な一面として、經驗的に吾々のために與へられてゐる。苟くも現代社會に生活するものは、何人も、人と人との間における最も日常的な・最も簡單な・關係は、商品交換關係であることを知つてをり、何人もまた、社會的に生產される富は、殆ど總て商品として生產されつゝあることを知つてをる。一言にして蔽へば、商品が吾々の研究對象とする現代社會の最も捨象的な範疇であるといふことは、吾々の研究以前に與へられてゐる・從つて論證を必要とせざる・一の經驗的事實である。それゆゑに、最も簡單なるものから次第により複雜なものへ向上するといふ研究方法を採る吾々にとつては、商品が（單なる商品が）先づ分析の對象となる。

一人の人間を構成してゐる細胞數は、初生兒にあつては無慮二十六兆五千億、成人にて四百兆に達するといふことだが、それと同じやうに、吾々の現に住みつゝある社會の經濟的構造を構成する細胞としての商品交換關係は、實に何兆何億といふ數に達してゐる。なほ生物を構成する組織には、細胞質の分化より成れる部分と、細胞質の分泌した物質から成る部分とがあるのだが、丁度それと同じやうに、資本家的社會にも商品の分化した貨幣とか資本とかいふものがあり、また單なる商品交換關係から分泌されたところの、貨幣貸借關係、資本信用關係、等々の諸關係がある。だが、それらは、吾々の研究の進行につれて、次第に明かにされる問題である。

商品は使用價値および價値といへる對立物の統一から成る。商品の斯かる矛盾を明かにすることは、吾吾の全研究にとつて根本的な問題である。

先づ商品は使用價値である。(人が肩書を有つとか、または帽子を持つとか、いふやうに、商品が使用價値を有つのではない。商品は使用價値を離れて存在しない、商品は使用價値なのである)。すなはちそれは何等か人間の欲望の對象であり、最廣義における人間の生活資料 (Lebensmittel) である。それは、人間が如何なる社會關係のもとに生活しようとも、その生存のため缺くべからざるものである。だから、たとひ諸商品は、社會的欲望の對象として、互に社會的聯絡のうちに織り込まれてゐるにしても、商品の使用價値そのものには、何等の社會關係も表現されてをらぬのである。或る勞働生産物が商品となるためには、もちろん使用價値でなければならぬが、しかしそれが商品形態を採つてゐるか否かといふことは、使

用價値にとつてどうでも可いことである。從つて、使用價値としての使用價値は、經濟學の研究範圍の外に横たはる。ところが、吾々の研究せんとする社會組織のもとでは、かゝる使用價値が、交換價値の物質的土臺 (die stoffliche Basis) となつてゐる。吾々は次にこの交換價値について考へて見なければならぬ。

商品といふ以上、それは必ず相互に交換されるものであり、且つ相互に交換されることによつて、一の商品の一定分量の交換價値は、それと交換される他の商品の或る分量となつて現はれる。すなはち交換價値は先づ、或る種類の使用價値が他の種類の使用價値と交換されるについての、分量上の比率として現はれるのである。例へば、一升の米の交換價値は、二升の麥、五合の酒、百匁の牛肉、十個の鷄卵、一個の帽子、等、等によつて表現されてゐる。ところで、同じ一升の米の交換價値が、斯樣に、使用價値を異にするところの種々なる商品のそれぞれの分量の何れを以つてしても、隨意に言ひ現はされうるといふことは、それらのものが交換價値としては互に置き換へられうるものであり、つまりは同じものである、といふことを意味する。もつと分り易く言へば、商品生産が極度の發展を遂げた社會では、一切の商品の交換價値が、盡く貨幣をもつて表現され、かくて如何に高貴な物も、如何に卑賤な物も、その交換價値は、たゞ分量の差を有するにすぎざる・品質の同じ單位のものに還元され、從つて一切の商品は、一定の分量的比率をさへ保つならば、盡く皆な、社會的に平等の取扱を受けてゐる。これは現に吾々の眼の前に行はれつゝある事實であるが、この事實は、現實の社會の實踐において品質上同一なるものとして取扱はれる或る物が、これらの諸商品に共通に存在することを、意味するのでなければならぬ。

更に二つの商品、例へば米と小麥とを取つて見るに、その交換の割合は如何やうであらうとも、(經驗的

に與へられてゐる商品は、いつでも或る分量上の規定を有する)、ともかく一定分量の米——例へば一升の米——と交換される小麥の分量が、やはり他の一定した或る分量——例へば二升——であつて、その他の隨意の分量、例へば三升でも四升でもないといふ事實のうちには、一升の米と二升の小麥とは、或る關係において(その關係が如何なるものであるかは別の問題として)互に相等しとされるといふことが、含まれてゐるのであり、簡單にいへば、

xAW : yBW (Aなる商品のx量對Bなる商品のy量)

なる比例のうちには、

$xAV_1 = yBV_2$ (Vは或る共通物を現はす)

なる方程式が含まれてゐるのである。すなはちAおよびBの各單位には、それらに共通なVなるものがAの方には1量だけ、Bの方にはm量だけ含まれてゐるがゆゑに、前者にxを掛けたものが後者にyを掛けたものと等しくなるのである。(『經濟論叢』第二十四卷第二號、昭和二年二月、蜷川虎三氏『物價指數の意味』、通卷三九八頁參照)。或る使用價値は他の使用價値に對し斯かる關係を有つことにおいて、初めて商品となりうる。かくて $xAW = yBW$ なる方程式は、商品のあらゆる經驗的存在に卽する事實であり、(經驗的事實そのものではない、しかしあらゆる可能なる經驗的事實のうちに內在する關係である)、それは使用價値が商品となるためのForm(形式)として、商品のWesen(本質)を成すものであり、以下吾吾の研究にとつて根本的な關係を有つものである。

さて吾々は、互に交換される商品AとBとには、その双方に共通なる或る第三のものが存在してゐなければならぬことを知つた。しからば、それは何であるか? それを明かにすることが吾々の次の問題であるが、そのためには、先づ如何なるものが、ともかく諸商品に共通するかを吟味しなければならぬ。

第一に、吾々は、諸商品が何等かの使用價値であるといふ點において、共通の性質を有することを知る。——使用價値は總て商品となるわけではないが、しかし使用價値にあらざるものは商品となりえないのであるから、何等かの使用價値であるといふことは、諸商品に共通な事實である。——けれども、これは、吾々が今求めつつあるところの、品質において同一な共通物ではありえない。けだし各種の商品が互に品質の異なる使用價値であることは、それらのものが商品として互に交換されるための、從つてそれらのものが互に交換價値となるための、缺くべからざる條件であるから、たとひ諸商品は、交換價値としては、品質上同一なものとして、無差別平等な取扱ひを受けつゝあるとしても、それは決して使用價値としてではない。同じことを他の方面から言へば、使用價値としては互に品質を異にするところの種々なる商品が、社會全體の上に、一定の割合において供給されるといふことは、社會的生產にとつて缺くべからざる條件であるから、種々なる商品の使用價値は、社會の實踐において品質上同一なるものとして取扱はれる筈はなく、却つてその逆である。

第二に、吾々は何等かの勞働が諸商品に共通して包含されつゝあることを見る。言ひ換ふれば、諸商品は勞働の生產物たる點において、共通の性質を有する。(今日の社會では、勞働の生產物でないもの——例へば自然の土地——でも商品形態を有する。だが、吾々の問題は、社會的生產における人と人との勞働連絡を明かにするにあるがゆゑに、吾々は先づ勞働生產物の交換について觀察する。勞働生產物以外のもの

が如何にして商品形態を採るに至るかは、研究の進行につれて明かにさるべき事項である。）そして吾々は、この勞働のうちにこそ、今求めつゝあるところのものを、すなはち社會の實踐において品質上同一なものとして取扱はれつゝあるところの諸商品の共通物を、發見しうるのである。言ふまでもなく何等かの勞働を含むといふことは、ただに商品に共通なばかりでなく、人間があらゆる時代、あらゆる社會形態のもとに生産するところの、總ての富または財に共通な事柄である。如何なる場合においても、人間界と自然界との間における物質の交換を媒介するものは、常に人間の勞働であり、人間はその勞働をば自然界に存在する物質的材料の上に加へることにより、初めて富を生産しうるのである。だから生産された總ての富には、人間の欲望を充たしうる何等かの自然的性質が共通してゐると同時に、これが生産のためには、また何等かの勞働が共通に費されてゐるのである。ところで、この勞働は、その生産するところの富の種類を異にするに從うて、互にその形態を異にするところの具體的勞働であるけれども、ただそれが商品の生産のために費される場合には、同時に無差別な捨象的勞働たる性質を賦與されることにより、品質の同一な單位に還元されるのである。もちろん、一定の使用價値を生産するために費された勞働は、そのまゝでは、ただ特殊の形態を有つた具體的な個人的勞働に過ぎない。けれども、これによつて生産された生産物が一旦商品として交換關係に入り込み、かくて種々なる商品が一定の割合においては互に相等しとされることになれば、それにつれて、それら商品の生産のために費された勞働もまた、一定の割合においては互に相等しとされることになるのであり、從つて斯かる方面においてはその具體性を捨象され、ただ人間的勞働といふだけの一般的性質を賦與されるに至るのである。だから生産物に對象化された勞働が捨象的な・人間的な・勞働としての一般性を具へるといふことは、あらゆる生産物が盡く流通過程に入り込む社會、すなはち商品生産が極度の發展を遂げた資本家的社會において、初めて實際上眞實なものとなる。かかる社會においては、各個人の勞働は、すべて他人の——すなはち社會の——需要に應ずるための、商品の生産に費されてゐるのであり、從つてまた、社會の需要如何に應じて、如何なる種類の使用價値の生産にも向けられうるのであり、謂はば社會的生産のために費さるべき社會全體の勞働の總和は、社會の需要如何により、如何なる種類の使用價値の生産にも向けられ、如何なる種類の具體的勞働ともなりうるといふが如き、無差別平等な性質を、その一面に有つのである。かくてこの方面より見れば、商品生産の世界においては費される社會全體の勞働は、人間の腦や、筋肉や、神經などの物理的な力の單なる支出に外ならざるものに轉形してゐるのであるが、それが個々の商品に結晶し對象化されることによつて、それら商品の價値——すなはち商品價値——となるのであり、且つそれが吾々の玆に求めつゝあるところの、あらゆる商品に共通なるものである。かくて吾々は、商品價値の實體は、商品に對象化された社會的勞働（捨象的な・人間的な・勞働）であり、且つ商品の交換價値なるものは、畢竟するに、かゝる商品價値の現象形態に外ならざるものなることを知る。

如何なる社會においても、社會的勞働（社會的生産のための勞働）は個人的勞働から成り立つ。だが、個人的勞働が直接に媒介なしに社會的勞働を形成してゐる場合（例へば共産制の社會）においては、個人の勞働が、從つて個人の勞働生産物が、私的勞働または私的所有物たることを、最初から否認されてをり、共同社會が生産に前提されてをり、生産物は最初から社會的生産物である。これと異

なり、商品生産社會は個人主義制の社會である。そこでは、個々の個人が各々生産手段を私有し、從つてその生産物を私有する。あらゆる生産物は、かゝる方面より見れば、先づ私的生産物であり、社會的生産物ではない。だが、たとひ個人主義制を採るにしても、そこに社會が成立されてゐる以上、各個人は生産の上に何等かの社會的連絡を保つてゐなければならず、彼等は何等かの仕方において社會的な勞働組織のなかに織込まれてゐねばならぬ。交換はすなはち Arbeit des vereinzelten Einzelnen（離れ離れにされてゐる個々人の勞働）を gesellschaftliche Arbeit（社會的勞働）に轉形するための・必然的な媒介である。かゝる媒介によつて、個人的勞働は個人的勞働として否定され、互に平等に齎らされ、社會的勞働として肯定され、その社會的價値を確立する。そして、それを逆にいへば、個人的勞働は社會的勞働として社會的價値を認められるがゆゑに、その生産物は、他の如何なる種類の生産物とも交換されうるもの――すなはち商品――となりうるのである。個人的勞働の社會的勞働への轉形が斯かる媒介を必要とすることが、商品生産社會の特徴であり、それを明白に理解することが、吾々にとつて根本的に大切なのである。

吾々は以上をもつて商品價値の品質を明かにしたつもりである。よつて以下更にその分量の規定について述べようと思ふ。價値の分量は交換價値によつて表現されてゐる。しかし此の如き價値の現象形態はこれを次節に讓り、玆には暫く斯かる形態から離れて、價値量そのものについて考察せんとするのである。既に述べたやうに、一定の商品は、そのものに一般的な・捨象的な・勞働が對象化されてゐるがゆゑに、價値を有つのである。だから、その價値の大きさは、これに含まれてゐるところの斯かる勞働の分量によつて定まる。しからば、その勞働の分量は何によつて測られるか？　曰く、勞働は運動の一種であり、運動の量的存在は時間であるがゆゑに、勞働の量的存在は卽ち勞働時間である。もし勞働の品質が一定してゐるならば、その繼續時間の差異は、勞働の有しうる唯一の差異である。その意味において、勞働はそれ自身のうちに固有の自然的尺度を有つ、といふことができる。

ところで、商品の價値量は之に含まれる勞働量によつて定まり、勞働量はまた勞働時間によつて測られるといふときは、勞働者が怠惰でありまた不熟練であればあるほど、その者は一定の商品の生産のためにより多くの勞働時間を費すべきであるから、從つてその者の生産する商品は、他の勞働者の生産する同じ種類の他の商品に比べて、より多くの價値を有つかに考へられるかも知れないが、しかしさういふことは在りえない。既に述べたやうに、商品生産の世界にあつては、社會的生産のために費さるべき社會全體の勞働は、一面において無差別平等な勞働たる性質を有し、且つ商品に結晶された勞働は、かゝる性質を有する限りにおいて、初めて價値を形成するのである。だから一定の商品の價値の大きさを決定するものは、その時々における社會一般のノルマルな技術的條件と、平均程度の勞働の熟練ならびに强度とのもとにおいて、その商品の生産のため必要とされる勞働時間、簡單にいへば、社會的に必要とされる平均の勞働時間である。それゆゑ、個々の商品の生産のために費された勞働時間の分量は、事實において如何に相違してゐようとも、それが同じ種類の商品であるかぎり、商品としての價値の大きさは、全く同一である。また種類を異にする商品は如何にその使用價値を異にするとも、これが生産のため社會的に必要とさ

れる勞働時間が同じであるかぎり、互にその價値の大きさを同じうするものである。

なほ一定の商品の生産のため社會的に必要とされる勞働の分量は、勞働の生産力につれて變化する。勞働の生産力が大なれば大なるほど、一定の商品の生産のために必要とされる勞働の分量は益々小となり、逆の場合は逆である。だから商品の價値は、これに實現された勞働の分量に正比例し、勞働の生産力に逆比例する、といふことができる。

商品價値の變動はすなはち社會關係の變動である。例へば、勞働力なる商品の價値の變動は、勞働者の所得たる勞賃額の變動を意味するのであり、從つてまた勞働者階級と資本家階級との間における社會的生産物の分前の割合の變動——これら階級の相對的社會的位置の變動——を意味するのである。しかるに商品價値は、こゝに言ふが如く、勞働の生産力の變動によつて變動する。だから、窮極のところ、勞働の生産力の變動は、生産關係の上にそれに適應するところの變動を齎らすものである。このことは、これを一般的にいへば、生産關係は生産力に適應するといふことを示唆し、また資本家的社會の運動法則の基本的なるものが價値法則であるといふことを示唆する。吾々は研究の進行につれて、順序にこれらの諸問題を明かにするであらう。

使用價値の分量の增加は、つねに物質的富の增加を意味するが、しかしそれは同時に價値の大きさの減少を伴ひうる。使用價値と價値とが此の如き對立的運動をなしうるといふことは、商品に對象化された勞働の對立的規定から生ずる。勞働の生産力とは、使用價値を生産するための有用的な・具體的な・勞働としての生産力のことであり、それは與へられたる時間內に生産する使用價値の分量によつて測られる。だ

からそれは、具體的な諸形態を捨象された勞働そのものには、全然關係を有ちえない。それゆゑ、勞働の生産力が增加すれば、一定の時間內により多くの使用價値が生産され、或ひはより少き時間內により多くの使用價値が生産されうるにしても、しかも同一分量の勞働——すなはち同一時間の勞働——は、常に同一の大きさの價値を形成し、より少き勞働は、より小なる價値を形成する。だから、使用價値の分量は以前より增加しても、勞働の生産力の發展のため、これが生産に必要とされる勞働の分量が減少するならば、增加したる分量の使用價値は、價値の大きさにおいて却つて減少するのである。

以上述ぶるところによつて見れば、商品には二つの違つた種類の勞働が含まれてゐるのでなく、同一の勞働が、その生産する使用價値に關聯せしめられるか、または商品價値に關聯せしめられるかによつて、互に異つた對立的の規定を受けるのである。だから如何なる物も、使用價値でなければ、價値ではありえない。すなはちそれが無用なものであれば、その生産のため費された勞働も無用であり、それは社會的に有用な勞働として計算されず、從つて價値を構成するに至らない。一定の勞働が價値を構成するためには、それによつて生産された物が社會的に需要される使用價値たることを、その條件とするのである。『價値は自分を使用價値で表示する、そして使用價値は價値創造の一條件である。』(『資本論』、第三卷、第二分冊、ドイツ本、三五二頁)。

第二節　價値形態(價値の現象形態としての交換價値)

吾々は第一節において、各商品は使用價値および交換價値といふ二種の見地のもとに現はれるといふことを指摘し、次いで交換價値を觀察することにより、そこに隱れてゐる價値の實體を追求し、それが捨象的な・一般的な・勞働であることを發見した。今本節においては、再び價値の現象形態に立ち戻り、價値は如何にして交換價値なる現象形態を有つに至るかを問題とする。すなはち吾々の出發點は現象であつたが、ここでは斯かる現象と本質との連絡自體を問題とするのである。

既に述べたやうに、商品の使用價値は、商品體の自然的屬性に基づくのであるから、使用價値としての商品の形態は、眼に見ることのできる・手に握ることのできる・その自然的形態である。しかるに、商品價値の實體を成すものは、その商品に含まれてゐる捨象的な・一般的な・勞働であるから、吾々はその商品を手にとつて如何にこれをひねくり廻はして見ても、價値物（Wertding）としての商品を捕捉することは、絶對的に不可能である。價値は、勞働の生產物が固有する自然的の性質ではない。それは、人と人との生產關係――勞働關係――が彼等の生產した物を媒介として取結ばれる場合に、その生產關係が物の上に反射して、恰も物自體の性質の如く意識されてくるに過ぎない。だから商品の價値は、一人の商品所有者と他の商品所有者との間に成り立つ社會關係においてのみ、自らを顯はにすることが出來るのである。更に具體的に言へば、一の商品の價値は、他の種類の商品の使用價値としての自然的形態で言ひ現はされた交換價値としてのみ、初めて吾々の眼に觸れうる・吾々の手に握りうる・一つの物質的形態を有つのである。それが謂はゆる價値の現象形態としての交換價値である。かくて一の商品の交換價値は、商品としての他の使用價値を、必ずその物質的土臺（die stoffliche Basis）となすものである。

今日の社會において何人にも知られてゐることは、各々の商品は使用價値であると同時に、また貨幣價値（貨幣で表現された價値）を有してゐるといふことであるが、この貨幣價値なるものは、價値の現象形態の最も發展した段階に屬する。これが理解に到達するためには、吾々は、最も簡單な價値形態の分析から出發しなければならぬ。

（I）簡單なる價値形態（einfache Wertform）

既にしばしば注意したやうに、商品は孤立して存在しえざるものであり、商品といふ以上は必ず他の商品と交換關係を有つものである。だから

$$xAW = yBW$$

すなはち一定量の或る商品が、それと違つた分量の他の種類の商品と、交換關係におかれ、從つて xAW（Aなる商品のx量）の交換價値がyBW（Bなる商品のy量）であると表現されることは、商品の存在の仕方としては考へられる限りの最も簡單な形態に屬するのであり、この場合 Aおよび Bなる二個の商品の價値關係は、Aなる商品の立場よりいへば、その價値に向つて最も簡單な現象形態を提供するのである。ところで、すべての價値形態の秘密は、この最も簡單な形態のうちに含まれてゐる。それは、言はば商品世界の Zellenform（細胞形態）であり、ヘーゲルをして言はしむれば、An sich des Geldes であると、『資本論』第一版の脚註においてマルクスは言つてゐる。すでに述べたやうに、今日の社會においては、何兆何億といふ數に上ぼる多種多樣の商品が、盡く金何圓といふ共通の單位による價値表現を受けて

ゐる。これは驚くべき事實であつて、そこに謂はゆる das Geldräsel（貨幣の謎）が横たはつてゐるのであるが、それはただ細胞形態の發展を追跡することによつてのみ、初めて解かれうるものであり、その意味において、この細胞形態はそれ自身のうちに貨幣形態の萠芽を含むものである。吾々は斯かる萠芽の自發的發展、自己運動のうちに、貨幣形態の成立を把握しなければならぬのである。ところで、マルクスが既に『資本論』第一版の序文で言つてゐるやうに、大きなからだよりも、かゝる細胞の方が、これを研究するにより困難である。殊に吾々の研究には、顯微鏡その他のものが使用されえないのだから、吾々は吾の抽象力により、この細胞形態をその矛盾に充ちたる構成分に分解しなければならぬ。

さて xAW＝yBW なる方程式にあつては、AとBとは同じ商品であつても全くその機能を異にする。即ちこの關係内にあつては、Aの價値が表現されてゐるのであり、BはただAの價値を表現するための材料として役立つてゐるのだから、Aの方は能動的な役割を有ち、Bはただ受動的な役割を有つに過ぎない。如何なる商品も自分自身で價値を表現することは出來ない。それは鏡なしに吾々が自分自身の顏を見えないのと同じである。だから商品Aは、他の商品Bによつて、その價値を相對的に表現される。價値關係の内部において斯かる位地におかれたるものを、マルクスは相對的價値形態（relative Wertform）を採る商品と名づける。これと異なり、商品Bは、この關係内においては、少しもそれ自身の價値を表現しない。それはただAの價値を表現するための等價物としての物質的土臺を供給するに過ぎない。マルクスはこれを名づけて等價形態（Aequivalentform）に立つ商品といふ。AもBも商品たることにおいては同じでありながら、一定の社會關係のもとでは、此の如く互にその機能――社會的機能――を異にするといふこと、これが吾々にとつての主要問題である。Es handelt sich hier nicht um Definition, unter welchen die Dinge subsumirt werden. Es handelt sich um bestimmte Funktionen, welche in bestimmten Kategorien ausdrückt werden.（問題とするところは、事物がそのもとに總括されるところの・定義ではない。一定の範疇で表現されるところの・一定の諸機能が、こゝでの問題である。）マルクスは『資本論』第二卷（ドイツ本、一九七頁）で斯樣に言つてゐるが、それは今の場合にも妥當する。

相對的價値形態と等價形態とは、一個の商品の價値表現――この統一物――のなかに含まれてゐる對立物である。この二つのものは、相互に條件づけられてゐるところの、不可分離な契機であるが、しかも相互に排斥し合ふところの對立的な極であつて、それは恰もアトムにおける陽電氣と陰電氣との關係の如きものである。何故これら二つの形態をもつて不可分離的であるといふか？　曰く、如何なる商品も自分自身の價値を自ら表現することはできぬ。恰も吾々が自分の顏を見るためには必ず鏡を必要とするが如く、一定の商品は自らの價値を表現するため必ず他の商品と關係せねばならぬ。これによつて初めて、一個の商品のうちに統一されてゐる二個の對立物――商品の構成分たる使用價値と價値と――が、外見の上に（すなはち現象として）分裂し、その價値は他の商品の使用價値で表現されることにより、それ自身の使用價値と現象的に獨立するところの、別種の形態を有つことになるのであるから。しからば何故これら二つの形態をもつて對立的であるといふか？　曰く、同じ商品は同時に双方の形態で現はれることはできぬ。xAW＝yBW でなければ、yBW＝xAW である。一方が相對的價値形態に立てば、他方は必ず等價形態に立ち、他方が等價形態に立てば、一方は必ず相對的價値形態に立つ。かゝる意味において、それらは相

互に排斥し合ふところの對立的な極である。

商品の價値關係における一切の矛盾は、すべて上述の如き細胞形態に含まれてゐる矛盾の展開に外ならぬのであるから、吾々はなほ細かく之を觀察せねばならぬ。

先づ相對的價値形態にある商品Aについて觀察するに、これが價値を形成するものは、そのものの上に蓄積された捨象的な・一般的な・勞働である。しかし勞働そのものは價値ではない。それは或る物質の上に凝結し對象化して初めて價値となるのである。だからAなる商品の價値をば、捕捉することのできる或る形態に表現するためには、吾々はAに含まれてゐると同じやうな捨象的な・一般的な・勞働の同じ分量を含んでゐる他の物體、すなはちBなる商品を捉へ、それをば價値としては Aと同じであるといふ關係に置かねばならぬ。ところで、すでにAがBをば價値としては自分と同じだとして之に關係するならば、そのことはAが價値としての自分自身に關係したことになる。(BはAと同じとされる以上、AがBに關係するのは、AがA自らに關係するのである。)そして、Aは此の如く自分自身に價値として關係することによつて、同時に自らを使用價値としての自分自身から區別する。かくてAの價値は、Aの直接的な存在から區別されるところの價値形態をBの上に有つ、といふことになるのである。この場合Bは、Aと同じやうに或る使用價値であるけれども、しかもそれは、以上の如き價値關係の内部においては、Aに含まれてゐると同じやうな捨象的な・一般的な・勞働の凝結物としてのみ、すなはち價値としてのみ、現はれる。それは、物の重さを測るための分銅が、銅または鐵として存在するのでなく、單なる重さとして存在するこ

とにより、總ての物質に共通するところの、眼に見えざる重さをば、眼に見ることのできる形態として表現するのと、或る點において同じである。もちろん、他の物體との關係から離して、分銅そのものを手にとつて見るならば、それは單なる銅または鐵に過ぎないのと同じやうに、商品Bは、Aなる商品との關係を離れては、Aそのものと同じく、ただ或る使用價値たる物體に過ぎないのであり、如何に之を打ち碎いても、その物自身の中から價値物を――これが價値だといふ物を――見出すことはできない。このことは、商品BがAとの價値關係を經ふことによつて、裸にされてゐる場合よりも、遙に重要な意義を有するに至るといふことを示す。

たとひ一個の平凡人であつても、貴族たり國王たる地位に置かれ、その地位に相應する金モールの制服を經ふと、裸にされてゐる場合よりも、遙に重要な意義を有し、社會的に重大な作用をなすやうになる。等價形態に置かれた商品が恰もそれである。この等價形態に置かれた商品は、次第に發展して遂に貨幣形態を採るに到るものであるが、既にさうなれば、それは何人にも注意され得るやうな重大な作用を發揮することになる。例へば私が玆に一圓の貨幣を所有してをれば、私はそれを車夫に支拂ふことにより、私を車に乘せて一定の距離を走らせることができる。斯樣に金または銀の小さな片が、人を走らせるだけの偉力を有つといふことは、實に驚くべき事實であるが、これは畢竟、金なり銀なりが、一切の商品に對し等價形態に立つことにより、貨幣となつてゐるがためである。しかしその金なり銀なりがよく貨幣となりうるのは、一切の商品と價値關係を結んでゐるからであつて、もしその關係を脱退したならば、金または銀は單なる金屬の塊に過ぎぬのである。貨幣がよく貨幣となる

のは、それが一定の社會關係の物的表現となつてゐるからである。だからその社會關係から離したならば、貨幣そのものの自然的形態は全然元のまゝであつても、それは絶對的に貨幣たる性質を失つてしまふ。何萬何億圓といふ貨幣を有つてゐても、誰もゐない孤島に漂流したのでは、その貨幣はならないのである。貨幣なるものは、商品交換の社會にのみ生まれるものであり、それは私有財産と分業とにより最後の單位にまで分解されてゐる個人が、再び社會的に結びつくための手段であり、無意識的に結ばれてゐる社會關係の紐帶となつてゐるものだから、その貨幣なるものの性質は、人々により初めから明瞭に意識されるといふわけにゆかず、それは或る神秘的なものとして吾々の前に現はれる。科學としての經濟學の任務は、すなはちこの神秘性を曝露することにある。

斯樣にして價値關係の媒介により、Bなる商品の自然的形態が Aなる商品の價値の現象形態となる、言ひ換へれば、Bなる商品のからだが Aなる商品の價値の鏡となる。しかし Bそのものは、この場合、價値としては何等の表現をも受けない。ただ Aなる商品の價値が、Bなる商品の使用價値で表現されることにより、Bは Aに對する關係において等價形態に立つといふだけのことである。

次に相對的價値の量的規定について一言する必要がある。すでに述べたやうに、AとBとの關係において、その基礎となるものは、A=Bである。AおよびBのうちには、同じ單位に還元されうる品質の同じものが含まれてゐるといふことが、基本の事實である。この事實を前提として、初めて xA=yB といふ量的關係が生ずる。そして此の量的關係においては、ただに Aの價値が表現されるのみならず、それが一定の大きさに表現されることによつて、謂はゆる交換價値となるのである。現象形態にのみ捉はれてゐる俗流經濟學者は、この表面に現はれた量的關係をのみ眼中におき、その底に横たはるところの A=B を看取することができないがために、彼等は價値と交換價値とを區別することができず、從つて價値をば單なる比率と考へてゐるのである。だが、交換價値は價値の現象形態に過ぎない。吾々は次に、Aなる商品の交換價値の變動に關し、その主なる場合を列擧して、價値と交換價値との關係を一層明にするであらう。

I　Aなる商品の交換價値は、商品 B の價値に變化なきかぎり、A 自身の價値の變化に正比例して變化する。

II　また商品 Aの價値に變化なきかぎり、それは商品 Bの價値の變化に逆比例して變化する。從つて第一の場合と第二の場合とでは、交換價値に關する同じ程度の變動が、全く違つた原因から生じうる。例へば、Aの價値が倍加したに拘はらず、Bの價値に變化がなければ、Bによつて表現される Aの交換價値は倍化すると同時に、たとひ Aの價値には變化なくとも、Bの價値が半減すれば、Bによつて表現される Aの交換價値はやはり倍加するが如くである。

III　AおよびBの生産に必要な勞働の分量が、同時に、同じ方向に、同じ割合で變化したならば、Aおよび Bの價値は共に變化するに拘はらず、Bによつて表現される Aの交換價値には、何等の變化も起らない。

IV　AおよびBの生産に必要な勞働の分量が、同時に違つた方向に、或ひは同じ方向であつても違つた割合で變化したならば、それにつれて Aの交換價値は變動する。

以上列擧するところによつて見れば、一つの商品の價値は不變であつても、その交換價値(相對的價値)

は變化しうる。また、その價値は變化しても、その交換價値は不變でありうる。なほまた、價値と交換價値との双方の上に變化が起つても、その變化は必ずしも一致すると限らない。

現象形態にのみ捉はれてゐる俗流經濟學者は、價値の現象形態たる交換價値そのものをもつて價値であるとしてゐる。從つて彼等にとつては、價値は一の比率にすぎざるものとなる。かゝる見解を採れる學者としては、古くはベイリイその他の人々がある。比較的に新らしいところでは、例へばヂヱボンズの『經濟學理論』に、次の如く述べてある。

Value implies, in fact, a relation……A student of Economics has no hope of ever clear and correct in his ideas of the Science if he thinks of value as at all a thing or an object, or even as anything which lies in a thing or object……the word Value, so far as it can be correctly used, merely expresses the circumstance of its exchanging in a certain ratio for some other substance. If a ton of pig-iron exchanges in a market for an ounce of standard gold, neither the iron is value nor the gold; nor is there value in the iron nor in the gold. The ro.ion of value is concerned only in the fact or circumstance of one exchanging for the other……

Value in exchange expresses nothing but a ratio, and the term should not be used in any other sense. To speak simply of the value of an ounce of gold is as absurd as to speak of the ratio of the number seventeen. What is the ratio of the number seventeen? The question admits no answer, for there must be another number named in order to make a ratio; and the ratio will differ according to the number suggested. What is the value of iron compared with that of gold?—is an intelligible question. The answer consists in stating the ratio of the quantities exchanged.— W.S. Jevons, The Theory of Political Economy, 1871, (1911 版, pp. 77, 78)

『價値は、實に、一つの關係を意味する。……經濟學の研究者が、價値をば、苟くも一つの物または對象として、乃至一つの物または對象のうちに存する何等かの物として、考へてゐるならば、彼れの斯學に關する觀念は、到底明瞭且つ正當でありうる望みはない。……價値なる語は、それが正當に用ひられうる限り、ただ單に、一つの物が或る他の物に對し一定の比率において交換されるといふ事情を現はすに止まる。

『もし市場において一噸の銑鐵が一オンスの金と交換されるとしても、鐵も金も價値ではなく、また鐵にも金にも價値があるのではない。價値の觀念は、ただ、一つの物が他の物と交換されるといふ事實または事情にのみ關係してゐる。……

『交換價値はただ比率を現はすに止まる、この言葉はその他の如何なる意味にも用ひらるべきでない。單に一オンスの金の價値といふことが不合理なのは、恰も十七といへる數の比率といふことが不合理なのに等しい。十七といふ數の比率は何かと尋ねられたならば、吾々は解答に苦む。何故かといへば、比率を作るためには指定された數の外に他の數がなければならず、そして比率は提出される數に應じて相違するからである。しかし鐵の價値は金の價値と比較して如何ほどであると云ふのならば、合理的な質問である。交換される分量の比率を擧ぐれば、その答になるのである。』

この說明のうちには一つの眞理（價値は交換價値をその必然的な現象形態とするといふこと）が含まれてゐるが、それは玆に評論すべき問題ではない。ただ玆に注意すべきことは、此の如く、價値をもつて一つの比率に過ぎないとするならば、社會全體の物の價値が一般的に騰貴するとか、または下落するとかいふことは、到底あり得ざることになる、といふことである。このことも古くから經濟學上の一原理として說かれ來つたもので、例へばヂ・ン・ステュアト・ミルの『經濟學原理』には、次の如く述べてある。

There cannot be a general rise of values. It is a contradiction in terms. A can only rise in value by exchanging for a greater quantity of B and C; in which case these must exchange for a smaller quantity of A. All things cannot rise relatively to one another. If one-half of the commodities in the market rise in exchange value, the very terms imply a fall of the other half; and reciprocally, the fall implies a rise. Things which are exchanged for one another can no more all fall, or all rise, than a dozen runners can each outrun all the rest, or a hundred trees all overtop one another.——J. S. Mill, Principles, Bk. III, Ch.I, §4. (Ashley's ed., p. 439.)

『價値の一般的騰貴といふことは在りえない。それは言葉の矛盾である。AはBおよびCのより大なる分量と交換されることによつてのみ、價値を高めうるが、その場合には、BおよびCはAのより小なる分量と交換されなければならぬ。總ての物は互に相對的に騰貴することは出來ぬ。もし市場

において貨物の半分だけが交換價値を高めたとするならば、そのこと自身が他の半分のものの下落を意味する。それと同じやうに、一方のものの下落は、他方の騰貴を意味する。相互に交換されるものの全部が下落したり騰貴したりすることのできぬのは、恰も一ダースの競走者の各々が、總て他の者に勝つことができず、また百本の木が、總て互に他を凌ぐことができぬのと、同じことである。』

交換價値そのものをもつて價値とする見地からは、當然に此の如き見解が生れる。これと異なり、價値の實體をもつて對象化された勞働となす吾々の見地からすれば、諸商品の價値總量が全體として或ひは減少し或ひは增加しうるのである。

これを要するに、Aなる商品そのものは、使用價値および價値であるけれども、しかしその價値は、商品Bによつて表現された交換價値としてのみ、初めて吾々の手に觸れうる感覺的のものとなるのであるから、正確にいへば、各商品は使用價値であると同時に、また他の商品により交換價値として表現されるところの價値である、といふべきである。

以上吾々は、主として相對的價値形態について考察したが、更に進んで等價形態を吟味するならば、吾吾はそこに次の如き四つの特徵を發見する。

第一、等價形態にあつては、使用價値がその反對物たる價値の現象形態となつてゐる。

既に述べたやうに、xAW=yBWといふ價値表現の關係内にあつては、Aの價値がBの使用價値で表現されるのだから、これをBについて言へば、その使用價値が價値の現象形態となつてゐるのである。この

場合Bは價値そのものとして妥當するがゆゑに、使用價値としてのBの分量そのものがAの價値の大きさを示すことになる。此の如く價値が現象形態の上ではその反對物となつて現はれてゐるといふこと、そこに、現象形態はしばしば事物の本質を顚倒するものだと云ふことの、一例が横たはつてゐる。

第二、等價形態にあつては、具體的勞働がその反對物たる捨象的な・一般的な・勞働の現象形態となつてゐる。Bなる商品は、言ふまでもなく、或る具體的な勞働の生産物である。しかし、それがAなる商品の價値を表現する場合には、それに含まれたる勞働は、一定の使用價値を生産するための・從つて特定の具體的形態を具へた・勞働としてではなく、ただ人間の勞働力の支出であるといふ性質においてのみ、從つて總ての具體的諸形態を捨象され無視されたものとしてのみ、現はれるのである。このことは、その發展した形態においては、貨幣が何等の使用價値をも有たないといふことの上に現はれる。

第三、等價形態にあつては、私的勞働（Privatarbeit）がそれと反對の形態、すなはち直接に社會的な形態を有つた勞働になる。けだし生産手段が私有されてをり、從つて總ての使用對象物が互に獨立して經營されてゐる私的勞働の生産物として現はれる社會においては、それらの勞働生産物は、既に述べたる如く、交換過程の媒介によつて、言ひ換へれば商品に轉形することによつて、初めて社會的生産物となりうるのである。もちろん、これらの私的勞働が自然成長的（naturwüchsig）な社會的分業の關節となつてをり、從つてその生産物が社會全體の種々なる欲望を滿すために、適當な比例において種々なる種類の使用對象物から成り立つてをるならば、これら私的勞働の社會的聯絡は物材的（stofflich）には既に存在してゐるわけであるけれども、しかし斯かる聯絡は、これら生産物の交換により媒介されて、初めて實現され

るのである。だから私的勞働の生産物は、その自然的形態が同時に他の商品に對しては價値としての形態である場合、すなはちそのものが他の商品と交換されうるといふ形態を有つ場合にかぎり、初めて直接に社會的形態を有つのである。しかるに、このことは、吾々のすでに見たる如く、等價形態に立つ生産物についてのみ起る。等價形態に立つBは、恰も分銅が秤量される物の重さのみを表現してゐるやうに、價値のみを表現することにより、價値としてはAと同じものであり、それと取り換へられうるといふ關係に置かれてゐる。すなはち、それに含まれてゐる一定の具體的勞働は、他の商品に含まれてゐる勞働と同じ形態のものとされてゐるのである。しかし種々なる商品に對象化された勞働の具體的形態は互に相異なるのであるから、それらの形態が相等しとされうるのは、ただ人間的勞働力の支出としての・すなはち人間的勞働一般としての・資格においてのみである。斯樣にして等價物に含まれてゐる一定の具體的勞働は、すでに見たやうに、抽象的な人間的勞働の Verwirklichungsform（現實化された形態）または Erscheinungsform（現象形態）となるのであるが、それゆゑにまた、それは、他の諸商品に含まれてゐる勞働と同じやうに一の私的勞働であるにも拘らず、しかも直接に社會的な形態を有つた勞働となりうるのである。

このこともまた、後に至つて述べるやうに、一般的（普遍的）等價形態に立つ貨幣において、その極度の發展相を示す。商品生産社會において生産される有らゆる生産物は、互にその種類を異にするところの種々雜多なる具體的な使用價値である。しかし如何なる生産者もみな一樣にこれを價値として生産する。言ひ換へれば、それは生産者自身が自ら使用せんがために生産されるのでなく、社會に生産されてゐる種々雜多なる生産物のうち隨意のものと之を交換せんがために生産されるのである。

それゆゑそこには、互に品質を異にする使用價値が生産されながら、しかもそれらのものは全く互に品質を同じうする價値とならなければならぬといふ一の矛盾が生まれる。この矛盾は貨幣なるものがあらゆる種類の商品に對し等價形態を獨占することによつて解決されるのであるが、さうなれば、貨幣材料たる金屬を生産するための具體的勞働は、そのまゝ直接に社會的勞働たる形態を有つことになるのである。

第四、等價形態の特徴として更に擧ぐべきことは、マルクスの謂はゆる Der Fetischcharakter der Warenform（商品形態の物神崇拜的性質）が、相對的價値形態におけるよりも等價形態において一層著しい、といふことである。こゝに商品の物神崇拜的性質といふのは、マルクスが『資本論』第一卷第一章第四節で詳論してゐるところであり、また他の場所（『資本論』第三卷第二分冊、ドイツ本、四一七頁）で die Verdinglichung der gesellschaftlichen Produktionsbestimmungen und die Versubjektivierung der materiellen Grundlagen der Produktion（社會的生産規定の物化および生産の物質的基礎の主體化）と言つてゐるところのものである。こゝにも事物の本質と現象形態との顚倒が行はれてをり、且つそれは資本の生産物としての商品の上に更に著しく現はれ、かくて資本家的生産全體を特徴づけてゐるものである。

すでにしばしば注意したやうに、種々なる使用價値たる勞働生産物が商品形態を有つといふこと、從つてそれらの使用價値が同時に價値であるといふことは、それらのものが重さを有つてをるといふのと違つて、決してその自然的性質に屬するのではない。それらのものは、その所有者により相互に交換されることによつて、言ひ換へれば、一定の社會關係のもとに置かれることによつて、初めて商品となるのであ

り、價値形態を有つに至るのである。だから xAW = yBW なる方程式は、AおよびBの生産のために必要とされた甲の勞働と乙の勞働とが人間的勞働としては互に相等しいとされるといふこと、甲および乙が互にその勞働生産物を交換することにより一定の社會的關係を結ぶといふこと、等を意味してゐるのである。しかし、この場合、甲および乙といふ人と人との關係は、AおよびBといふ物と物との關係となつて現はれる。すなはち甲の勞働と乙の勞働とが互に等しいといふことは、Aなる商品とBなる商品との價値が相等しいといふ形で現はされ、甲と乙との社會關係は、AおよびBなる二個の商品の價値關係として現はされる。そこで、一旦物と物との間に此の如き關係が造り出されると、それは人間自身が造り出したものであるにも拘らず、物それ自身の關係として人間から獨立し、人間に對立するやうになる。(Die Ökonomie handelt nicht von Dingen, sondern von Verhältnissen zwischen Personen und in letzter Instanz zwischen Klassen; diese Verhältnisse sind aber stets *an Dinge gebunden* und *erscheinen als Dinge*.— Neue Zeit. 39 Jahrgang, I Bd S. 420.) すなはちその本質においては物を媒介としての人と人との社會關係が、その直接性においては、物と物との關係または物それ自身の自然的性質たる現象形態を有つことになるのである。

このことは、等價形態に立つ商品において、特に著しく現はれる。何故なれば、等價物としての商品にあつては、その自然的形態そのまゝが、他の商品に對しては價値としての形態となつてをり、それはまことに sinnlich übersinnliches Ding（感覺的であると同時に超感覺的な物）となつてゐるからである。金は金なるがゆゑに貨幣であるといふが如き謬想は、全くこゝから生ずるのである。

さて以上述べたるが如き諸々の特徴は、要するに價値の現象形態が正にその本質を顚倒したものとなつてゐるといふことに歸着するが、吾々は更に、何が故に此の如き顚倒が生ずるかについて、一言するであらう。

波多野博士の『哲學史要』(二六三頁以下)には『昔時コペルニクスは、地が世界の不動の中心にあらざるを說きて、常識に一大打擊を與へたると同時に、何故に地は不動に見ゆるかを說明せしが如く、今やカントは、自然は主觀より獨立なる實在に非ざるを說きて、常識に根本的大打擊を與へたると同時に、何故に自然は實在として意識せらるるかを說明せり。カントが哲學界のコペルニクスを以て自ら擬したるは、故なきに非ざる也』と說いてあるが、プロレタリア經濟學は、斯學の領域の到るところにおいて、かゝる仕事を果さんとするものである。常識の誤謬が何が故に、如何にして、生ずるかを說明しなければ、その誤謬を aufheben (止揚) したことにならぬからである。

けだし、すでに述べたやうに、もし一切の勞働を停止されたなら、一年といはず數週日のうちに、如何なる國民でも死んでしまふ。それと同時に、社會全體の勞働は、如何なる社會形態のもとにあつても、種種なる欲望に適應するやうに、一定の割合において種々なる生產部門に配分されてゐなければならぬ。このことは一の自然法則であるから、それは決して廢除されうるものでなく、ただかゝる法則が自らを貫通するところの形態のみが、社會形態を異にするに從つて異なるのみである。共產主義の社會にあつては、この自然法則は現象の上に直接に現はれ、個人の勞働は何等の媒介なしに直接に社會的形態を採る。これと異なり、すべての生產物が個人の私有物として現はれる社會にあつては それらの私有物が何等かの仕方で社會物に轉形されねばならぬ。しかるに斯かる轉形は、それらの生產物の私的交換によつて行はれるの外はない。これを或る個人の立場から言へば、彼れの生產するところのものは、彼れ自身の需要に充てるのではなく、彼れにとつては全く無用のものである。だから彼れは、社會において生產されつゝある種種なる生產物のうち 彼れの必要とするものを、隨意に選擇して、これを彼れの生產物と交換しうるのでなければならない。このことは、彼れの生產した使用價値は價値でなければならず、彼れの費した個人的な・具體的な・勞働は、一般的な・捨象的な・勞働の一構成分でなければならず、それは彼れの私的勞働でありながら社會の爲めには社會的勞働の一分子たる資格を有つたものでなければならぬ、といふことを意味する。そして、それらのことを、彼れは交換過程において、すなはち市場において確めるのであるが、それは豫め彼れに保證されてゐることではなく、彼れの生產物を市場に持ち出した後に初めて知られることであり、もし市場においてこれを否認されたならば、彼れの生產は失敗に歸し、從つて彼れの生產は社會から除外されるのである。斯樣にして社會的勞働の聯絡、その比例的配分が實現されてゆくのであるが、しかしそのことは、互に獨立せる個人と個人との間における物と物との私的交換が齎らすところの無意識的結果に過ぎないから、人々の間における社會的な勞働聯絡は當事者によつて意識されず、直接には彼等の眼に觸れず、その本質はこれと反對の現象形態で覆はれ、彼等自身の社會的運動が彼等にとつては物の運動たる形態を採り、彼等はこれを制御する代りに、逆にその制御のもとに立つことになるのである。

以上の如き理由により、現象形態は必然的にその本質と逆になるのであるが、商品世界に住む人々にと

つては、かゝる現象が彼等の意識における表象であるがゆゑに、つまり商品世界における社會的意識は、彼等の社會的存在によつて規定されることにより、必然的にその本質を顚倒したものとなるのである。そこで現象形態に捉はれた俗人の常識を系統づけるに止まるところの、謂はゆる俗流經濟學にあつては、價値、貨幣、資本、等々をば、すべて物の自然的性質に歸することになり、かくすることによつてまた資本家的社會を觀念的に永遠化することとなるのである。これと異なり、謂はゆる正統派經濟學にあつては、現象の底に潜む本質を把握することができ、從つて價値の說明についても勞働價値說を採ることができたのであり、そこに彼等の科學的功績が存在するわけであるが、しかし彼等は資本家的社會をもつて永久的な自然秩序と信じてゐたがゆゑに、(それゆゑに彼等は何等怖るるところなく、資本家的社會の內的聯絡を曝露することが出來たのではあるが)、社會的勞働の聯絡、その比例的配分が、交換價値なる形態を媒介として行はれるといふことを、ただ自然的であるとのみ考へ、從つてこれをば斯かる社會に特有な歷史的現象となさず、從つてまた何故に斯かる特殊の形式が生ずるかについては、嘗てこれを問題ともしえなかつたのであり、そこにブルヂョア經濟學の——すなはちブルヂョア的社會秩序を永久的と信ずる學派の——根本缺陷が橫たはつてゐるのである。

以上吾々は、最も簡單なる價値形態におけるAおよびBなる商品の各々の機能を分析的に述べたが、最後にこれを綜合するならば、此の如く機能を異にするAとBが相關係することによつて、Aの自然的形態は使用價値として、Bの自然的形態は價値の現象形態すなはち交換價値として現はれ、かくて初めてAなる商品のなかに含まれてゐる使用價値と價値とのinnere Gegensatz(內部的對立)が二つの商品AおよびBの關係によりäussere Gegensatz(外部的對立)として表現され、初めてAがwirklich(現實的)に商品となると同時に、商品なるBegriff(概念)は、これによつて初めてobjektiviren(客觀化)することが出來るのである。けだしAに含まれた價値實體は、ただ人間的勞働力の支出としての、捨象的な勞働であるから、それが吾々の眼に見ゆるやうに規定されるためには、一定の具體的勞働として外界の材料に對象化されねばならず、從つてAの價値は少くとも他の一つの商品Bを材料としなければ、吾々のための現象となりえないのである。しかし、それと同時に、Aの價値は、必ずしもBでなくとも、もしB以外にC・D・E・等々の商品があれば、それらのものによつても、同樣に表現されねばならぬ。何故なれば、Aは、價値としては、他のあらゆる商品と同一物でなければならぬから。そこで價値形態の發展——商品なるBegriff(概念)の客觀化の發展——は、商品交換の發展に伴ふのである。かくてAの價値は、B・C・D・E・等の種々なる商品により、いろいろに表現されることになり、價値形態は簡單なものから擴大される姿に發展する。

(I) 擴大されたる價値形態(entfaltete Wertform)

第一に述べた價値形態は、實際には、ただ商品交換の第一歩、すなはち生產物が偶然的な交換により、例外的に、且つ瞬間的に、商品となる時代に現はれる。だからそれは、簡單なる價値形態であると同時に、個別的なる・または偶然的なる・價値形態である。生產物の交換は、自足經濟內において偶然に生じたる

過剩生産物の交換から始まる。この場合には、生産物は商品として生産されるのではなく、ただ使用對象としてのみ生産されるのである。けれども或る特定の生産物が過剩となるときは、(それは或る程度以上の勞働生産力の發展を意味する)、それは生産者自身にとつて使用價値たることを失ふ。そしてそれは既に使用價値たることを失ふがゆゑに、その所有者にとりては他人の生産と交換しうるものとしてのみ價値を有するものとなる。簡單に言へば、それは使用價値の捨象によつて價値に轉形する。これはヘーゲルの謂はゆる量より質への轉化の一例であり、これによつて生産物は初めて商品となる。卽ちそれは商品として生産されるのではなく、交換されることによつて初めて商品となるのである。だが、それは交換されると同時に、消費の目的に充當されることにより、直ちに商品たる性質を失ふ。ゆゑに、かゝる場合における商品の存在は、例外的であると同時に瞬間的であり、その交換の割合は、當事者の主觀的個人的事情によつて、偶然的に決定される。勞働はまだ偶然的にしか社會化されるに至らず、從つて社會的勞働がその捨象性において商品價値の實體を形成するといふが如きことも、現實にはまだ行はれない。だから第一の價値形態について述べたところは、AとBとの交換關係を、最も發展したる商品生産社會の一つのElementとして考察する場合に、初めて十分に妥當するのである。ところで、或る種の生産物が例外的にでなく、習慣的に、他の種々なる生産物と交換されるやうになると、事情がやゝ變化してくると同時に、價値形態もまた發展して次の如き擴大された・または伸張された・形態を採るやうになるのである。

$$zWA = uWB = vWC = wWD = xWC = yWE = u.\ s.\ w.$$

擴大された價値形態の一實例として、私はこゝに次の記事を引用しておく。"Evans, Among primitive peoples in Borneo, 1922 (第十五章冒頭) を見ると、獵頭族 (headhunter) として知られてゐるボルネオ土人のうち、最も優勢なDusun族について次の如く記載してある。

『Dusunの富は、少くとも極く最近までは、殆ど全部が財産から成り立つてをり、〔玆に財産といふは、貨幣價値を有たないところの、從つて個人的使用價値をのみ有つてゐるところの、財産といふ意味である〕、貨幣は最大の困難を以てするにあらざれば、之を得ることができなかつた。現在においてさへも、財産〔貨幣以外の財産の意味〕に對する愛執は、非常に根深く彼等の間に滲み込んでをり、Dusunの男女の唯一の考は、彼等の貯蓄をば貨物にして置くといふことにあるので、村々に貯藏されてゐる硬貨も、恐らくたいした分量にはなつてゐないであらう。

『主に歡迎される財産の形態は、古い眞鍮製の銅鑼、――その年代および音の鑑定については、彼等は非常に長けてゐる、――その他の眞鍮細工の古器物、(例へばChelapaと稱する大きな檳榔樹製の箱)、水牛、牛、支那人の店で賣つてゐる黑藍色の布などである。またTuaranおよびPaparにおいては、古い支那瓶が神聖視され、年々それに犧牲が供へられる。

『昔は眞鍮製の小銃や、Kris〔武器の名〕や、槍なども、やはり好ましい財産とされてゐたが、しかし其等の物の使用が廢たると共に、今日では餘り欲求されなくなつた。……

『總てこれらの品物は、特に要求されてをり、そして從前の取引は、全く物々交換の方法で行はれてゐたので、より高い品物は、より安い品物の何倍に値するといふやうに言ひ現はされ、例へば一個の銅鑼は何匹の水牛に値するとか、一個の瓶は眞鍮彈の何ピクル〔ピクルは重さの單位の呼稱〕に値す

るとか、一個の Kris は織物の何 kuya〔織物の一卷に對する呼稱〕に値するとか稱されることにより、次第に一種の價値標準ができた。つまり、前に列擧した品物は、誰でもが喜んでこれを受取り、言はば一種の legal tender のやうになつてゐるので、それを基として他の物の價値が現はされ〔この點は、事實の解釋が逆である〕、かくて一種の粗大な通貨制度が樹立さるるに至つたのである』。(『我等』第七卷第一號、大正十四年一月發行、に載すところの拙稿『價値論斷片』)

以上の記事は正確ではないと思はれるが、ともかく之によつて、銅鑼とか、瓶とか、Kris といふ武器などが、相並んで擴大された價値形態を作り、自分等は何れもそのうちに在つて相對的價値形態を占めてゐることが分かる。

この場合には、Aなる商品の價値が、B・C・D・E・F・等々その使用價値を異にする種々なる商品によつて表現されるのであるから、等價形態に立つ諸商品の特定の使用價値は、Aの價値表現のためには全く問題とされないといふこと、從つてまた、商品 Aの價値を形成するものは、無差別な一般的な人間的勞働であるといふことが、初めて明白に表面に現はれる。この點で、それは前に述べた個別的な價値形態よりも、進んだものである。けれども、それは、商品世界における完全なる且つ統一的なる價値表現の形態とはなりえない。けだし、等價形態に立つ商品は、新たなる商品の發生につれて、いつまでも無限の系列に引き伸ばされるのであるから、相對的價値形態に立つ商品の價値表現は、この場合決して完成されるといふことがない。(それはヘーゲルの論理學にいふ schlechte Unendlichkeit〔惡無限〕の場合に當る、――Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften, S. 115.) 第二に、それは互に相違せる種々なる價値

表現の混合から成り立つ。第三に、Aの外に・B・C・D・その他の商品の價値をこれと同じ形態で表現するためには、それらの商品が A と同じやうに代はる代はる相對的形態に立ち、且つその價値形態は相異なれる無限の系列から成ることにならざるをえぬ。相對的價値表現に關する此の如き缺陷に應じて、等價形態もまた完成されえない。何故なれば、等價形態は或る特殊の商品によつて獨占されてゐるのでなく、それは種々なる種類の商品によつて占領されてゐるのであり、それらのものが相集まつて初めて抽象的な人間的勞働の現象形態となつてゐるのだから。(それゆゑにマルクスはかゝる價値形態を名づけて totale Wertform とも言つてゐるのである。全體的の關係において初めて、價値が――抽象的な人間的勞働が――表現されてゐるのであり、一つ一つの商品を取つて見るならば、何れも抽象的な人間的勞働の完全なる現象形態とはなつてゐないからである。) 價値表現の此の如き不完全さは、それがなほ發展せねばならぬことを暗示してゐる。

この第二の價値形態から次項に述ぶべき第三の價値形態への Uebergang (推移) は、つぎの如くにして行はれる。第二の價値形態は、實は、つぎに列擧するが如き第一の價値形態の合計から成り立つてゐるものである。

zWA = uWB
zWA = vWC
zWA = wWD
……

ところで、このことは、Aなる商品の所有者が、B・C・D・等の商品所有者と交換關係を結ぶといふことを意味するのであるから、それは當然に、B・C・D・等の商品所有者がそれらの商品をAなる商品と交換することを意味する。從つてこれらB・C・D・等の商品の價値は、すべてAによつて表現されるのでなければならぬ。それゆゑ前に掲げた方程式のうちには、すでに an sich（それ自身のうち）に、implizite（含蓄的）に、次の如き逆の關係が含まれてゐるのである。

uWB=zWA
vWC=zWA
wWD=zWA
……

それで之を統一的に示せば、次に掲ぐるが如き一般的價値形態が生ずる。

（Ⅲ）一般的價値形態（Allgemeine Wertform.）

uWB ＝
vWC ＝
wWD ＝
xWE ＝ zWA
yWF ＝
その他＝

交換の初期にあつては、人々は自分にとつて必要のない生産物をば、その必要とする他人の生産物と、直接に交換してゐた。謂はゆる物々交換——barter——なるものが、それである。しかるに、此の如き交換には、交換當事者の要求の不一致のために、非常な不便が伴ふ。それゆゑ交換が廣く行はれるやうになると、自然の成行として、廣く一般の人々の需要する且つ保存に耐えうる物が、必ず交換における一方の等價物として用ひられるやうになる。すなはち人々は、先づ自分の生産物と交換して此の一般的な等價物——すなはち何人もその受領を拒まざるべき特定の生産物——を手に入れ、しかる後、更にこれと交換して自分の必要とする生産物を手に入れるやうになる。さうなると、直接なる生産物の交換は、變じて賣買——賣ることと買ふこととの二つの行爲の統一——となるのであり、それと同時に、商品の價値形態は、第三に掲げたやうな一般的價値形態を採ることになり、しかる限りにおいて、等價形態は一定の生産物によつて獨占され、その生産物が一般的等價物たる機能を有つことになる。

一般的價値形態の特徴は、諸商品の價値表現が簡單に且つ共通的に行はれ、從つてその價値形態は一般的である、といふ點にある。第一に述べた簡單な・または個別的な・價値形態にあつては、例へば米一升の價値が酒五合に等しとされ、また着物一枚の價値が織物一反に等しとされることにより、米の價値は米自身の使用價値と異なる酒によつて、また着物の價値も着物自身の使用價値とは異なつてゐる織物によつて、表現されるけれども、酒と織物との間には、共通な價値の表現を缺くのである。また第二に述べた擴大された價値形態にあつては、米一升の價値が、或ひは酒五合に等しく、或ひは着物一枚に等しく、或ひは織物一反に等しといふやうに、樣々な使用價値で表現されるのであるから、第一の形態におけるよりも

一層完全に、米の價値はそれ自身の使用價値と異なつた形態で表現されるけれども、しかし酒または着物等の價値が表現される場合には、更に他の總ての商品が等價形態において現はれるのであるから、この場合にも、依然として諸商品に共通する價値の表現が缺けてゐるのである。しかるに茲に問題とせる一般的價値形態にあつては、種々様々な使用價値から成る總ての商品の價値が、それらの商品から除外されてゐる或る特定な一商品Aのみによつて表現されるのだから、それは einfach（單一）であると同時に、すべての商品の價値が同一の商品Aによつて表現されるのだから、それは einheitlich（統一的）である。かくて商品Aなるものは、他のすべての種類の商品に對し、その共通な一般的な價値の姿となる。それゆゑ、或る一個の商品例へばBの價値がAで表現されるときは、Bの價値はただに自分自身の使用價値から區別されるのみならず、またあらゆる使用價値から區別され、すべての商品に價値として關係する。（第一、第二の價値形態にあつては、等價形態に立つ商品のみが、相對的價値形態に立つ商品に對し價値として關係し、相對的價値形態に立てる商品の交換價値を表現するに止まる。しかるに、第三の形態にあつては、すべての商品が同じ鏡を見てゐるやうなもので、その鏡の中で相互に關係する。）かくてBはかゝる價値形態において初めて一般的に社會的な形態を有つこととなり、これによつて諸商品の全面的交換が初めて可能となる。

これによつて見れば、價値形態は、この階段まで發展することにおいて初めて、價値概念に適應するものとなる。けだし價値形態は、諸々の商品をば、無差別平等な人間的勞働の凝結物として相互に erscheinen せしむる（現はれしむる）形態でなければならぬが、今や諸商品はすべて商品Aに等しとされることにより、品質上互に相等しきものとされるのである。なほそれと同時に、それは分量的に比較され、相互に一定の價値量として表現される。すなはち uWB=vWA であり、vWC=zWA である等のことは、とりも直さず、uWB=vWC 等のことを表現することとなるのである。だがB・C・D・E・等は直接に相互に交換されうる形態にあるのではない、一般的に直接に交換されうる形態にあるものはAだけであり、それを媒介としてのみ他の諸商品は相互に交換されうる。かくて商品に含まれる使用價値と價値との對立は、必然的に價値形態の對立のうちに現はれるのである。すなはち Wertsubstanz（價値の實體）および Wertgrösse（價値の大きさ）と Wertform（價値形態）との間には、内的な必然的な連絡が存するのである。

一定の範圍において一般的等價物となりし商品、從つて或る程度において交換の媒介物として使用されし商品の實例として、吾々は織物、家畜、貝、穀物等を擧げることができる。支那で斯かる地位を占めた商品は貝と布とで、殊に貝は可なり廣い範圍に亙つて一般的等價物として通用してゐたものと思はれる。そのことは、貨幣と云ひ貨物と云ふ場合の貨が貝に基づくによつても推し知られるが、その外にも斯かる例は甚だ多い。例へば物を出すを賣と云ひ、物を入るを買と云ひ、賣買を業とするを賈と云へるを初めとし、その他、價、販、貿、質、賃、費、貯、資、賜、賚、賞、償、贖、賄、賂、贈、贏、賊、賽、賑、財、寶等、經濟に關係ある語は多く貝に基づいてゐる。なほ英語で財の義を有せし goods が後には善の義を有し、評價の義を有せし esteem が轉じて尊敬の義をも有するに至り

しと同じやうに、遂には有形上より無形上に及ぼし、等しく貝字に基づいて貴、賤を分かち、あるひは貧、賢、等の字を造るに至つてゐる。これらの場合は、貝によつて價値を代表せしめたものである。

次に布とは廣義にて衣類といふほどの意味である。それが一般的等價物として相當に廣く通用したことは、貨幣といふ場合の幣が巾に基づくにても知られるが、そのほか市および帛の等しく巾に基づくは、買と云ひ財と云ふの貝に基づくに讓らざる意義を含むと謂ふべきである。

概して交換の媒介物として用ひられる物は、總ての人が一般に需要するもので、腐敗の虞れなく人人の手に轉輾することのできる物でなければならぬ。從つてそれは氣候その他の地理的事情、文明の程度、生活の狀態等によつて必ずしも一樣ではない。

概して云へば、寒國では毛皮の類が交換の媒介物とされてゐる場合が多い。例へばケンタッキイ(Kentucky)の山間にゐる土民は Coon(浣熊(アラヒグマ))、兎、栗鼠、等の毛皮をば今なほ交換の媒介物として用ゐてゐる。(J. L. Langhlin The Principles of Money, 1903. p. 11.) 之に反し溫帶または熱帶に在つては、衣服を必要とする度合が少いので、貝その他の裝飾品が交換の媒介物とされてゐる例が多い。支那において貝と布との兩者が交換の媒介物として行はれたのは、一は南方に起り一は北方に起り、各々その起源を異にしてゐるのかも知れぬと思ふ。

世界大戰後我國の占領した南洋のヤップ島でも、あゝいふ熱帶地であるために、無論毛皮などは必要としないので、やはり貝が交換の媒介物とされてゐたものである。しかし從來交換の媒介物として用ゐられた貝は、多くは子安貝または寶貝と稱するものであるのに、この島では蝶貝と稱する眞珠貝の一種を用ゐてゐる。今、山崎直方博士の記述されてゐるところを抄錄すれば、その樣子は次の如くである。(山崎直方博士『ヤップ島の石貨と貝貨。』東洋學藝雜誌、第三十二卷、第四百八號。——なほ Furness; The Island of Stone Money, 1910. pp. 92—106. 參照)

『今日ヤップ島において用ゐらるゝものは蝶貝と稱する眞珠貝の一種である、直徑三四寸乃至、六七寸に達する扁平なる圓形の二枚貝で、之に二種あつて一を黑蝶貝と云ひ、一を白蝶貝と云ふてゐる、共に貝殼の表面の色で名づけたのである、いづれも其の價格は大きさによるのであつて、黑蝶貝の蝶交ひから反對の緣の方へかけて拇指と示指(或は曰ふ中指)とを張つて之を單位とし、之より一指の幅を加ふる毎に二、三、四倍と次第に倍加することになつてゐる、その一單位は約十マルクと定まつてゐるとのことである、いづれの貝も左右兩側は削つて、蝶交ひと反對の緣とは自然のまゝに存してある、普通小形の黑蝶貝は……五六個位づゝ椰子の實の纖維で造つた繩で繫いで其の一連をボタ・アヤール(Botha-ayar)と稱して之を通貨として用ゐてゐる、その價は低きは半マルク內外からある、白蝶貝は黑蝶貝より貴く、數個を連絡することなく、一個を貨幣として用ひ、その蝶交ひの部分に椰子繩を結んで携帶に便にしてある、之をヤール・ヌベチレック(Yar-nubetchrek)と稱する、……之は一個少くも三マルクに値する云々。』

この第三の價値形態は、こゝで表に現はしただけでは、前項の第二形態を逆にしただけのものであつて、數學的に言へば全く同じであるが、經濟的の意味は相違してゐる。第三形態にあつては、或る

特定の商品が等價形態を獨占するのであるに反し、第二形態にあつては、いろいろな生産物が代はる代はる等價形態に立つのである。從つて第三の形態においては、如何ほど生産物の種類が殖えても、ただ相對的價値形態に立つ商品が增加するのみで、總てが一の等價に綜合されるに反し、第二の形態にあつては、如何ほど生産物の種類が殖えても、もしそれが、習慣的に交換される種類のものでなかつたならば、ただ等價形態に立つ商品が限りなく增加するのみであり、相對的價値形態に立つ生産物の數は、習慣的に交換される生産物の種類に應じて定まるのである。しかしその習慣的に交換されると云ふことが、澤山の生産物の性質になつてくると、自然に等價形態を獨占する生産物が生じてきて、その價値形態は第三の形態に移ることになるのである。

(Ⅳ) 貨幣形態 (Geldform)

uWB ＝
vWC ＝
xWE ＝ 金2分
yWF ＝
zWA ＝

第一の形態から第二の形態を經て第三の形態に推移するまでには、いつも量的變化が質的變化を惹き起したのであるが、第三に掲げた一般的價値形態と、玆に掲げた貨幣形態との間には、かゝる本質上の差異はない。ただ一般的の等價形態が、社會的習慣によつて、最後に或る特定の商品に固着して動かぬやうになると、その特定の商品——すなはち等價形態を獨占する商品——は、貨幣となるのであり、これによつて表現される價値形態もまた、貨幣形態に轉形するのである。

或る一個の商品の相對的價値をば貨幣としての機能を有する商品で表現したもの、言ひ換へれば、貨幣をもつて表現した或る一商品の einfach な（簡單な）相對的價値表現は、價格形態 (Preisform) である。すなはち米の價格形態は、例へば、

米二斗＝金二分

であり、もし金二分が鑄貨として一圓といふ名稱を有つてをれば、

米二斗＝金一圓

である。（かうなると問題が分らなくなる。福田博士『流通經濟講話』にいふ、『貨幣が言表してゐる價値、貨幣が有つてゐる價値なるものが、他の一般の商品の有つてゐる價値と、全然同じものであるか、それとも全く違つた特別のものであるか、特別のものとすれば、どういふ風に特別であるか、これが卽ち貨幣價値の問題といつて、學問上まことに六ツかしい問題であります。』）

これによつて見れば、貨幣形態を理解することは、吾々が一たび一般的等價形態を理解すれば何んでもない。或る特殊の商品が一般的等價形態を獨占すれば、それが卽ち貨幣形態なのである。ところで一般的等價形態は第三の一般的價値形態のうちに含まれてゐるものであり、そしてこの第三形態は第二形態の逆であり、最後に第二形態の構成要素は第一形態

xWA=yWB

に歸する。そしてこの形式は、商品が商品として・すなはち使用價値および價値といへる對立物の統一として・現はれるための最も簡單な仕方である。かくて吾々は、商品の貨幣形態——價格形態——は、商品が商品として現はれたるための必然的な發展形態であることを知るのである。

第三節　諸商品の交換過程

吾々は第一節において商品を分析して、それが使用價値および價値といへる對立物から構成されてゐることを明かにし、第二節においては、商品のなかに含まれる斯かる對立物が如何なる Form（形態）により外的現象となるかを明かにしたが、吾々は更に進んで、かゝる商品の運動過程としての交換過程を明かにしなければならぬ。けだし商品はかゝる運動をなすものとしてのみ、現實的には初めて商品となるのであるから。

言ふまでもなく商品は自身に市場に出て相互に自身で交換し合ふのではない。A なる商品と B なる商品とが交換されるといふことは、A の所有者と B の所有者とが互にこれを商品として交換するといふことを意味する。すなはち腕力によつて之を强奪し合ふのではなく、相互を私有權者と認め、双方の意志の合致によつてその所有物を取り換へるのである。そこで契約なる意志關係としての法律關係が成り立つ。しかしこの法律關係は經濟關係の反映であつて、その內容は經濟關係そのものによつて與へられてゐる。そ

れは形式的主觀的には、契約當事者の自由意志によつて結ばれるものだが、內容的客觀的には、社會的勞働の生產力の發展程度に適應するところの經濟關係により、彼等の意志から獨立して定まるものである。だから商品所有者なるものは商品の人格化されたものに外ならぬ。それは Versubjektivierung der materiellen Grundlagen der Produktion（生產の物質的基礎の人格化）の一例である。

商品の運動は、それ自身矛盾に充ちたる商品の自己運動である。すでに繰り返し述べた如く、商品自體に內在する矛盾なるものは、商品が一私人の個人的生產物でありながら、同時に社會的生產物である、といふことのために生まれる。そしてそのことのために、それは交換過程を經過せねばならぬのであるが、しかしこの交換過程に這入らうとすれば、商品はまた必ず一つの矛盾にぶつかるのである。吾々は次に斯かる矛盾が交換過程において如何に展開せられ且つ如何に解決されるかの道程を明かにするであらう。

如何なる商品もその所有者にとつては使用價値ではない。もしそれがその所有者にとり使用價値であり、彼れ自身の欲望を滿足するための直接の手段となりうるならば、それはその所有者により交換のため市場に持ち出されはせぬであらうし、從つてその物は商品としての運動をなしえないであらう。如何なる商品もその所有者にとり直接にはただ他の商品と交換するための手段として意義を有つに過ぎない。（價値と使用價値との相互的排他性）。しかし何人にとつても使用價値にあらざるものは、もちろん商品となりえない。すなはち商品は、その所有者のためには使用價値でなくとも、他人のためには使用價値でなければならぬ。さうして、それは、他人のために使用價値であるがゆゑに、その所有者はこれをもつて他人の所

有する商品と交換しうるのである。斯様に總ての商品はその非所有者のためにのみ使用價値であるのだから、それは使用價値に werden（生成）しなければならず、そのためには、總ての商品が相互の交換によつて全般的にその所有者を變更しなければならぬ。ところで、總ての商品が互に交換されるがためには、諸商品は先づ相互に價値として一定の關係を保たなければならぬ。すなはち總ての商品は使用價値として實現されうる前に、先づ價値としての資格を有たねばならぬのである。ところで、總ての商品が價値としての資格を有するのは、それに支出された勞働が他人に有用な形式で支出された限りにおいてであるが、しかもその勞働が果して他人に有用な形式で支出されたかどうか、從つてその生産物が果して他人のための使用價値であるかどうかを證明するものは、交換過程そのものに外ならぬ。して見ると、商品は價値として實現されるがゆゑに、使用價値となりうるのであるが、また他方においては、それは使用價値としての保證されるがゆゑに、初めて價値となりうるのである。斯様にして、一方の解決は互に他方の解決を前提とする點において、問題は循環するのである。

更にこれを別の方面から說明するならば、各々の商品所有者は自分の商品を他人の商品と交換しようとしてゐるのだが、しかし他人の商品ならばどれでも可いといふわけではなく、その使用價値が自分の欲望を滿足するが如き商品と交換しようとしてゐるのである。それと同時に、彼れは、彼れ自身の商品が相手方にとつて使用價値であると否とを問はず、彼れ自身の自由の選擇によつてその相手方を求め、その者の所有する商品と自分の商品とを交換せんとするのである。しかし此の如き欲求は、各々の商品所有者が一樣に有つところであるから、それが互に矛盾することは言ふまでもない。言ひ換へれば、各々の商品所有者は自分の商品を他の一切の諸商品に對して一般的等價物（allgemeine Aequivalent）たらしめんとするの要求を有つのであるが、しかし斯かる要求を各々の者が有つならば、如何なる商品も一般的等價形態を獨占することができず、從つてすべての商品は一般的な相對的價値形態を有つことができず、從つてまた、それらのものは價値として相等しとされることができず、その價値の大きさを互に比較されえないといふことになる。これが即ち商品の全面的交換に含まれるところの矛盾なるものである。

かゝる矛盾は、商品形態を採る勞働生産物の種類が增加するにつれ、從つて諸商品の交換過程が發展するにつれて、益々展開される。何故なれば、それにつれて、各々の商品所有者が自己の商品と交換せんがためにその相手として自由に選擇せんとするところの、商品の範圍が益々廣くなるからである。だが、かかる矛盾の展開は、同時にまたその解決を伴ふ。何故なれば、すでに前の節で述べたやうに、商品交換の發展に伴ひ、すべての商品所有者は自己の商品をば、一般的等價物としての他の何等かの一商品に關係せしむることにより、商品價値の表現について一般的な價値形態——ひいて貨幣形態——の成立を促すからである。すなはち總ての商品はその價値を表現するために或る一定の商品を選び、これを一般的等價物として普通の商品より除外し、これを貨幣たらしむることによつて、先きの矛盾を解決するのである。此の如きことは、交換過程に入る商品の數および種類が非常に增加してからでなければ發生しないが、しかし直接な生産物の交換が次第に困難となつてくるのも、やはり交換過程に入る商品の數および種類が次第に增加してからのことである。だから問題はその解決の手段と同時に生ずるのである。その意味において、人間は解決しうる問題をのみ問題とすると稱される。

しからば貨幣の成立は、何故に先きに述べた矛盾の解決となるか？　それを理解するためには、或る特殊の商品、例へば金は、貨幣となることにより初めて唯一の現實的な商品（die einzig wirkliche Ware）となるといふこと——Kritik der politischen Oekonomie, S. 120.——を明かにせねばならぬ。けだし金は他の種々なる諸商品と同じやうに、特殊の使用價値として美術品その他のものの材料に役立つ。だが、それは貨幣となることによつて、一般的な・社會的な・從つて形式的な・使用價値となる。このことは、すべての他の諸商品が交換過程において全面的にそのものの上に働きかけることによつて、そのものが總ての諸商品の價値の鏡となるといふ特別の役割を演ずることから生ずる。特別な欲望の對象としての種々なる商品の使用價値は、これを讓受ける者の手にあるとこれを讓渡す者の手にあるとによつて、その意義を異にする。しかるに一般的等價物として除外された商品、例へば金は、交換過程そのものから發生した一般的欲望の對象となり、各々の者に向つて一般的な交換手段として同一の使用價値を有つことになり、それゆゑにまた、何人にとつてもその特殊な欲望の對象ではなくなる。斯樣にして貨幣に轉形せる商品は、價値たることを以てその使用價値となすことにより、それは價値であると同時に使用價値であるといふ矛盾の統一を、それ自身のからだで解決することになる。だから商品は、貨幣となることにより、初めて現實的に商品となるといふことができる。

かくて、あらゆる商品が現實的に商品に werden（生成）するといふことは、つまりそれが現實的に貨幣に轉形するといふことである。今その過程を說明するならば、貨幣となつた金が、特殊な使用價値として、また一般的な使用價値として、二重の存在を保つやうになると、それに適應して、すべての商品は、實在的には使用價値として、觀念的には貨幣によつて表現されたる價値として、——すなはち金何圓といふ價格において、——先づ二重の存在を保つやうになる。之によつて諸商品は金なる形態のうちに相互に交換價値として——すなはち相互に取り替へられうるものとして——現はれる。だが米＝鉄＝綿＝麻といふことは、交換過程において初めて證明さるべきことである。米が他の如何なる商品とも取り替へられうるものとなるのは、それが現に金に轉形してから後のことである。それゆゑ W—W'（商品と商品との交換）なる直接の交換の代りに、先づ W—G（商品と貨幣との交換）なる販賣が行はれねばならぬのであり、これによつて初めて總ての商品は現實的に商品に轉形するのであり、從つてまたそれらの諸商品の全面的交換が可能とされるのである。ところでこの W—G なる販賣について見るに、それは之に引續いて行はるべき G—W（貨幣と商品との交換）なる購買について見るも同じであるが、そこには使用價値および價値の統一體としての二つの商品が對立してゐるけれども、しかし普通の商品にあつては、その價値は價格としてただ觀念的に存在し、他方貨幣としての商品にあつては、たとひそれ自身は現實的な使用價値であるとしても、この場合ただ價値の體現者としての、——すなはち何等現實的な個人的欲望に關係しないものとしての、——形式的な使用價値として存在してゐるに過ぎない。すなはち使用價値と價値との對立は、W—G（商品—貨幣）または G—W（貨幣—商品）の兩極に向つて排他的に分立し、一方の商品は、その觀念的な價値を貨幣において實現しなければならぬところの使用價値として、貨幣に對立し、他方貨幣は、その形式的な使用價値を商品において物體化しなければならぬところの價値として、商品に對立す

ることになつてゐる。このことは、商品の世界が商品と貨幣との對立に分裂し、且つ商品に含まれる對立物が商品と貨幣との双方に互つて對立的な關係に、すなはち一方において觀念的に存在するものは他方において現實的に存在し、また一方において現實的に存在するものは他方において觀念的に存在するといふ排他的な關係に、分裂したことを意味するのであり、畢竟するに、商品に含まれた矛盾の展開されたものに外ならぬ。それゆゑ吾々は、商品に含まれる矛盾の展開は同時にその矛盾の解決であるといふのである。(これを一般的に社會形態の運動について言へば、一定の社會形態のもとにおける生産力と生産關係との矛盾は、生産力の或る程度以上の發展を意味し、從つて新たなる形式の生産關係——新たなる社會形態——の成立可能を意味する。)

以上述べたところを更に別の方面から說明するならば、各々の商品所有者は自己の商品をば他の如何なる商品とも自由に交換せんとする目的を達せんがために、恰もそれと正反對のことを、すなはち先づ自己の商品と交換上の相手となる商品を或る特定のものに限定するといふことを、共同一致して實行するのである。それによつて、その除外されたる特定の商品が一般的等價物となり、それを媒介として初めてすべての商品が全面的に交換されうるに至るのである。」

以上述ぶるところによつて見れば、貨幣なるものは、種々なる勞働生産物が事實において互に相等しとされ、從つて事實において商品に轉形される過程としての、交換過程の必然的産物である。生産物が商品として取引される範圍が擴張するにつれて、商品としての性質のうちに內在してゐる使用價値と價値との對立をば、外部に表現しなければならぬ必要が次第に强くなり、かくて生産物の商品化につれて同時に特定な商品の貨幣化が行はれ、遂に商品界は分裂して、普通の商品と貨幣とに分かれることになるのである。吾々は斯樣にして、特定の商品は如何にして、また何故に、貨幣となつたか、また何故に貨幣は商品であり、商品であらねばならぬかを、了解することができた。(貨幣は商品の世界から、謂はばあらゆる商品の總投票により、選出されたる特殊の商品である。それは商品であつて、單なるシンボルではない)。しかもその成立條件を明かにすることは、同時に、その存續の條件ならびに廢滅の條件を明らかにするゆゑんである。貨幣は、商品のうちに內在する使用價値と價値との對立の必然的な外部的表現であるがゆゑに、それは發展せる商品生産の世界には必ず存在せねばならぬものであるが、しかしまた商品との對立のうちにのみ存在しうるのであるから、それは商品生産の滅亡と共に滅亡すべきものである。

社會改良論としての貨幣廢止論が——商品生産社會を前提とするものであるかぎり——如何におろかなるものであるかは、以上によつて明かであらう。しかもそれは今もなほ再生産されつゝある。——その一例、川島清治郎氏著『貨幣廢止論』(英譯 The Abolition of Money as the basis of human peace and equality. 大正九年發行)

商品生産社會が——現代の資本家的生産が——廢除されたならば、貨幣は當然になくなる。しかし商品生産の社會においては、貨幣は必然的に存在する。商品生産社會の矛盾性は、貨幣によつて惹き起されるのではなく、むしろ貨幣はこの矛盾の一解決である。貨幣を無くしたからといつて、商品世界の矛盾が無くなるわけではない。それは醫者をみな殺しにし病院を燒き拂つたからとて、病人がゐ

さて或る特定の商品が貨幣となるときは、その物は、或る特定の使用價値を有すると同時に、また一般的の使用價値を有するといふ點において、他の諸商品と區別さるべき特徴を有するやうになる。けだし普通の商品は、使用價値の觀點から、これを分つて、享樂財および生産財の二種となすことができるが、貨幣は、この享樂財または生産財の何れもが有せざる、或る一般的の使用價値を有することを、その特徴とするのである。言ふまでもなく、享樂財とは、直接に吾々の享樂の用に供せられうる財のことであり、生産財とは、他の財を生産するための手段に供せられうる財のことであるが、いづれにしてもこれらの財の使用價値は、享樂または生産のために消費されることによつて、初めて實現されるのである。もちろん、これらの財も、商品として生産される以上、生産された後は、先づ一旦流通界に入り、幾度かその所有主を變更するのであるけれども、しかし最後には、必ず何人かの手許に留まつて、或ひは享樂のため、或ひは生産のため、消費または使用されることにより、その使用價値を實現するのであり、さうして其の使用價値を實現することにおいて其の姿を失ひ、永久に流通の世界を見棄てゝしまふのである。簡單に言へば、これらの財は、早晩流通界を退くのであり、且つこれが使用價値は、流通界の外においてのみ、初めて實現されるのである。ところが貨幣は、諸商品の價値の鏡となることを其の使命とするのであり、これによつて諸商品相互の交換を媒介するのであるから、その使用價値は專ら流通界において發揮されねばならぬ。もちろん、貨幣もまた、普通の商

品としての資格においては、特定の使用價値でなければならず、そして斯かる特定の使用價値は、やはり流通界の外において實現されるの外はない。例へば、今日の文明國においては、金が貨幣となつてゐるが、しかし地金としての金は、樣々なる奢侈品を造るため、または齒の治療などに使用されてゐるのであつて、その點においては、少しも普通の商品と異なるところはない。けれども、それは金なる商品が貨幣として有する使用價値ではない。金は貨幣として存在するかぎり、一生流通界のうちに留まり、絶えず或る人の手から他の人の手に渡るべき運命を有つてゐるので、何人かの手に留まり、その人のところで、享樂または生産の目的のために消費され盡すことのないものである。それは馬琴が『わがもの他の物と名はつくれども、金錢は長逗留せず、一夜泊の旅人の如く、入船あれば出船あり』と言つてゐるが如くである。簡單に言へば、貨幣としての金は、永久に流通界に止まることを必要とし、その使用價値は、專ら流通界の內部においてのみ實現される。このことは、金が貨幣として存在するかぎり、享樂または生産の目的のため、特殊的な且つ具體的な使用價値をば、少しも發揮するものでないといふことを意味する。すなはち貨幣としての貨幣は、一切の具體的な・特殊的な・使用價値を脫ぎ棄てたものである。しかし、それゆゑにまた、それは、捨象的な・一般的な・人間的勞働の結晶物として、すなはち價値として、よく一切の商品の價値表現のために、一般的等價物となりうると同時に、物の交換に際しては、何人によつても之が對價として受け取られ、一般的受授性（general acceptability）または一般的購買力（general purchasing power）を有し、よく一切の商品の流通のために一般的な交換の媒介物となりうるのである。もちろん、普通の商品も、それがその所有者以外

の者によつて欲求せられ、從つて之と交換して他の商品を入手するの手段に供せられうるかぎり、その商品はその程度において一定の購買力を有するわけであるが、しかしそれは決して一般的とはなりえない。一定の商品は、それが何等かの特殊的な具體的な使用價値であるかぎり、それは何人かによつて不用とされ、社會の何處かの隅で融通性を失ふのである。しかるに貨幣となれる商品は、享樂または生產に關する特定の使用價値につき、一切その痕跡を失ふがゆゑに、初めて一般的購買力を有するところの流通財となりうるのである。しかもその物は、既に一般的購買力を有し、如何なる商品とも交換されうるといふ性質を有すればこそ、商品界に存在する無數の商品が有するところの、あらゆる種類の特殊的な・具體的な・使用價値を代表することにおいて、自分自身は全く普遍的な・捨象的な・價値のみを體現しうるのである。すなはち貨幣としての金は、何等特殊の使用價値を發揮しない代りに、價値そのものを體現することを、その一般的な使用價値とするのである。斯樣にして、金といふ商品は、地金としての特殊的な使用價値を有すると同時に、貨幣としての一般的な使用價値を有するものである。

以上述ぶるところによつて考ふれば、貨幣たるべき商品が貴金屬に限定されてきた理由は、おのづから明かである。すでに述べたやうに、價値を形成するものは、品質の平等な・ただ分量上の差異のみを有する・捨象的な人間的勞働であるから、これを表現するに適當な材料となるものは、やはり品質の平等な、ただ分量上の差異のみを有するもので、且つその使用價値を損ずることなしに、任意に分割しまた任意に合併されうるものでなければならぬ。加ふるに、貨幣は永く流通界に止まつてゐなければならぬものであるから、これが材料たるものは、永く保存に耐えうる性質のものでなければならぬ。貴金屬の自然的性質は、恰もこれらの諸條件をば最もよく具ふるがゆゑに、貨幣形態は、おのづから貴金屬によつて獨占されるに至つたものである。

貴金屬は、通用の便宜のため、貨幣として特定の形に製造されることにより、貨幣としての姿をば、その地金としての姿から、區別するやうになる。そして既に、地金としての姿から區別されるところの貨幣なるものが生ずると、商品の世界は、吾々の眼に見ゆる形において明かに商品と貨幣とに分化する。商品の性質のうちに眠つてゐる使用價値と價値との對立は、こゝにおいてか徹底的に外部に現はれ、商品の價値は、一切の使用價値から離れて、獨立の形態を保つやうになる。すなはち商品なる細胞がはつきり二つに分裂して、商品形態と貨幣形態とを保つに至つて、價値形態の發展はその極頂に達するのである。

第二章　貨幣

すでに前章の最後の節で述べたやうに、商品と商品との交換 W—W′ は、必然的に發展して、諸商品の全面的流通 W—G—W′（一の商品——貨幣——他の商品）に轉形する。すなはち W—G—W′ なる形式は、商品流通の形式であり、從つてまた貨幣の運動形式である。しかるに斯かる運動形式は、更に發展しその反對物たる G—W—G′（貨幣——商品——より多くの貨幣）に轉形する。しかるときは、それは資本としての運動に轉形したのであり、從つてかゝる運動をなすものとしての商品および貨幣は、單なる商品または單なる貨幣ではなく、商品または貨幣としての規定のほか更に資本としての規定を蒙つたところのより具象的な姿における商品または貨幣である。今吾々が本章に述べんとするところは、單なる商品の交換過程から直接に生まれたまゝの貨幣についてである。こゝでももちろん貨幣としての諸機能が問題である。

なほ私は以下便宜のため、貨幣たる商品はすべて金（Gold）であると假定する。

第一節　價値の尺度（Mass der Werte, measure of value.）

金の第一の機能は、商品の世界に向つて一般的な價値表現の材料を提供すること、すなはち種々なる諸

商品の價値をば、互に品質を同じくし只だ分量の差のみを有するところの・從つてその大小を比較されうるところの・大きさとして表現することにある。金は斯樣にして價値の一般的尺度としての機能を有ち、これによつて金は先づ貨幣となるのである。

吾々はすでに價値形態の發展を考察した折、最も簡單なる價値形態

xWA ＝ yWB（商品Aのx量 ＝ 商品Bのy量）

において、BはAのために價値の尺度たる機能を有つことを述べ、且つ然るかぎりにおいてそこには貨幣の萠芽があるといふことを指摘しておいたが、今やその萠芽が發展して、金はたゞにAなる商品に對してのみならず、あらゆる諸商品に對し一般的な價値尺度となることにより、貨幣となつたのである。

すでに述べたやうに、貨幣はすなはち商品流通を意味する。しかるに商品流通のために先づ行はれる過程は、商品の現實の流通に對する或る觀念的な準備過程である。すなはちそれは、種々なる使用價値として存在する諸商品が、先づ第一に、觀念的に交換價値として現はれるための形態を創造することである。そしてそのことは、これを貨幣の側からいへば、貨幣がすべての諸商品に對し價値の尺度たる機能を有つといふことである。それゆゑ吾々の考察は、先づ貨幣のかゝる機能から始められねばならぬが、それは恰も吾々は前章の終りにおいて發見した貨幣のすでに有してゐた機能である。かくて吾々の研究は、直接に前章に續くのである。

諸商品は貨幣が發生したために同じ尺度をもつて測られうるものとなるのではない。總ての商品は、價

値としては、對象化されたる・平等なる・社會的勞働であり、互に品質を同じうするものであるがゆゑに、その價値をば共通に同一なる特殊の商品で測ることができ、從つてその特殊の商品をば價値の共通な尺度すなはち貨幣たらしめうるのである。商品價値の實體を成す勞働の大きさは、勞働時間によつて測られうるのであり、その點において、勞働はそれ自身に内在する尺度を有つのであるが、しかし前章の終りに述べたやうに、商品の價値は必ず他の商品の一定の分量によつて表現されなければならぬのであつて、その意味においては、貨幣は諸商品に内在するところの價値尺度たる勞働時間の、必然的な現象形態である。

何故貨幣は直接に勞働時間そのものを表示するものでありえないのか？　言ひ換へれば、何故勞働時間分と記載した單なる紙片が貨幣となりえないか？

このことは、商品生産の基礎の上においては――社會的勞働が私的勞働として行はれてゐる社會では――何故勞働生産物が商品形態を採らねばならぬかといふ問題と、同一に歸する。何故なれば、商品交換を前提すれば、或る商品が貨幣に轉形することは、その必然的な結果であるから。

貨幣が價値の尺度であるといふのは、物差しが物の長さを測る尺度であるといふのとは、その趣を異にする。何故といふに、商品の價格すなはち貨幣によつて表現された商品價値の形態は、そのものの物質的存在の形態とは全く別な・單なる觀念的の・存在であり、從つて一定量の商品の價値が一定量の金に等しとされるのは、謂はば頭のなかでの作用であり、それはただ觀念的な金によつて行はれ、現實の金がそこに持ち出されることを必要としないからである。（一定面積の土地の測量には色々な道具が要るが、その價値の測量には一文の金も要らない。）

斯樣に價値尺度としての貨幣は、假想的な存在を保つに過ぎない。けれども商品の價格は全く現實の貨幣材料に依存してゐる。例へば一斗の米の價格が金一匁すなはち金五圓であるとされるのは、一斗の米に含まれてゐる社會的勞働の分量が、一匁の金に含まれてゐる共れに等しいがためである。だから商品の價値が例へば金および銀で表現されるならば、それは二樣の價格すなはち金價格および銀價格を有することになり、そして金と銀との價値關係（比價）の變動につれて、これら金價格および銀價格の比率は變動することになり、かくて諸商品の價値の統一的表現は亂される。だから特定の一商品は、一般的等價形態を獨占することによつて初めて貨幣となり、また價値の一般的尺度となりうるのである。謂はゆる金銀兩本位制が採用された場合には、金銀の市場比價の變動に應じ、法律で高く見積られてゐる金屬の方が代はる代はる本位となることにより、實際においては、交替本位制（alternating standard system）または跛行本位制（limping standard system）となるといふのは、二種の商品が同時に貨幣形態を有つことが貨幣の本質と矛盾することを、事實において證明するものである。

貨幣の價値にして變化なき場合にかぎり、諸商品の價値の變動に比例して、また諸商品の價値にして變化なき場合にかぎり、貨幣の價値の變動に比例して、一般物價は變動する。だから貨幣の價値の變動は、必ずしも常にこれに比例するところの一般物價の變動を伴ふものではない。これに反し、一般物價の變動は、すなはち貨幣の相對的價値の變動である。それゆゑ、諸商品の價格の一般的變動すなはち貨幣の相對的價値の變動の原因には、貨幣側に起るものと、商品側に起るものとの、二種がある。

多くの學者は、貨幣の價値といへば、すなはちその相對的價値のことである、と解する。從つて貨

幣の價値の變動はすなはち一般物價の變動である、といふことになる。けれども、例へば F. M. Taylor, (Some chapters on money. 1906. pp. 179. 182.) の如く、貨幣の相對的價値の變動を分つて real or absolute change と apparent or relative change とするならば、おのづから貨幣の價値そのものの獨立の變動を認めてゐるわけになる。

一定の商品が他の無數の商品に對して有する價値關係は、その商品の價値が一定分量の金に等しとされる單一方程式のうちに包含され、その價値形態は前の章で述べた第一の最も簡單な價値形態と外形上は同じものになる。それは、金が一般的等價形態を獨占し、從つて他の一切の商品の價値がすべて金により表現されてゐるからである。これに反し、金なる商品は、限りなき諸商品の種々なる分量をその等價形態となすがゆゑに、その相對的價値は、第二の價値形態すなはち擴大されたる價値形態の無限の系列のうちに現はれる。日々の一般物價表が事實においてはそれを代表するのであつて、すなはち吾々が物價表をばその代金の側から倒さまに讀んで行けば、そこに貨幣たる金の相對的價値の系列が現はれてゐるのである。

種々なる商品の價格は、種々なる分量の金で現はされる。そこで更にこの種々なる金の分量を測るために、一定分量の金が單位として定められなければならなくなる。そしてこの單位は、更に割り切れる部分に細分されることにより、分量測定の本位となる。しかるに金屬は、それが貨幣化する以前に、それ自身の分量を測るための單位を有つてをり、またそれは或る割り切れる部分に細分されてゐた。それゆゑ、謂はゆる Currency by weight (秤量貨幣) が行はれてゐた時代はもちろん、鑄貨が行はれるやうになつてからも、金屬の重量の普通の名稱が、そのまゝ貨幣としての名稱となつてゐた。しかしその後種々なる理由により、この二つの名稱が分かれ、一定分量の金屬が價格の本位として法定の名稱を有つやうになつた。例へば、日本の現行貨幣法において、純金の量目二分をもつて價格の單位となし、これを圓と稱す、と規定してあるが如くである。斯樣にして貨幣は、價値の尺度としての機能の外に、價格の本位として第二の機能を有つことになる。この二つの機能は明白に區別しなければならぬ。すなはち貨幣は價値の尺度としては、種々なる商品の價値をば、一定分量の金によつて表現するのであるが、價値の本位としては、それらの金の分量を測定するのである。だから、金二分の名稱を圓と定めるといふことは、金二分の價値を定めることと、全く何等の關係もない。金の價値は絶えず變動する。それは法律によつて定めることはできない。しかし金の價値は如何に變動しても、金の重さには變動なく、從つて金の重さの單位を二分となし、これを圓と稱することに定めるならば、それは金の分量を測るため不變の尺度として役立つのである。(その關係は、譬へば、織物の價値は常に變動するけれども、しかしその織物の長さは、いつでも尺を單位として測られるといふに等しい)。

金屬が一般的等價形態を獨占する以前には、貝、布、家畜その他のものがそれぞれの地方の狀況によつて、或る程度まで一般的等價形態に立つたものだといふことは、前に述べたところであるが、今、金屬の分量を測るための單位の起源について考へて見るに、少くとも或る地方では、金屬以前に等價形態に立つてゐた物と、或る連絡があるやうである。Ridgeway, The Origin of Metallic Currency and Weight Standard. 1892. p. 153. に記載するところによれば、古代のギリシャを初めとし、謂はゆる牧畜民族の間にあつては、家畜殊に牛が、金屬に先だつて一般的等價形態に立つてゐたもののや

うである。現に貨幣關係の語で、牛といふ語から由來してゐるものが少くない。例へばラテン語の pecunia（今日の英語で pecuniary——金錢上の——といふ語の起源）は pecus（牛）から出てをり、英語の fee（料金などといふ意味の語）は feoh（牛）から出てをり、またインドの rupee はサンスクリット語の rupa（牛）から由來したものである。ところで、その後、商品交換の發展に伴うて、等價形態に立つ商品は、家畜の代りに金屬となつたのであるが、今その金屬の重量を秤るために用ひられたであらうと思はれるところの最も古い分銅が、牛または羊の形をしてゐたといふことは、甚だ興味あることである。更に Ridgeway（pp. 387.—388.）のいふところによれば、ギリシヤの talent（ギリシヤ、ローマ、アッシリアにおける古代の重量および計算貨幣の單位）は、恐らく牛一匹の價値に相當する金の分量であつたらうといふことだ。ホーマアの詩篇と稱せられるイリアド（Iliad. XXIII, 750.—Gardner, A History of Ancient Coinage. 1918. p. 22. に引用）には、Achilles が競走の賞品として

第一等賞　a vessel of silver（銀一壺）

第二等賞　an ox（牛一匹）

第三等賞　a half-talent of gold（金半タレント）

を賭けたといふ記事があるが、もし三等賞を二等賞の半分だとすれば、金の一タレントは恰も牛一匹に相當したものであらうといふことだ。ギリシヤの最も古い貨幣の表面には牛が刻印されてゐるといふことも、この考を强める一つの材料である。なほ Ridgeway の說によれば、人間が初めて正確に物の重さを秤り始めたのは、金についてであつて、且つその秤量の最初の手段となつたものは、自然に存在してゐた植物の實であつた、といふことだ。（英語で重量の單位名である grain が同時に穀粒を意味するのは、こんなところに關係があるのかも知れない）。ともかく、以上の如き說が正しいならば、少くとも或る地方では、最初用ひられた金屬の重量單位のうち、大きい方は、家畜一頭の價値に相當する分量であり、小さい方の單位は、植物の種子の重さに相當して作られたものかも知れない。

金屬が貨幣となつてからでも、最初は謂はゆる秤量貨幣（currency by weight）であり、交換の度毎にその重量を秤られた。（『聖書』創世紀〔Genesis, xxiii, 16〕—"Abraham *weighted* Ephron the silver, which had named in the audience of the children of Heth, four hundred sheckels."）それゆゑ後に鑄貨が用ひられるやうになつてからも、最初のうちは、金屬の重さを秤る名稱が、そのまま貨幣の名稱として用ひられた。例へば、

イギリス——ポンド（pound）〈秤量 = 12 ounce. = 12×20 pennyweight.
　　〈貨幣 = 20 shilling. = 20×12 penny.

フランス——フラン（Franc）

ドイツ——マルク（Mark）

イタリー——リラ（Lira）

日本——匁、分、等

ギリシヤ——シエクル（shekel）

等は、皆な秤量單位から來てゐる。

第二節　流通手段 (Zirkulationsmittel, means of circulation.)

貨幣は更に商品流通の媒介者として、流通手段たる機能を有つ。今この機能を理解するためには、吾々は先づ、商品の流通について觀察せねばならぬ。

既に第一章第三節で述べたやうに、商品には本來矛盾した要求が含まれてゐるが、商品の交換過程の發展は、商品の世界をば普通の商品と貨幣とに分裂せしめ、かくて總ての商品の價値をば價格に表現することによつて、商品に含まれてゐる矛盾の要求を解決し、總ての商品をして全般的に交換過程を通過するを得せしむるものであるが、今その交換關係においては、一方の極に商品が立ち、他方の極には貨幣が立つ。そしてこの場合、商品は現實の使用價値として存在し、貨幣は現實の價値として存在する。すなはち普通の商品も、貨幣としての商品も、共に使用價値および價値の統一體でなければならぬが、しかしこの場合には、互に排斥しながらしかも離るべからざる關係において商品自體に內在してゐるところの・使用價値と價値との對立が、交換關係の兩極の上に、表面の對立として現はれる。諸商品の全般的交換の過程は總て斯かる對立的形態のもとに行はれるのである。

そこで吾々がAなる商品所有者について市場に出て見たと假定するならば、吾々は先づ、彼れが彼れの商品Wをば、Bが所有するところの貨幣Gと交換することを發見するであらう。しかし問題はそれ

で完結したのではない。すなはち吾々が注目するところのAは、一旦Gを手に入れたならば、間もなく再び市場に現はれ、これをばCの所有してゐる商品W′と交換するのである。そこで吾々が引續きAに從つて交換の世界を退き、消費の世界に戻つて見るならば、先きにAによつて所有されてゐたW（一定の商品）がW′（他の商品）と置き換へられてゐることを發見する。すなはちWはW′と交換されたのであり、その結果から言へば、Wを所有してゐるAが、W′を所有してゐるCと、直接の交換（物々交換）をなした場合と、同じことである。けれども諸商品の全般的交換は、前に述べた理由に基づき、貨幣がこれを媒介することによつて初めて行はれうるものである。すなはち第一には、Aなる所有者にとつて非使用價値であり、從つてただ商品としてのみ（他の使用價値と交換されうるものとしてのみ）意味を有するWなる生產物が、一旦貨幣と交換されることにより、價値物としての姿を取るといふこと、第二には、それと逆に、一般的等價物たる貨幣が、Aにとつて使用價値であり、從つてAの所有に歸することにおいて商品たる性質を失ふべきW′なる生產物と、交換されるといふこと、この相反對するところの・しかも互に補充するところの・二樣の轉形によつて、商品の流通は初めて完了するのである。ところで屢々言ふやうに、商品の運動はすなはち商品所有者の行爲を意味する。だから、前に述べたやうな商品の轉形は、これを商品所有者の行爲として見れば、賣ることと、買ふことと、この二つの相對立した行爲の統一としてすなはち購買のための販賣となつて現はれる。これを要するに、諸商品の流通は、

W——G——W′

なる形態轉化によつて行はれ、その實質的內容はW—W′、すなはち諸商品の全般的交換である。（實質は

W—W′であるが、しかし商品生産の社會では、それは必ず W—G—W′ なる形式のもとに行はれるのである)。

今吾々にとつての問題は、かゝる商品流通の形式を明かにすることである。そこで先づW—G（商品—貨幣）なる第一段の過程について觀察するに、これは一定量の商品が（一定量の商品の價値が）その價格に豫想されてゐる（貨幣で表現されてゐる價値に相當する）一定量の金に轉形する過程である。ところでその金は、商品所有者にあらざる B なる者のポケットの中に存在してゐる。それゆゑ A の所有してゐる W（商品）が、B の所有してゐる G（貨幣）と入れ代はるためには、先づ W が B のために使用價値でなければならぬ。また W がどれだけの分量の G と入れ代はるかといふことは、W に含まれてゐる社會的に必要な勞働量によつて決まる。けれども W の生産のため社會的に必要とされる勞働量は、同じ W を生産しつゝある A 以外の無數の生産者の平均的生産條件によつて決定されるのだから、それは A が自身の W の生産のために費した個人的勞働の分量とは、絶えず相違しうるのであり、また社會的に必要な勞働量それ自身も、A の意識しないうちに屢々變動してゐるのであり、從つて A は自身の商品 W の價値について屢々誤算をする。なほ最後には、たとひ市場に存在する W なる商品の各單位には、恰も社會的に必要とされる勞働量が含まれつゝあるとするも、もしその總體の供給量が必要とされる以上の分量であつたならば、つまり W なる生産部門には、社會的需要の點から考へて、必要とされるよりも以上の社會的勞働が費されたわけであり、從つてそこに費された勞働はその全部が社會的に必要とされる勞働であるといふわけではなくなる。此の如き場合の商品總體の價格は、その商品の供給が恰もその需要と一致した場合の總體の價格と同じことになるのであり、從つて、常に平均的の取扱を受ける各單位の商品について見れば、それは需要供給の平衡を條件として規定される場合の價値よりも何程か低き價格で賣られるに過ぎない。だから A は自身の商品 W について何等の誤算をしてゐない場合にでも、彼れの意志から獨立してゐる社會事情によつて、彼れの豫想してゐる價格を實現しえない場合がある。これらのことは、生産物が商品として生産されるやうになると、それは生産者自身の制御から獨立し、却つて逆に生産者を支配する力となることを意味する。生産が自己の消費のために行はれてゐるかぎり、生産物は完全に生産者によつて支配される。生産者は彼れの生産物がどうなるかを能く知つてゐる。だが、一たびそれを商品として流通の世界に投げ入れたならば、彼れの生産した生産物の運命が生産者たる彼れ自身に分らなくなり、それが如何なる價格で販賣されうるかも、彼れにとつては全く偶然的に見えてくる。しかし斯かる偶然の反對の極には必然性が働いてをり、それが個々人の意志・意圖からは獨立してゐるところの平均法則として、これらの個人を支配するのである。斯樣なわけで、商品は決して總ての場合に、それに現實的に含まれてゐる勞働量に比例して交換されるわけではないが、しかし吾々は茲で商品交換をその純粹の姿において——すなはち偶然的な附隨的な諸事情をすべて抽象して——觀察するために、W—G—W′（商品——貨幣——商品）なる過程の間には、たゞ價値の形態の轉化のみが行はれるものと假定する。

さてこの形態の轉化は、A のためには W（商品）を G（貨幣）となすのであるが、それは同時に、B のためには G（貨幣）を W（商品）となすのである。そして G が W′ となるといふことは、貨幣の上に豫想されてゐた觀念的な使用價値が、特殊の形態を有つた使用價値に實現されるといふことに外なら

ぬ。して見ると、商品が販賣されることにより、その價格の上に豫想されてゐたところの觀念的な價値が實現されるといふ過程は、取りも直さず、貨幣により一定の商品が購買されることにより、貨幣の上に豫想されてゐた觀念的な使用價値が實現されるといふ過程である。元來賣買は双方行爲であるから、賣られたといふことは即ち買はれたといふことであり、W—G は同時に G—W であり、單一の過程は實に二重の過程である。

「賣る」それから「買ふ」といふやうに、賣買は繼起的なものではない。一方の極から見て「賣る」のは、反對の極から見て「買ふ」のである。たゞ單に「賣る」といふことは起り得ない、正確には賣買と續くのではなく、兩者が重なるのである。かくて對立物はこの場合にもまた同一である。

つぎに、商品轉形の第二段の過程たる G—W′ について觀察するに、これは A からいへば購買であるが、W′ の所有者たる C からいへば、それは同時に販賣である。すなはち W なる商品の立場から見ての・W に含まれてゐる價値の最後の段階における轉形は、同時に W′ なる他の商品の最初の轉形である。ところで商品生産の社會にあつては、各生産者は、自然に發達した分業の結果として、各々特定の生産物のみを生産する。しかし彼れの消費する生産の種類は、彼れの生産する生産物の種類が限定されるのと逆比例を保つて、無限に增加する。だから例へば、A は W を販賣することによつて得たる貨幣をば、一纏めにして W なる一種類の商品を購買するために費すのではなく、實は種々なる種類の諸商品を購買するために費す。從つて、一商品の最終の轉形は、次に示すが如き無數なる他の商品の最初の轉形の總和から成り立つてゐる。

そこで最後に、一個の商品の轉形の全體を一纏めに觀察すると、それはその最も簡單な形態において、四個の極と三人の登場人物とを必要とすること、次に示すが如くである。

〔第一の極〕W—(A) 第一の商品所有者（最初の賣手）

〔第二の極〕G—(B) 第一の貨幣所有者

〔第三の極〕G—(A) 第二の貨幣所有者（第一の商品所有者が扮裝を改めて二たび登場）、

〔第四の極〕W′—(C) 第二の商品所有者

かくてそれは、二つの反對した形態における商品の轉形、すなはち W—G なる販賣と、G—W なる購買とが、互に對立しながら、しかも互に補充し合ふことから成り立つ。（W—G と G—W とは、その各各が既に對立的な極から成り立つてゐる。すなはち一方の極が商品であれば他の極は貨幣であり、一方の極が貨幣であれば他の極は商品である。しかるに、W—G と G—W とは、一方は商品から出發し、他方

は貨幣から出發するといふことにおいて、互に反對の道行をしてゐる。商品のなかに統一されてゐる使用價値と價値との對立は、此の如き諸對立となつて現はれるのである)。そして第二段においては、一定の價値が商品形態を離脱して貨幣形態を採り、第二段においては、貨幣形態に宿れる價値が再び商品形態に復歸し、結局一個の循環を完成する。ところで、一個の商品(すなはち W)の循環を完成するところの、これら二樣の轉形は、同時に他の二つの商品(すなはち W′ および W″)の循環過程の半ばを形成するを常とする。

何故といふに、A にとつて W なる商品の第一段の轉形を形成するところの W—G は、G の所有者たる B にとつては G—W である。そしてその B が金の生産者にあらざるかぎり、現在彼れの有するところの G は、彼れが以前に所有してゐた商品例へば W″ を販賣することによつて——(すなはち W″—G なる過程によつて)——得たものでなければならぬ。して見ると、A にとつての W—G は、B にとつて G—W であると同時に、その G—W は、W″ なる商品の循環過程(すなはち W″—G—W)の後半を形成するものである。それと同じやうに、A にとつて W なる商品の第二段の轉形を形成するところの G—W′ は、W′ の所有者たる C にとつては W′—G である。すなはちそれは、C にとつて W′ なる商品の第一段の轉形を形成するのであり、やがて G—W″′ なる轉形によつて補はるべきものである。なほそれのみでなく、既に述べたやうに、G—W′ は實は g—w, g—w′, g″—w″, 等、等、の無數の轉形から成り立つことを常とする。だから、それは同時に、w, w′, w″, ……の諸商品の第一段の轉形すなはち w—g, w′—g′, w″—g″……を形成するのであり、やがてまた g—w″, g—w′, g—w″, ……なる諸轉形によつて補はるべきものである。

此の如くにして、或る一つの商品の轉形を描くところの循環は、他の多數の商品の循環と、離るべからざる關係において連れ合ひ、一つの商品の運動は無數の商品の運動をひき起し、かくてその總體の過程は商品世界における諸商品の流通となつて現はれる。

これは單なる商品の流通である。ところで後の章で説明するやうに、單なる商品は資本家的社會においては資本家的商品となり、資本に轉形するのであり、從つて商品の流通もまた同時に資本としての流通——單なる商品流通としての規定の外に、資本の流通としての規定が加はつたもの、從つて單なる商品流通よりもより具象的なもの——となつて現はれる。これは第三篇資本の流通過程において説明せんとするところのものである。

商品流通と資本流通との差異は後に至つて述べる。こゝには商品流通とそれ以前の物々交換との差異を述べておかねばならぬ。

W—G—W′ なる一商品の轉形を見るときは、貨幣は明かに、W なる一商品と W′ なる他の商品との交換を媒介してゐる。そこで之を皮相的に觀察するならば、貨幣によつて行はれる商品の流通も、その實質から云へば、W と W′ との直接の交換、すなはち barter(物々交換)と同じことであつて、異なるところは、ただその間に貨幣が介在して、相互の交換を媒介すると否との形式の點のみであるといふ考が起る。けれども商品流通は、たゞに形式的にのみならず、また實質的にも、barter(物々交換)と異なるもので

ある。例へば、Bなる者が酒を或る人に賣つて得た代金をもつて、Aから織物を買うたとする。さうしてAは、その織物をBに賣つて得た代金をもつて、Cから米を買うたとする。さうすると、Aのためには、明かに織物が米に變つてゐる。けれども彼れの織物は、米の所有者たりしCが買うたのではなくて、Bが買うたのである。さうしてCはAに米を賣つて得た代金をもつて、Dの所有する商品例へば帽子を買ふのであり、かくてCのためには、米が帽子に變はることになるのである。だから、この場合、Cの所有してゐた米は、Aの所有に歸するけれども、Aの所有してゐた織物は、Cと關係なきBの所有に歸するのであつて、Aの商品たる織物と、Cの商品たる米とが、AとCとの間において相互に入れ代はるのではなく、從つて物々交換の行はれる場合と、全くその實質を異にするのである。すなはちAはBに織物を賣つたけれども、Bからは何物も買はず、却つてCから米を買ひ、またCはAに米を賣つたけれども、Aからは何物も買はず、却つてDから帽子を買ふのである。斯樣にして、商品流通は、第一に、物々交換に伴ふところの、生産物の交換に對する個人的、地方的制限を打ち破る。(交換が廣く行はれるためには、どうしても貨幣が必要である。しかるに、商品は交換せんがために生産されるものであるから、商品生産が發展すれば、商品交換は必然的に廣く行はれねばならぬ。それゆゑ、それはまた必然的に貨幣の媒介による商品流通に發展するのである)。第二に、商品流通はまた、生産物交換の時間的制限を打ち破る。生産物の交換が直接に行はれる場合、例へば、AとBとが織物と米とを直接に交換する場合には、Aの所有せる織物がBに讓渡されることと、Bの所有せる米がAに讓渡されることとが必ず同時に起る。しかるに貨幣による商品流通の場合には、織物を賣つて一定の貨幣を得たAは、その貨幣をもつて必ずしも直ちに米を買ふことを要しない。既に述べたやうに、Aが織物を賣つたといふことは、同時にBが織物を買うたといふことであり、その點においては、販賣はすなはち購買であり、販賣と購買とは必ず同時に起る。けれども、一個の商品の轉形として、すなはち同じ一人の行爲として之を觀察すれば、先づ第一段に販賣が行はれ、しかるのち第二段に購買が行はれるのであり、そして此の如く相對立した二つの行爲の間には、長かれ短かれ、一定の時間の間隔が存在しうるのである。すなはち商品流通は、物々交換が行はれる場合に存するところの、自己の生産物を手放すこととと、他人の生産物を手に入れることとの間における、時間的の一致をば、互に時を異にするところの、販賣と購買との對立に分裂せしむることにより、(これもまた、商品に內在する矛盾の一つの展開である、)たゞに生産物交換の個人的、場所的制限のみならず、またその時間的制限をも打ち破るものである。最後に、生産物の交換範圍は、以上述べたるが如き、個人的、場所的、時間的制限の撤廢により、擴張せられて商品流通を形成するに至ると同時に、人々は、自分が全く左右することの出來ない社會關係のうちに卷き込まれ、一箇所に起つた狂ひが引いて全般に波及するやうな關係に連結されることとなる。例へば、Bが酒を賣つたからこそ、Aは織物を賣ることができ、またAが織物を賣つたからこそ、Cは米を賣ることができ、更にCが米を賣つたからこそ、Dは帽子を賣ることができるといふやうに、無意識の間に總ての人々が一般的に連絡される。(それは恰も、商品の價値形態が、物々交換の行はれる場合には、個別的な價値形態を採ると異り、商品流通の行はれる場合には、諸商品の相對的價値が總て貨幣で表現されることにより、相互に價値として連絡されるといふことと、正に相照應するものである)。そしてこのことは、商品流通の世

界には、既に恐慌の可能性が伏在してゐるといふことを意味する。商品流通は、生産物の交換が販賣と購買といふ相對立した二つの運動に分かれ、しかもこの相對立した二つの運動が互に補充し合つて一つに統一されるといふ過程に外ならぬのであるが、しかし既に一つの過程が此の如く相對立した二つの過程に分裂した以上、それと同時に、それらの過程が互に獨立することにより、その統一の破れうる可能性が存在するのである。商品流通は恐慌なくして行はれうるが、恐慌は商品流通なくしては起りえないといふのは、これがためである。

統一物に含まれてゐる對立物が分裂すると、對立物のうちの一方は他方に對して獨立する。しかも完全なる獨立は許されない。從つてその獨立的傾向が或る程度以上に達すると、强力的に統一に齎らされる。生産力と生産關係、經濟的な基礎と政治的な上層構造、物質的生活過程と精神的生活過程、これらのものの關係が皆なさうである。商品の運動は、對立的な二つの運動に、すなはち W—G と G—W とに分裂する。從つて全運動の一部が全體を離れて獨立的に自主的に動きうる。統一の破れうる可能性はかくて生ずる。だがその統一は破られ了ることを許されぬから、これを强力的に統一に齎らすための恐慌が起る。

なほ玆に恐慌の可能性といふは、その必然性と異る。恐慌が必然的のものとなるのは、商品が資本として運動するやうになつてからのことであり、それは吾々が第三篇資本の流通過程の最後に述べんとするところである。

吾々は以上をもつて商品流通の如何なるものなるやを觀察した。今貨幣は、此の如き商品流通の媒介者として、流通手段たる機能を有するものであり、且つ斯かる機能を發揮するものとしては、貨幣は飽くまで流通界に居殘ることを其の特徴とするものである。それは商品流通のために犧牲とされたる富である。

生産物が直接に交換される場合には、一定の使用價値が他の使用價値と互にその所有者を取りかへることによつて、それらの物は總て消費界に引き入れられ、交換の世界には何物をも殘さない。しかるに貨幣は、一つの商品の轉形が完了しても、自分自身は依然として流通界に止まり、いつまでもその流通を續ける。例へば、B が A から織物を買うたとすれば、その織物は、それが非使用價値であつた所から使用價値である所へ移され、それと同時に、流通界を出て消費界へ這入るのであるが、しかし貨幣は B から A に移されたとしても、決して消費界へ出るのではない。それは A が C から米を買ふことによつて、再び C の手に移る。さうして、すでに A が C から米を買うたとすれば、その米は、やはり、それが非使用價値であつた所から使用價値である所へ移され、これによつて流通界と緣を絶ち消費界に這入つてしまう。しかし、斯樣にして織物、米、等々の諸商品は相次いで流通界から消費界に引き出されるに拘らず、貨幣そのものは、常に商品の去つた後の空席を占めることにより、決して消費界に出でない。前に述べたる例によれば、貨幣は B から A に、A から C に渡り、なほ C がこれをもつて帽子を買ふならば、それは更に D の手に移り、斯樣にして貨幣は、飽くまで流通界に居殘ると同時に、益々最初の出發點から遠ざかる。既に述べたやうに、商品の流通は一つの循環運動である。すなはち A の手にあつた織物なる商品に含まれてゐる價値は、米といふ商品に形を轉ずることによつて、再び A の手に復歸す

るのである。しかるに、此の如き商品流通のために起る貨幣の運動、それが謂はゆる貨幣の流通なるものであるが、その形態は正に循環の逆であつて、それは最初の出發點から次第次第に遠ざかるといふ直線的な形態を採る。かくてそこでは、すべての事態が逆に反映される。すなはちそこでは、運動の連續性が貨幣の側に落ち、從つて貨幣の直線運動が商品の循環運動に代はり、また貨幣運動は商品流通の結果であるに拘らず、逆に商品流通が貨幣運動の結果であるかの如く見えてくる。

貨幣の介在のために、商品轉形の循環的性質が蔽はれる。W—G と G—W′ との二つの反對した運動が、いづれも W—G と W′—G（または G—W と G—W′）といふ同じ形態を具へた二つの獨立したもののやうに見えてくる。そこで W と W′ とが互に入れ代はるといふ本質的な關係が表面的には全く隱されてしまふ。すなはち W—G—W′ と連續した形態——この形態のうちに本質が横たはつてゐるのに——が看過され、それがたゞ W—G だけに切られるから、かの W—W′ といふ物々交換の形態と同じものに見え、W が再び W′ に復歸するといふ關係が隱蔽されるのである。かくて商品の循環運動は眼に着かず、その代りに運動の連續性は貨幣の直線的な運動の上に落ちてくる。すなはち次の圖に示す如くである。

この循環が看過される

Ⓐ $W — G — W^1$
Ⓑ $W^1 — G — W^2$
Ⓒ $W^2 — G — W^3$
Ⓓ $W^3 — G — W^4$

↓ 運動の連續性が茲に現はれる。

諸商品が（前掲の圖についていへば、$W \cdot W^1 \cdot W^2 \cdot W^3 \cdot W^4$ 等々が）貨幣 G の上へ前記の如き働きかけをなすことによつて、貨幣は流通手段として運動しうるのである。だから貨幣運動は商品流通の貨幣による表現にすぎないのである。けれども、それが逆に、流通手段たる貨幣の機能なるものが先づ存在し、かゝる貨幣の機能によつて商品が初めて運動に移されるやうに見える。動力の本源が逆に見えてくるのである。

商業にあつては、商品の轉形は貨幣の轉形となり、W—G—W の代はりに G—W—G となる。從つて貨幣はその出發點に復歸するのであり、それは後に述べるやうに、際限なく繰返されうる。けれども W—G—W にあつては、貨幣は永久に去つてしまふ。再び貨幣を手に入れるためには、重ねて新たなる W を流通界に持ち出して來ねばならぬ。

以上述ぶるが如く、流通手段としての貨幣は飽くまでも流通界に止まる。そこでこの流通界に止まる貨幣の分量、言ひ換へれば、商品流通のために犧牲とされなければならぬ金の分量は、如何にして決定されるかといふ問題が起る。

既に述べたやうに、商品の流通は總て商品と貨幣との對立的形態のもとに行はれる。すなはち一つの商品の轉形は、たとひ販賣と購買との相反對した二つの過程に分かれるにしろ、その販賣も購買も、總て一樣に、一方の極には商品が立ち、他方の極には貨幣が立ち、この兩者が相互に交換されることによつて行はれる。それゆゑ、假に g を以つて商品の分量を現はし、p を以つてその價格を現はし、g を以つて之

と交換される貨幣を現はすならば、一定の社會（例へば日本）一定の期間（例へば一ヶ年間）において、商品の流通を構成するところの個々の賣買は、次の如き無數の方程式をもつて現はすことが出來る。

$$q \times p = g$$
$$q' \times p' = g'$$
$$q'' \times p'' = g''$$
$$\cdots\cdots\cdots$$

更にこれを合計すれば、次の如き一個の方程式が出來る。

$$(q \times p) + (q' \times p') + (q'' \times p'') + \cdots\cdots = g + g' + g'' + \cdots\cdots$$

今この方程式の右項の $g+g'+g''+\cdots\cdots$ は、商品の購買のために提供せられる貨幣の總金高を示すものであるが、しかしそれだけの金額の貨幣が流通界に存在するわけでは決してない。何故といふに、吾々が今研究しつゝある單なる商品の流通にあつては、商品はただ一回しかその所有主を變更せぬものと假定されてあるけれども、（販賣のための購買が行はれるやうになれば、貨幣は資本に轉形するのであり、從つて流通は單なる商品の流通でなく、資本としての流通になる）、これと異なり、貨幣は一定の商品と交換された後も依然として流通界に止まり、幾度となく他の種々なる商品と交換さるべきものだからである。

そこで吾々が今、一定の期間（例へば一年間）に同じ貨幣が賣買の用に供せられる度數すなはち流通速度（Velocity of Circulation, Umlaufsgeschwindigkeit）の平均を現はすに V をもつてし、流通貨幣の數量を現はすに G をもつてし、更に Q をもつて賣買せられる商品の單位數を、また P を以て一單位の商品の平均價格を現はすとするならば、前記の方程式はこれを次の如く書き改めることが出來る。

$$QP = GV$$

從つて $\frac{QP}{V} = G$

右のうち QP は例へば圓で現はされる。從つてこれを V で割つたものも、圓を單位とした數量である。そしてそれが、圓で計算された流通貨幣の數量である。

この方程式は、吾々が問題を當面の階段に限定するかぎり、一定の社會に必要とせられる流通貨幣の數量を示すものとして、一般的に妥當するものである。すなはち G は、QP にして變化なしとすれば、貨幣の流通速度の遲速に逆比例して增減し、また V および P にして變化なしとすれば、市場に投げ入れられる諸商品の分量の增減に比例して增減し、更に V および Q にして變化なしとすれば、諸商品の價格の騰落に比例して增減する。もちろんそれは總ての商品が同時に騰落することを必要としない。或る場合には、いくつかの主要產物の價格が變動しただけで、貨幣と交換さるべき商品の總價格は增減しうるのであり、從つて必要とされる流通貨幣の分量も增減するのである。

しかし前記の方程式は、他の多くの場合におけると同じやうに、數學の式と異なる。すなはち働きかける原因となるものは左項に集まつてをり、右項の G はそれら諸原因の結果に過ぎない。だから、その因果を顚倒して、例へば Q および V にして變化なきかぎり、一般物價は流通貨幣の數量の增減によつて騰落するものと考へてはならぬ。それは古くから行はれてをり、近くは Fisher の The Purchasing Power of Money 1911.（高城仙次郎氏譯『貨幣と物價』大正二年發行）により代表されてゐるところの、貨幣數量

說なるものの謬見に屬する。けだし諸商品の價格が騰貴したために、流通貨幣の數量が增加するのであるけれども、それが吾々の頭腦に反映されるときは、貨幣の數量が增加したために諸商品の價格が騰貴したかの如く見え、現象形態が事物の本質と逆になるのであり、そこから貨幣數量說なる謬見が生ずるのである。もちろん諸商品の價格の變動は貨幣材料の側における變化に基づくことがある。例へば、諸商品の價値が不變であるかぎり、その價格は、貨幣材料の價値の下落につれて騰貴し、その騰貴と共に下落する。しかも既に諸商品の價格が變動するならば、他の事情にして變化なきかぎり、流通貨幣の數量もまた變動しなければならぬ。そこで流通貨幣の增減が諸商品の價格の騰落を惹き起したかに見える現象が生ずるのであるが、しかしこの場合における流通貨幣の增減は、その原因を價値尺度としての貨幣の機能に存するのであつて、流通手段としての貨幣の機能に存するのではない。すなはち貨幣材料たる金の價値が先づ變動したために、それと逆比例して諸商品の價格が變動し、そしてかゝる諸商品の價格の變動を媒介として、初めてそれに正比例するところの、流通貨幣の分量の增減が起るのであり、それと逆に、流通貨幣の分量が增減したために、諸商品の價格が騰落したのではない。

なほ最後に注意すべきことは、流通貨幣の數量に關する以上の法則は、貨幣商品（Geldware）たる金自體が流通手段たる機能を擔當してゐるといふ最も簡單な場合の法則だといふことである。從つてそれは、貨幣の章標または信用貨幣等の成立に伴うて、なほ複雜なものに轉化しなければならぬが、しかも此の最も簡單な場合の法則が、より複雜な場合にとつて、いつもその Element（要素）となり Grundlage（基礎）となつてゐるといふことは、他の多くの場合と同じである。

吾々は以上を以つて、商品の流通は如何にして行はれ、また流通貨幣の數量は如何にして決定せられるかを述べたが、次に述ぶべき問題は、流通手段として金は如何なる姿を有つかといふことである。

金は流通手段として鑄貨（Coin, Münze）といふ特別な姿を有つことになる。言ふまでもなく、それは價格の本位に適應して造られる。既に述べたやうに、價格の本位を定むること、例へば純金の量目二分をもつて圓となすことは、國家の權內に屬するが、それと同じやうに、今日の社會においては、造幣――すなはち金をして鑄貨の姿を取らしむること――もまた、國家の權內に屬する。それゆゑ貨幣が鑄貨の姿で現はれるのは、一國內に限られる。（それは一國內に限られた言葉――例へばポンド、フラン、圓、等々――を有ち、また相互に異なつた意匠を有ち、鑄貨としてのその通用には國民的の制限がある）。それは國際市場に出づるとき、鑄貨としての姿を脫ぎ棄て、單なる地金となる。

自由造幣ならびに自由鑄解が許されてゐるかぎり、本來地金としての金と鑄貨としての金とは、ただ前者が匁をもつて秤られ、後者が圓をもつて量られるといふ差を有するだけで、金は絕えず一方の形態から他方の形態へ變りうる。けれども、鑄貨は、たとひ削盜等が行はれないにしても、少くともその流通に伴ふ自然の磨損により、次第に量目を減ずる。すなはち鑄貨として完全な姿を持たされたといふことは、同時にかゝる完全な姿を失ふための第一歩である。從つて鑄貨の名目上の內容は、必然的に、實際の內容と相違してくる。かくて流通手段としての金は、それによつてその價格を實現されるところの、商品の現實

的な等價物ではなくなる。もしこれを自然の成行に放任するならば、流通手段としての金は、價格の本位としての金と、全く絶縁されるに至るであらう。これ諸國の貨幣法において、最輕通用量目の規定を設くるゆゑんである。しかし何れにしても、鑄貨の名目上の內容は實際の內容と相違することを免れぬのであるが、このことのうちには、流通手段としての鑄貨が、價値尺度たる貨幣材料以外のもので造られた symbol（章標）によつて代理されうるといふ可能性が、必然的に含まれてゐるのである。すなはち貨幣がその symbol へ轉形するといふことは、貨幣が流通手段となるといふこと其れ自體のうちに含まれてゐるのである。

なほ小額の取引に用ひらるべき鑄貨を金で造ることは、技術上困難であるから、金よりも價値の少い金屬、すなはち銀、ニツケル、銅、等々を材料として、謂はゆる補助貨幣なるものが造られる。これを歷史的に言へば、下級の金屬は元と價値の尺度としての機能を有ち、從つて貨幣として流通してゐたのであるが、その後、價値尺度としての機能は、銅から銀に移り、銀から金に移つたに拘らず、銅貨および銀貨は引續き流通手段たる機能を發揮することによつて、自然に補助貨幣たる性質を有つに至つたものである。今これら補助貨幣の名目價値がその實際の價値と全く獨立してゐることは、言ふまでもない。斯樣にして流通手段としての貨幣の機能は、次第に價値尺度としての貨幣の機能から外見的には獨立するに至るのであるが、その極、遂には殆ど價値のない單なる紙片が、鑄貨の代りに流通手段たる機能を有つに至るものである。

斯樣に價値の少い物がよく金の代りに流通手段たる機能を有ちうることは、決して不思議ではない。けだし貨幣としての金は、流通手段としての機能以外に種々なる機能を有つものだけれども、しかしそれが流通手段として現に流通しつゝある場合には、流通手段としての機能がその他の諸機能から獨立して孤立することになるのであり、それはたゞ流通手段としての機能のみを有つに過ぎない。それゆゑ、金の代りに流通手段たりうるものがあれば、金はいつでもそのものに席を讓りうるのである。詳しくいへば、W—G—W′ なる過程における流通手段としての貨幣の機能は、A の所有せる W が B の所有せる W′ に轉形するまで一時その價値を體現してゐるに過ぎぬのであり、從つて B が W′ の對價としてそれを受取るかぎり、それは如何なるものであらうとも A にとつて無關心な問題である。同じことは、B. C. D. E. 等々その他の商品交換者にもみな當てはまる。だから、國家がもし、補助貨幣または紙幣を法貨として認め、これに强制通用力を附與するならば、それが商品の對價として通用することが保證されるがゆゑに、それは（かゝる强制力が有効である一國のうちでは）完全に流通手段としての金の代理者となりうるのである。しかし此の如き symbol（章標）の代表する價値は、いつでもそれが代理するところの金の價値によつて定まる。もちろん此の如き章標が金の代理をするやうになると、W—G—W′ なる過程において、これらの章標は直接に商品の價値を表示するものの如く見え、それは金の價値とは何等の關係もなく、たゞ價格として表現されてゐる商品の價値をのみ表示するものであるかの如き外觀を呈する。從つて貨幣による商品の流通は、その實質においては、全般的に行はれる物々交換と同じであるといふ考を起さず。けれども、實際においては、これらの symbol は直接には金の symbol であり、ただ間接に商品の價値の symbol たるに過ぎない。

流通手段として必要とされる金の數量が如何なる事情によつて決定されるかは、前に述べたところであ

るが、今、單なる紙片が完全に金の代理をなしうるのは、金が流通手段としての機能しか有たなくなつた場合に限られるのであるから、その範圍は流通手段として必要とされる金の數量によつて限定される。例へば假にその數量が一億圓であるとするならば、一圓札ならば一億枚、十圓札ならば千萬枚だけのものが、完全に金の代理をなす。かゝる場合には、金の價値の騰落に正比例して、紙幣の代理する價値も騰落する。尤も流通手段として必要とされる貨幣の數量が一億圓であるに拘らず、十億圓の紙幣を發行するといふことは、いつでも國家のなしうるところである。しかし國家のなしうるところは、それに止まる。一旦それらの紙幣が流通界に流れ込んだならば、個々の紙幣が代理する價値は、何人の意志からも獨立するところの、それ自身に内在する法則によつて決定される。すなはち十億圓の名稱を有する紙幣も、事實においては、一億圓の金を代理しうるに過ぎない。かくて十億圓の紙幣を流通界に投げ入れたといふことは、その結果からいふと、價格の本位の名稱を改めたのと同じことであつて、すなはち一般商品の價格は十倍に騰貴することになる。謂はゆる貨幣數量説は、最初かゝる場合の現象に捉はれて發生したものである。

さて以上述べたところによつて見れば、金が流通手段として實際に流通してゐる場合と、紙幣の如き金の章標が流通してゐる場合とでは、總ての法則が逆になつて現はれる。けだし金は價値であるがゆゑに流通するのであるが、金の章標は、國家により法貨として認められ、金の代理者として流通するがゆゑに、金の價値を代理するのである。しかもその外觀においては、これらの章標は、直接に商品の價値を代理するが如くに見える。次に、流通手段としての金の分量は、商品價格の騰落につれて增減するのだけれども、紙幣が流通する場合は、逆に商品價格が流通紙幣の增減につれて騰落するやうに見えてくる。また商品流通が流通手段として吸收しうる金の分量は、與へられた條件の下では一定してゐるが、紙幣はいくらでも流通界に投げ入れられ得るやうに見える。更にまた、流通商品の總價格が一定してゐるならば、流通手段として必要とされる金の分量は、それ自身の價値に依存するのであるが、紙幣は金の章標たる限りにおいてのみ價値を代理するのだから、個々の紙幣が代理する價値は、流通界に投げ入れられた紙幣そのものの分量に依存する。（分量がそのものの價値によつて決まるのでなく、逆に、その代理する價値がそのものの分量によつて決まることになるのである）。斯樣にして總ての法則は逆となつて現はれるのみでなく、もし金の章標の數量が恰も同じ額面の金に代つて流通する限りにおいては、金の流通に關する法則がそのまゝ之に當てはまるのであり、從つてこれらの章標の金に對する代理關係からのみ生ずるところの特殊の法則は、その場合には全く消えてしまふのであるから、問題は可なり複雜である。從つてもし吾々が貨幣流通の現象をば、金の章標の流通の側からのみ觀察するならば、吾々は到底、流通手段としての金の機能の明白なる理解に達することができないのである。

第三節　價値物自體としての貨幣

吾々は本章の第一節において、金は價値の尺度たる機能を有することを述べたが、金がかゝる機能を發揮するためには、それはたゞ觀念的な貨幣として存在すれば足りるのであり、物の長さを測るための物指のやうに、價値を秤量する度毎に、現實の貨幣はそこへ持ち出される必要はない。だから、貨幣たる金は

かゝる機能のために、個人的欲望の目的物となることはない。また第二節において述べたやうに、金は更に流通手段たる機能を有つものであるが、それは流通手段たることそれ自身の理由により、何人のためにも個人的欲望の對象となるのではなく、從つて單なる紙片でも、それが國家の保證によゝ流通するかぎり、金の代理者として流通手段たることをうるのである。しかるに本節において述べんとするところは、一般的等價物としての貨幣自體が個人的欲望の對象となるに至る場合である。

a) 蓄財手段

貨幣はすべての商品に對し一般的等價形態に立つものであり、如何なる種類の商品とも交換されうるものであるから、それは一切の富の代理者であるといふことができる。それゆゑ、商品交換の發展に伴ひ、人々はその過剩生産物を貨幣の形態に換へて貯藏することになり、かくて價値の貯藏のための蓄財手段たることが貨幣の新たなる機能となる。貨幣が蓄財手段とされるに至ることは、商品流通の發展がすでに或る程度に達し、貨幣さへ持つてをれば、欲しいと思ふ物が大部分は手に入れうるといふやうになつてからでなければ、行はれないのであり、またさうなれば、必然的に行はれてくるものである。

『續日本記』和銅四年五月己未の記事（『大日本貨幣史』本篇、三貨部、二〇頁）にいふ、『同日詔シテ曰ク、夫レ錢ノ用タル、以テ財貨ヲ通ジ、有無ヲ易ル所ナリ、當今百姓尚ホ習俗に迷ヒ、未ダ共理ヲ解ラズ、僅ニ賣買スト雖モ猶ホ錢ヲ蓄フルモノナシ。其多少ニ隨ヒ、節級シテ位ヲ授ケン。其レ從六位以下、錢ヲ蓄フルコト一十貫以上アルモノニハ、位一階ヲ進メテ叙セヨ。二十貫以上ニハ二階ヲ

進メテ叙セヨ。初位以下ハ五貫アルゴトニ、一階ヲ進メテ叙セヨ……。』

以上の記事は、當時における商品生産がまだ頗る幼稚であつたことを物語るものである。

流通手段たる貨幣が價値の貯藏物に轉形する契機は、貨幣の流通そのもののうちに、必然的に含まれてゐる。（貨幣の諸機能の發展は、かくて皆な必然的なものとして把握される）。何故といふに、商品の流通 W—G—W′ は、W なる商品を販賣して之を貨幣に換へることと、その貨幣をもつて W′ なる他の商品を購買することとの、二つの過程から成り立つのであるが、これら二つの過程は、事實上決して同時に行はれうるものではなく、從つて貨幣は、これら二つの過程の中間において、長かれ短かかれ、ともかく一定の期間、價値の貯藏物たる性質を有しなければならぬからである。なほそれのみでなく、既に本章の第二節に述べたやうに、例へば A が W を販賣することによつて得たる貨幣は、これを一纏めにして W′ なる一種類の商品を購買するために一時に支出するのでなく、實は種々なる種類の商品の購買に充てられるを常とするのであるが、それら商品のうちには必要に應じて一定の分量づつ購入し得られるものもある。（かかる事情は、資本の運轉の場合には、その一部が必然的に運動休止の狀態に置かれる結果を齎らし、やがて資本信用の發達を促す一事情となる。）だから流通貨幣の一部は代はる代はる休止の狀態に置かれることを免れないのであつて、その點において、貨幣は流通手段として用ひられる場合においても、なほ必然的に、價値の貯藏物たる機能を併せ有することとなるのである。

けれども、貨幣が流通手段として用ひられるに當り、以上の理由によつて、一時休止の狀態に置かれるといふことは、貨幣の流通速度に關係を有する問題たるに止まり、それは貨幣に新たなる機能を賦與する

ものではない。貨幣が價値の貯藏物として獨立の機能を有つに至るのは、商品の販賣者が商品の轉形を第一段で中止することを目的となすがために、流通手段としての貨幣の機能が意識的に妨げらるることによつてである。すなはち販賣と購買といふ二つの對立した過程の統一物であるところの、一商品の轉形が、離れ離れになつた二つの獨立した過程に分裂し、購買を伴はざる販賣が行はれるに至つて、貨幣は初めて價値物としての存在そのものを目的とするに至るのである。

剩餘としての富の最初の形態は、流通手段としての貨幣が痲痺狀態に置かれたものから成り立つ。商品流通の初期、すなはち自家生產がなほ廣く行はれてゐる階段においては、交換のため持ち出される生產物の多くのものは、過剩生產物であるが、すでに直接なる生產物の交換の代りに、貨幣による商品の流通が行はれるやうになれば、これら過剩の生產物は、貨幣と交換されることにより、貨幣の形態そのまゝで貯藏されるのであり、かくてこの場合の貨幣は、剩餘としての富が捨象的な社會的な富として蓄藏されるところの、最初の形態を代表する。なほ商品生產が一層發達してくれば、それと共に人々の生活は、益々他人の所有する商品の購買に依存することになるから、生活の安定を確立しようとすれば、貨幣の形において一定量の富を常に保持してゐなければならぬ必要が次第に增してくる。從つて、買ふことなしに賣るといふこと、すなはち蓄財（Schatzbildung, hoarding）が、益々行はれてくるやうになる。ところで、買ふことなしに賣るためには、何人かが同時に、賣ることなしに買ふのでなければならぬが、それは金の（銀が貨幣材料たる場合は、銀の）生產者によつて行はれる。斯樣にして金はその產地から流れ出で、買ふことなしに賣る人に出會ふ毎に、その流通を中止して、價値の貯藏物に化石する。

蓄財の衝動はその性質上無限である。けだし貨幣は如何なる種類の商品とも直接に交換されうるものであるから、それは富の一般的な代表者であり、品質的には限界のないものである。けれども、それと同時に、現實の貨幣は一定の分量を有つてをり、從つてそれは或る限られたる分量の富を購買しうるに止まる。斯樣にしてその分量上の制限は、そのもの自身の品質と矛盾する。そして、かゝる矛盾のために、貨幣蓄藏の欲求は、必然的にその分量增加の欲求を伴ふ。しかるに、分量の增加そのものには際限がない。それゆゑ何人かが此の一般的な社會的な價値物を自分の私有物としようとするときは、彼れ自身が甚しき矛盾に陷る。單なる商品流通の立場のみからいふならば、蓄財の條件は、購買を伴はざる販賣の絕えざる繰返しである。さうして此の如き販賣を絕えず繰返すための條件は、積極的には勤勉、消極的には節儉（併せて言へば勤儉）である。そこで蓄財家は、その限りなき欲望を充さんがために、總ての欲望を節することになる。

かゝる矛盾を解決するものは、第二篇で述べるやうに、資本家的生產である。資本家的生產のもとにおいては、資本家は自己の消費を節約することなくして資本の增殖を實現しうるのである。しかし、言ふまでもないことだが、資本家的生產の成立によつて商品世界における總ての矛盾が撤廢されるわけではない。むしろ逆である。矛盾は一方において解決されつゝ、他方においては益々增大するのである。

各個人の手許に、以上述ぶるが如くにして貯藏される貨幣は、銀行業の發達に伴ひ、銀行に吸收されてその準備金となることにより、これが性質を變ずる。それはなほ後に至つて吾々の考察せんとするところ

である。

b) 支拂手段 (Zahlungsmittel, means of payment.)

既に本章の第一節で述べたやうに、貨幣が流通手段として機能する場合には、商品の轉形は W—G—W′（商品——貨幣——他の商品）なる形式を取るのであり、且つこの場合には、第一に、Wなる商品の所有者はこれを手離すと同時に B から G を受取り、第二に、A は一旦入手した G を C に引渡すことにより、同時に C から W′ を受取るのである。そしてこの第一の過程と第二の過程とはもちろん同時に行はれるものではないが、しかし第一の過程ならびに第二の過程における商品と貨幣との受授は、これまでのところ、すべて同時に行はれるものと看做してきた。ところが商品流通の發展につれ商品と貨幣との此の如き受授の過程もまた分裂する。かくて商品所有者相互の間に新たなる關係が發生すると共に、それに適應して商品所有者相互の社會關係の物的結晶たる貨幣の上にも、また新たなる機能が生まれる。例へば W なる商品の所有者 A が、その W をば事實 B に讓渡しながら、B はその價格に相當する貨幣をば、一定の期日後に支拂ふことを約束するに止まるときは、貨幣が舞臺に現はれない前に、商品の一方的移轉が行はれ、場合によつては、その商品は既に消費され、その形を失つた後、約束された期日に、初めて一定の貨幣が B から A に引渡される。かくて此の場合には、貨幣と商品との受授が同時に行はれず、販賣者および購買者は、債權者および債務者といふ新たな關係を結ぶことになり、これに應じて、貨幣もまた、流通手段としての貨幣から支拂手段としての貨幣に轉形するのである。

Ⓑ W″—G—W

Ⓐ W—G—W′

Ⓒ W′—G—W‴

貨幣が流通手段として商品の轉形を媒介する場合には、上記の三つの取引は時間的順序を追うて起る。しかるに貨幣が支拂手段たる場合には、先づ C が絹糸を A に賣り、A はそれを織物にして B に賣り、しかる後、B から一定の貨幣を受取り、それをば C に渡すといふやうに、その順序は前の場合と逆になりうる。且つその場合に、一定の貨幣が B から A に、A から C に渡されるといふことは、既にそれ以前に行はれた賣買に伴ふ必然の結果である。このことは、商品所有者の關係が、賣買關係の外に信用關係を伴ふことになつたために起るのであつて、商品所有者が前の場合よりも一層複雜な關係に入り込んだことを示す。

そこでこの場合における W—G なる取引を見ると、現實に存在するものは一方の極における商品だけで、他方の極における貨幣は價値の尺度としてただ觀念的な存在を有するに過ぎない、しかしそれは販賣されたる商品の價値を價格に表現することにより、同時に債務者の負債となるべき貨幣額を測る。のみならず、それは更に觀念的な購買手段として働く。B から A に引渡されるものは、將來一定額の貨幣を支拂ふべしとの約束の證書（將來引渡さるべき貨幣の反射物）である。この證書は、第二節に述べた金の symbol（章標）が國家の保證のもとに强制的通用力を有すると異なり、將來一定額の貨幣を支拂ふべしとの一私人の保證を表示したものに過ぎないから、それは當事者の間に結ばれる私的契約により、販賣者および購

買者といふ賣買關係の外に、債權者および債務者といふ信用關係が成立する場合にかぎり、初めて購買手段となるのである。もちろんこの契約は法律の保護を受ける。だから期日に至りBがその債務を履行しなければ、彼れの所有物の强制賣却が行はれる。すなはち彼れが彼れの所有する商品を販賣することは、貨幣が流通手段として働く場合のやうに、彼れ自身の個人的必要からではなく、社會的に必要なこととして結局は法律の强制を受けるのである。けだし支拂手段としての貨幣は、貨幣が作用するより以前に形成された社會關係を始末するために必要とされるものだからである。すなはち商品の賣買は既に行はれ、その商品は恐らく既に消費された後に、貨幣は價値を物體化したものとして商品の買手たるBから賣手たるAに引渡されるのであり、これによつてAは初めて彼れの商品の轉形の第二段G—Wを完成しうるに至るのである。かくて以前の單純なる過程W—Gは、今や時間的に分離されたる次の如き二個の構成部分に分裂する。

Ⓐ
Ⓑ W—→ ……(時間の間隔)……←—G

一定の期間內に支拂手段として必要とされる貨幣の數量は、商品の讓渡によつて生じたる債務のうち、その期間內に滿期となるべきものの總金額によつて決まる。しかしそれは、次の二つの事情によつて、それよりも遙に少き金額となる。その第一の事情は、同じ貨幣が同一の期間內に幾度も支拂手段となることであつて、それは卽ち支拂手段の流通速度に係る問題である。さうして此の流通速度は、AがBに對して債權者であると同時に、Cに對しては債務者であるといふやうに、債權者と債務者との關係が繫がれてゐて、BがAに支拂ふといふやうな關係に置かれてゐると云ふことと、これら種々なる支拂期日の間における時間の長さとによつて、決定される。

第二の事情は、多數の支拂が同時に相並んで行はれることである。多數の賣買が同時に相並んで行はれることは、流通手段として必要とされる貨幣の數量をその流通速度によつて補ふことに對する制限となるが、これに反し、多數の支拂が同時に相並んで行はれるならば、相互の債權債務を相殺することにより、清算の結果だけを現金で支拂へば濟むことになる。例へばAはCからWを五百圓で買ひ、CはBからW″を六百圓で買ひ、同時にまたBはAからWを四百圓で買ひ、さうして此等の金額に相當する債務が何れも同時に滿期に達したと假定する。さうしたならば、CはBに六百圓支拂はなければならぬが、同時にAに對しては五百圓の支拂を受くる地位にある。そこで彼れは百圓だけBに支拂ひ、殘りの五百圓はAに指圖して直接にBに支拂はしめる。ところがAはBから四百圓の支拂を受くべき地位にあるのだから、差引き百圓を支拂へば濟むことになる。斯樣にして總計千五百圓に上ぼる支拂は、相互清算の結果、二百圓だけの貨幣の受授によつて完了されることになる。此の如く、支拂手段として必要とされる貨幣の數量は、多くの支拂を同一の場所に集中することによつて甚しく節約することができるのであるから、此の如き清算に對する特殊の設備は、信用制度のまだ發達しない時代において、すでに早くから行はれたものである。

支拂手段として必要とされる貨幣の數量は以上の如くにして決まる。それゆゑ一定の期間内に流通手段および支拂手段として必要とされる貨幣の數量は、その期間内に現金をもつて賣買さるべき諸商品の價格の總和に對し、第一には、その期間中滿期となるべき諸支拂の總和を加へ、第二には、互に相殺される諸支拂の額を差引き、次に之をば流通手段および支拂手段としての貨幣の流通速度をもつて割り、最後に、かくして得たる商から、同一の貨幣が或る時は流通手段として或る時は支拂手段として交互に働くために決濟さるべき金額を差引いたものに相當する。吾々が問題を商品流通の世界に限定するかぎり、貨幣が支拂手段として使用されるやうになつてからでも、それらの諸支拂は、商品の讓渡によつて生じた債務のために行はれるのであるから、必要とされる貨幣の數量が諸商品の總價格に依存するといふことには、變化はないが、しかし一定の期間内、例へば一日のうちに流通せる諸商品の價格の總和と、同じ日に流通する貨幣の數量とは、もはや一致しなくなる。何故といへば、一方には、將來その代價を支拂はるべき商品の讓渡が行はれ、他方には、過去に讓渡された商品の代價に相當する貨幣が支拂はれるのであるから。

さて商品の讓渡とその代金の支拂とが同時に行はれざることのために、貨幣が以上の如く支拂手段たる機能を有つやうになると、そこからまた信用貨幣（Kreditgeld, credit money）なるものが發生する。吾吾は先きに、A がその商品を信用によつて B に賣つた場合には、A は後日に至り B から貨幣の支拂を受けてからでなければ、彼れの商品の轉形の第二段を完成しえざるものと假定したが、信用貨幣の發生はかゝる事態に伴ふ不便を除去する。けだし A から商品を買取つた B が、その代金を一定期間に支拂ふべしとの約束を記載せる證書を A に交付するならば、その證書は、既に述べたやうに、貨幣として流通すべき國家的保證を有するものではなく、ただ一定額の貨幣を支拂ふべしとの或る私人の保證を有するに過ぎぬものであるが、しかし一定の人々の範圍内では、その私人の保證が安全と認められ、流通手段または支拂手段としてそれらの人々の間に流通することになる。さうなれば、それはすなはち信用貨幣となるのであり、これによりて、例へば A は B の約束せる支拂期日を待たずして、彼れの商品の第二の轉形を完了しうるやうになる。この信用貨幣は强制通用力を有する國家の紙幣と、根本的に性質を異にする。信用貨幣は、支拂手段としての貨幣を信用によつて置き換へたものであり、それは一定の貨幣を支拂ふべしとの私人の保證を基礎とするものであるから、貨幣に引換へられる見込がなくなれば、全くその價値を失ふ。これと異なり、紙幣は流通手段としての貨幣に代位するものであるから、それはたとひ不換紙幣であつても、その數量が流通手段として必要とされる金の數量に一致するかぎり、額面通りに通用する。またその數量がかゝる限度以上に超過するならば、それに應じて價値の下落を生ずるが、しかし國家紙幣の總和は常に一の統一體であり、この統一體内にある個々の札は他の札に對して連帶責任を有する。從つて紙幣は全體としてのみ價値の騰落を生じうるのであり、かゝる價値の騰落は個々の札について一樣に生ずる。しかるに信用貨幣の價値はその分量によつて左右されるのではなく、その兌換（額面通りの貨幣に轉化しうること）の確實さによつて左右される。從つてその確實性の程度に應じて、一々の信用證券の價値が互にまちまちとなるのである。

さて以上述べたるところは、すべて商品の販賣者および購買者が同時に債權者および債務者としての關係を結ぶことによつて生ずる信用に限られたが、今日の資本家的社會においては、此の如き信用の外に、更に資本の運轉に伴うて發生する信用がある。しかしそれは吾々が後の章において研究すべき問題であり、吾々の研究にとつての現在の段階は、簡單なる商品流通の世界である。

簡單なる商品流通の世界にあつても、商品生產および商品流通の發展につれ、同時に商品の賣買に伴うて發生する信用關係も複雜となり、從つてその破綻に基づく貨幣恐慌（Geldkrise）もまた、次第にその發生の可能性を增してくる。けだし信用關係によつて繫がれてゐる人々のうち、何人かが支拂不能に陷れば、それにつれて他の多くの人々が支拂不能に陷り、從つて信用證券はその信用を失ひ、貨幣として通用しなくなり、支拂手段としての貨幣は、忽ちにしてそのガス體の如き空なる計算貨幣の姿から、現金としての貨幣に一變するのだから、信用關係によつて繫がれてゐる人々の數が多くなればなるほど、また債權債務の相殺が廣く行はれることになつてゐればゐるほど、この空なる計算貨幣が突然現金に一變するといふことは、全體の取引の上に、必ず一大混亂を來たすことになるのである。平生無事の場合には、總ての商品が貨幣であるが如く見え、從つて諸商品の流通のため貨幣は無用であるかの如き外觀を呈するが、恐慌の場合には、貨幣は特殊の商品として諸商品の流通のため缺くべからざるものだといふことが、眼前の事實となつて明白に現はれる。

信用貨幣の發達に伴ひ、その機關としての銀行が發達する。商品所有者相互の間における債權債務は、一つ場所に集中せらるればせらるるほど、互に相殺されうる金額が增加するからである。しかし相互清算の殘高は、やはり現金で支拂はれなければならぬ。從つて支拂手段としての貨幣の蓄積が必要になる。そしてその必要額は取引の增加に伴うて增加するが、そのために必要な貨幣は、個人個人の手許に蓄財として貯藏されてゐたものが、銀行に集中されることによつて供給される。銀行の支拂準備金（Reserve fonds）といふのが卽ちそれである。既に述べたやうに、蓄財としての貨幣は、商品の轉形を中斷することにより、流通世界の外に退き、價値の貯藏物たる機能を有したものであるが、それが銀行の準備金となれば、商品の流通のために必要とされる貨幣の蓄積として、支拂手段たる機能を有するものに轉形するのである。

なほ商品生產が發達するにつれて、一定の使用價値の一方的移轉をば、貨幣の引渡に轉形せしめようとする傾向が起る。例へば、現物稅が貨幣稅となり、物納地代が金納地代となり、官吏に對する現物給付が貨幣俸給となるといふが如くである。此の如くにして、支拂手段としての貨幣の機能は、商品流通の領域外にまで延びることになる。

c）世界貨幣

以上吾々は、蓄財手段および支拂手段としての貨幣について述べたが、これもの場合においては、貨幣は必ずしも現實の金として現はれなくとも濟むのであり、その代用物によつて代理されえないこともなかつたのであるが、今最後に述べんとする場合は、金が國內流通の圈內を乘り越えて、商品世界の全體に對

し、一般的等價物たる機能を發揮することにより、世界貨幣たる資格を有する場合のことであつて、かかる場合には、金は絶對に現實の金として現はれなければならぬのである。

金は世界貨幣となることにより、單なる貨幣としての發展の極致に達する。けだし金が世界貨幣となるといふことは、それが全世界における有らゆる種類の商品と交換されうるものとなることを意味するのであり、かくなりてこそ初めて、眞に一般的な・抽象的な・勞働の結晶物として、それは純粹なる價値の塊りとなるからである。しかし世界貨幣たる金は、國内市場を見棄てると同時に、それぞれの國内における交換過程の發展によつて得たところの特殊の形態をば、總て脱ぎ棄て、地金としての本來の姿に立ち戻る。既に述べたやうに、金は國内市場において價格の本位となることにより、例へば日本にて金二分を圓と稱するが如く、金の分量は貨幣名をもつて呼ばれることになる。金はまた國内市場において流通手段たる機能を果すため、それぞれの國家により鑄貨として一定の形態と刻印とを附與される。しかしこれら特殊の形態は、金が國外に輸出されると同時に、全くその意味を失ひ、それは秤量貨幣としての最初の姿に立ち歸る。(かくてその形態の運動は螺線形の循環を描くことになる)。

世界貨幣の主要な機能は、支拂手段として國際貿易の差額の清算に使用されることである。それはまた富を一國から他國に移轉せんとするに當り、商品の形態で移轉することが不可能な場合に、價値を物體化したものとして機能する。

各國はその國内市場に對すると同じく、世界市場に對しても、一の準備金を必要とする。諸國における中央銀行の正貨準備なるものは、一部分は貨幣が國内の流通手段および支拂手段として有する機能のために必要とされるのであるが、一部分は世界貨幣として有する機能のために必要とされるのであり、且つこの後の目的の方が益々重要さを加へ來たるのである。

第二篇　資本の生産過程

吾々が以上第一篇において考察した商品および貨幣は、それ自身としては、まだ資本ではない。商品および貨幣は、後に説明するやうに、ともに資本の現象形態となるものであるが、以上の範圍内においては、それらのものは資本としての諸機能を捨象されてをり、(從つてそれらは資本に比しより捨象的な範疇に屬する)、それらのものの資本としての機能はまだ全く現はれてゐない。だから、以上述べたるところは、多かれ少かれ商品の生産および流通が行はれたる限りにおいて、過去の社會諸形態の總てに妥當する。(例へば封建社會においても、その一隅において商品の生産が行はれ、從つてまた商品の流通が行はれてゐたのであり、しかるかぎりにおいて、以上述べたるところは之に妥當するのである)。吾々はこれを前提として、以下、現代社會(資本家的生産社會)の歴史的特徴を形成せる資本そのものの研究に入らんとするのである。

充分な發展を遂げた具體物たる現代社會にとつての最も捨象的な範疇は、それが捨象的であるといふ故をもつて、多かれ少なかれ未發展の社會に妥當する。そして、しかる限りにおいて、吾々の敍述の進行は、現實的な歴史的發展に適應するものとなる。それは、生物進化の極頂に立てる人間の一生をば、生殖細胞を出發點として順序に敍述し來れば、そこにおのづから、單細胞動物を出發點とせる生物進化史の縮圖が現はれると、同じことである。かゝる關係において、第一篇は譬へば母體内における胎兒の成育史に適應し、第二篇以下は母體より生れ出でたる後の人間の成育史に適應するのである。

第三章　貨幣の資本への轉形

第一節　資本の運動の一般的形式

吾々にとつて先づ問題となるところは、資本の運動の一般的形式である。すでに前篇で述べたやうに、商品は運動する、商品の流通といふのがそれである。しかるに、此の如き商品流通は、必然的に貨幣を生む。そして、その貨幣は、これら商品の運動を媒介することにより、自らもまた運動する、貨幣の流通といふのがそれである。そこで W—G—W' なる運動、すなはち貨幣の媒介による商品の交換が行はれるのであり、それが今吾々に前提として與へられてゐる。ところで、かゝる前提から、如何にして資本が生ずるか？　言ひ換へれば、かゝる商品流通の世界に、吾々は、單なる商品流通と異なるところの、如何なる現象形態を認めうるか？　それが先づ吾々の問題である。(吾々の研究は、經驗的に與へられてゐる外的現象の分析をもつて始まる)。

資本の出發點は商品流通の世界であり、その最初の現象形態は貨幣である。それは商品生産および商品流通の發展がすでに一定の程度に到達したところにおいてのみ發生するのであり、且つその發生に際し最

初に有する姿は貨幣形態である。それは G—W—G（貨幣——商品——貨幣）といふ運動形式をとることによつて、單なる商品流通 W—G—W とその現象形態を異にする。

吾々は先づかゝる流通形式の差異を分析せねばならぬ。（先づ現象を捉へてそこから本質へつき入るのが、吾々の研究方法である）。

今これら二つの循環を比較するに、それが販賣および購買といふ二つの對立した階段に分かれてゐるといふこと、またこれらの階段の何れにおいても、一方の極には貨幣が立ち、反對の極には商品が立つてゐるといふこと、更にまた、これらの相反對した階段の統一によつて行はれる全體の取引の上には、三人の當事者が現はれ、そのうち B は商品を買ふだけであり、C は賣るだけであり、たゞ A のみが賣つたり買つたりするといふこと、これらの點においては總て同じである。しかし明かに相違するところは、販賣および購買といふ二つの階段が前後する順序である。單なる商品の流通は、販賣に始まつて購買に終つてゐるが、資本としての貨幣の流通は、購買に始まつて販賣に終つてゐる。すなはち前者にあつては、商品が循環の起點および終點となつてをり、この循環を媒介するものは貨幣であり、從つて同じ貨幣が二度その所有主を變更するのであるが、後者にあつては、貨幣が循環の起點および終點となつてをり、その循環の媒介をなすものは、貨幣でなくて商品であり、從つて同じ商品が二度その所有主を變更することになつてゐる。

ところで此の如き形式上の差異を更に詮索して見ると、そこには、或る重大なる實質上の差異が含まれてゐる。第一の循環にあつては、貨幣が商品の流通を媒介した結果、或る商品を所有してゐた者の手に、それと使用價値を異にする他の商品が殘ることになる。すなはち品質的に異れる使用價値の位置轉換が、かかる運動の內容を形成する。だから、それら商品の價値は分量的には同じであつても、その使用價値が品質的に異なるといふ點において、全體の取引は意味を有つ。これに反し、第二の循環にあつては、商品が貨幣を資本として流通せしめた結果、貨幣所有者の手には、依然として同じ貨幣が殘ることになるのであるから、その運動は、一見したところでは、無內容に見える。それが一定の內容を有つためには、貨幣が最初よりも分量を增加して復歸するのでなければならぬ。すなはちこの過程の內容は、その兩極の品質的差異に負ふのでなく、たゞその分量的差異に負ふ。かくて G—W—G なる循環は、實は G—W—G+g(G') に外ならぬのである。今この增殖された價値をば、吾々は剩餘價値（Mehrwert, surplus value）と名づける。

すでに第二章第二節で述べたやうに、第一の流通形式にあつては、貨幣は次第にその出發點から遠ざかる運命のもとに置かれるのであり、再びその所有者の手に復歸するものではない。もちろん、改めて商品を賣るときは、その代價として再び一定の貨幣を入手することが出來るけれども、しかしそれは、最初の取引の結果としてではなく、それを繰り返した結果であり、最初の取引のために支出した貨幣は、永久に復歸しないのである。それゆゑ、それは revenue（收入）として spend（消費）されたと稱される。しかるに貨幣が後の流通形式をとるために支出されるときは、それはたゞに流通界においてそれ自身の價値を保存するのみならず、更にこれを增殖し、それ自身の價値に一の剩餘價値を附け加へて、元の所有者の手に復歸する。すなはち、それは剩餘價値を產むところの資本に轉形する。それゆゑに、それは資本として

前拂（vorschiessen, advance）されたとか、または放資（投資）されたとか稱される。

なほ誤解を避けるために一言しておくが、W—G—W′なる循環にあつても、その兩極のWとWとの價値は、その大きさを異にしうる。だが、かゝることは、この流通形式そのものにとつては、純粹に偶然的なことであり、その本質を形成するものではない。何故なれば、商品流通は商品それ自身の必然的な運動であり、そしてこの運動の必然的な內容は、一の使用價値と他の使用價値との置き換へに止まるからである。しかるに、それと逆に、G—W—G′（G+g）にあつては、その兩極が價値量を異にしてゐなければならぬといふことを、流通形式そのものが要求するのである。

ところで、すでにG—W—G′なる運動が行はれることになれば、そこにその性質上無際限なる價値の自己運動が始まる。W—G—W′は商品として生產された使用價値の自己運動であるが、これと異なり、G—W—G′にあつては、價値が獨立の自己運動をなすのであり、且つそれは、その性質上無際限なものである。けだし購買のための販賣は、第一に、その過程外に横たはる終局目的——すなはち個人的消費——のための手段に過ぎぬのであり、且つその目的とするところの生活上の欲望充足には、おのづから一定の限度があるといふの故をもつて、また第二には、これがために支出される貨幣は、再び元の所有者の手に復歸しないといふの故をもつて、それは限りなく擴大さるべき性質のものではない。これに反し、販賣のための購買にあつては、その目的が、價値そのものの所有量を增加することにある。しかるに、價値量の增加そのものには際限がない。例へば百萬圓を增加して二百萬圓となすも、それはやはり限られたる分量の價値であるが故に、なほ依然として、增加しうべき分量の價値として殘る。だから一たび價値量の增殖が問題とされるかぎり、同一の欲望は、百萬圓に對しても、二百萬圓に對しても、同樣に起る。そしてもしこの二百萬圓が新たなる循環を開始せぬならば、それは直ちに增殖される價値としての性質を失ふ。それゆゑ、增殖される價値としての資本は、たゞ斯かる過程の絕えざる更新のうちにのみ存しうるのであり、從つて資本としての貨幣の流通はそれ自身が目的であり、資本は資本として存在する以上、その運動は無際限である。斯樣にして價値は、それ自身を增殖するといふところの、完全には無限に實現されえない目的を、絕えず實現すべく努めねばならないといふ一の解決すべからざる矛盾を、それ自身のうちに包藏することにより、自己運動をなす過程の主體（sich selbst bewegende Substanz）となり、かくて商品および貨幣は自ら增殖する價値がその生涯の循環運動において代はる代はる採るところの現象形態たるに過ぎざるものとなる。（現象形態からいへば、資本は商品であり、また貨幣である。商品と貨幣といふ對立物はまたその意味において同一である。）

今かゝる運動の意識的なTriger（擔ひ手）としての貨幣所有者は、すなはち資本家となる。吾々はすでに蓄財手段としての貨幣の發生と共に、初めて人間の世界に絕對的な致富の衝動（Bereicherungstrieb）が生まれ、そして斯かる衝動を代表する者はすなはち蓄財家であることを述べたが、この蓄財家は、今や貨幣の資本への轉形に伴ひ、資本家となつて現はれるのである。蓄財家と資本家とは、價値の限りなき蓄積に對する欲求を有つ點において、全く同じである。たゞ蓄財家は、流通手段として貨幣の流通を自分の手許で中斷せしむることにより、すなはち購買を伴はざる販賣を繰り返し、自己の生活のためにする消費を極度に制限することによつて、その目的を達せんとするに反し、資本家は貨幣をば資本として絕えず流通に投げ入れ

ることにより、從つて自己の消費を節約することから免れながら、その目的を實現しつゝあるものである。

さて以上述べ來たりたるが如き G—W—G′ なる形式は、資本の一種たる商業資本にのみ特有な形式のやうに見える。しかし後で詳しく述べるやうに、產業資本にあつても、それは、

G——W……P……W′——G′

なる形式の循環をなすのであつて、從つてこの場合にも、先づ貨幣が商品に轉形し、つぎに商品の販賣によつて最初よりもより多くの貨幣が戻つてくるといふことには、變りはない。また利附資本は最も簡單に、

G——G′

なる形式の循環をなすのであるが、しかし資本家的社會における其のものの本當の姿は、やはり後で詳しく述べるやうに、商業資本または產業資本の循環形式の中間關節が省略されたものに外ならぬ。だから、資本が直接に流通界に現はれる一般的形式は、

G——W——G′

なのである。

第二節　剩餘價値の泉源

さて前節において確立したる資本の運動の一般的形式たる G—W—G′ が、第一篇において吾々の既に明かにしたる商品および貨幣に關する諸法則と矛盾することは、一見して明かである。

單なる商品流通 W—G—W′ にあつても、始點の W と終點の W′ とがその價値の大きさを異にしうることは、すでに注意しておいたところである。しかし斯かる價値量の變化は、この流通形式そのものが要求するところではなく、むしろその純粹の姿においては、言ひ換へればそれに附隨する偶然的な諸事情をすべて捨象し、かゝる流通形式そのものの必然的な內容のみについて之を見れば、それはただ使用價値を異にするところの價値の等しきものの交換に外ならぬ。しかるに吾々の今問題とする G—W—G′ は、その形式からいへば、W—G—W とただその系列の順序を異にするにすぎない。すなはち前者は販賣と購買とから成り、後者は購買と販賣とから成る、といふだけの相違である。しかるに、それにも拘らず、後者にあつては、始點の G と終點の G とがその大きさ（價値量）を異にすることが、かゝる形式そのものの必然的な內容を構成してをり、しからざるかぎり全體の運動は無意味のものになつてしまふ。しからば販賣と購買との順序をただ顚倒しただけで、かゝる差異は如何にして生じうるか？ 言ひ換へれば、價値相等しきものの交換を前提とするかぎり、剩餘價値の成立は不可能とされるのではないか？ 更に言ひ換へれば、商品法則の基礎の上に如何にして資本の成立は可能とされるか？ これが吾々に與へられた問題である。

これについて最も早くから唱へられ、今もなほ行はれてゐる說明は、使用價値と價値とを混同せるものである。例へば A と B とが織物と穀物とを交換するならば、A は自己にとつて使用價値少き織物の代りに使用價値のより大なる穀物を得、同時に B もまた、自己にとつて使用價値少き穀物の代りに使用價値のより大なる織物を得るがゆゑに、交換は當事者の双方に利得を齎らすといふのである。思ふに使用價値を問題とするかぎり、此の如き利益が交換當事者の双方のために生ずることは、言ふまでもない。それ

のみでなく、AとBとの各々が織物と穀物との双方をみづから生産しつゝある場合に比ぶれば、かゝる交換に基づく分業は、同一の勞働時間をもつてより多くの使用價値の分量をAおよびBの双方のために齎らすであらう。しかしもしこれらの物の價値量がその生産のために必要とされた勞働の分量によつて規定されるものとするならば、それらの物の單なる所有權の移轉が新たなる價値の成立を齎らさざることは、同樣にまた言ふまでもないことである。

使用價値と價値とを混同せるものとしては、古くはコンヂャック（Condillac, Le Commerce et la Gouvernement, 1776.）を擧げることができる。また最近の例としては、吾々は福田博士の『流通經濟講話』（大正十四年刊）から次の一節を引用しうる。

『抑々流通の行はれる、即ち價値移轉の行はれると云ふことは、何によつて起るかといへば、價値移轉をすることにおいて、更に價値を增大し得るからであります。價値を增大し得るといふことは、即ち餘剩價値を得ると云ふことであります。餘剩價値を得られるのでなければ、價値移轉の行はれないのが普通であります。（前記著書、八八四頁）

『そこで、その餘剩を得るといふことを、例をもつて一つ説明して見ませうならば、玆に甲は馬一頭を有し、乙は牛一頭を有し、互にこれを交換し合ふといふ時には、次のやうになるのであります。

馬の甲に對する主觀的使用價値　8

甲 馬一頭を有す＝その利用を 8 と認む
乙 牛一頭と交換す＝その利用を 10 と認む　仍て 10－8＝2 の差を得。

牛の乙に對する主觀的使用價値　8

乙 牛一頭を有す＝その利用を 8 と認む
甲 甲の馬一頭と交換す＝その利用を 10 と認む　仍て 10－8＝2 の差を得。

即ち甲は八の使用價値ある馬を、費用として乙に與へて、乙の牛を一頭得ました。得た牛の己れに對する利用は十であります。從つて十から八を引いた二といふものを餘剩價値として得るのであります。乙も同じく八の費用を投じて十の利用を得るのでありますから、二の餘剩を得るのであります。』（同上、八八八、八八九頁）。

甲と乙とが馬と牛とを交換することによつて受ける利益は、使用價値についてである。しかし福田博士はその使用價値についての利得を剩餘價値であるとされるのであつて、吾々から見れば、それは完全に使用價値と價値とを同一視するものである。

剩餘價値の成立を、價値以下における商品の購買および價値以上における販賣によつて説明せんとすることも、當面の問題の解決にならない。なぜといふに、此の如きは、價値相等しきものの交換を前提として の剩餘價値の成立の説明とはならぬからである。もちろん古くより商人は此の如き方法によつて利潤を得たものであり、かくて貨幣は、資本家的生産の行はれるより遙に以前から、これら商人の手において、商業資本となつてゐたものである。古代にあつては、フィニシヤ、ギリシヤ、カルタゴ、ローマ等、後年に及んでは、ヴェニス、ポルチュガル、オランダ等の商業は、すなはちかゝる資本家的生産以前の商業に屬するもので、それは購買および販賣の二つの過程が、等價物の交換でないことをのみ條件として、成立したものであ

る。此の如き條件のもとにおける商業の生命は、交換の相手方からは出來うるかぎり多くの價値を取ると同時に、自分の受取つた價値よりも出來うるかぎり少い價値をば相手方に與へるといふことにあるので、その本質は何處までもごまかしである。(例へば英語の monger なる語は、元と商人を意味したものであるが、それはだますといふ意味の古いアーリアン語から出たものであり、またドイツ語で交換するといふ意味の tauschen がだますといふ意味の täuschen と語根を同じくするといふが如きことは、古く行はれた商業の本質を物語るものである)。すなはち斯かる場合の商業資本に生ずる剰餘價値は、他人の所有せる價値、言ひ換ふれば、他人の生産物に蓄積されてある勞働を、或る部分は無償で取ることによつて、當該商業資本のためにのみ成立するのである。(元弘建武以來朝鮮支那の沿海を荒らした謂はゆる倭寇は、かゝる無償の勞働を强制的に占取したものである)。從つて、資本が商品の購買および販賣を終へた後も、終へない前も、言ひ換ふれば、資本がその循環の起點にある場合も、その終點に達した場合も、そこに存在する價値の總量には、何等の變化もない。變化したのは、たゞ商人以外の者の手にあつた價値の一部が、無償で、すなはち等價物と引換へられることなしに、商人の手に流れ込んだといふだけのことであり、これを全體からいへば、そこに新たなる剰餘價値が生産されたわけではない。

そこで私は、更にこの問題を、自由競爭の制限によつて說明せんと試みた。(大正七年七月發行『經濟論叢』第七卷第一號、『剰餘價格の成立、不勞所得としての資本の利子の發生原因に關する一考察』)。けだし自由競爭が行はれるかぎり、諸商品の價格はその生産費において決定される。しかるに資本家的社會においては、生産手段が資本家階級の手に獨占されてゐるがゆゑに、そこでは、資本家相互の間にこそ競爭が行はれてゐるとしても、すべての階級を包括した社會全體について見れば、完全なる自由競爭が行はれてゐるわけでなく、企業はすべて資本家階級の獨占に屬してゐる。それゆゑ資本家的商品はすべて獨占價格をもちうるのであり、言ひ換へればそれには必ず生産費以上の剰餘が生ずる。そしてその剰餘は、資本家階級が生産手段を獨占しつゝあることから生ずるのであるから、それは當然に資本家階級の所得に歸すべきものである。かういふのが私の嘗て試みた說明であるが、これもまた當面の問題の解決にはならぬ。何故といふに、それは結局價値の等しからざるものの交換によつて問題を說明せんとするものであるが、しかるかぎりそれは前に述べた商業資本の場合と同じことに歸するからである。

かくて吾々は、この問題に對する最後の解決を、たゞ『資本論』においてのみ見出しうる。けだし、資本としての貨幣の循環 G—W—G'(貨幣——商品——より多くの貨幣)において吾々がすでに等價物の交換を前提するならば、その第一の階段たる G—W は等價物の交換であり、その第二の階段たる W—G' も また等價物の交換である。だから最後の G' がもし G+g となつてゐるならば、最初 G によつて購買された W は、次いで販賣せられるに際し、別種の商品 W' となつてをり、且つそれは、價値の大きさから言へば W+w となつてゐるのでなければならぬ。從つて G—W—G' なる循環は、實は、

G——W……W'——G'

でなければならぬのである。言ひ換へれば、最初 G をもつて購買された商品のうちには、一種特別な商品が含まれてをり、その特別な商品の働きによつて W は W' なる別種の商品に變化せしめられると同時に、價値の大きさから言へば、W+w に變化せしめられてゐるのでなければならぬ。しからば、その特殊

の商品は何んであるか？　それが即ち商品としての人間の勞働力であることを見出した點に、マルクスの偉大なる功績がある。

人間の勞働力が商品として市場に現はれるといふことは、例へば、商品交換の發展に伴ひ特殊の商品が必然的に貨幣に轉形するといふが如き現象と異なり、商品交換それ自體の性質から流れ出たものではない。それゆゑ、如何にして斯かる商品が生じたかといふことは、別の研究に讓る。玆にはただ、勞働力が商品となるための條件を注意するに止める。

free worker

a第一、勞働力はその所有者たる當人がこれを商品として販賣するがゆゑに、初めて商品となるのであるが、元來如何なる物でも自分の完全な所有物でないものを他人に賣るわけにはゆかぬから、勞働力が商品となるためにも、それは先づその所有者たる勞働者にとり、完全な自由處分權の目的物となつてゐなければならぬ。即ち之が販賣者は自己の勞働力の・從つてその人格の・自由な所有者であるといふ點において、不自由勞働者たる奴隷、農奴等と區別されて、自由勞働者と稱される。（奴隷は彼れ自身が一つの商品である）。

b第二、一定の使用價値が商品となるのは、その所有者にとつて非使用價値であるがためである。從つて、勞働力もまた商品となるがためには、その所有者にとり非使用價値となつてゐなければならぬ。すなはち勞働者は自らその勞働力を利用することができぬから、これを商品として他人に賣るのである。彼等は自ら生産手段を所有せず、從つてその勞働をば一定の生産物に蓄積し、これを有形の商品として賣ることができないから、勞働力そのものを、彼等の賣りうる唯一の商品として、市場に持ち出すのである。

貨幣を資本に轉形するためには、貨幣所有者は、商品市場において、以上述べたるが如き意味の自由勞働者が提供しつゝある商品としての勞働力を、發見しうるのでなければならぬ。言ひ換へれば、貨幣所有者が等價物同志の交換といふ條件のもとに資本家となりうるのは、謂はゆる賃勞働者と雇傭契約を結ぶことによつてである。更に言ひ換へれば、資本家と賃勞働者といふ二つの階級、すなはち今まで述べて來た單なる商品流通の範圍内では、未だ嘗て出逢はなかつたところの、この二つの階級が相對立するに至つて、現代の社會を特色づけつゝある産業資本なるものが、初めて成立するのである。昔から存在する商業資本はあらゆる商品を購買しえたけれども、ただ勞働力だけは、これを商品として販賣する自由勞働者がゐなかつたために、これを商品として購買することができなかつたのであり、從つてそれは永く産業資本に轉形しえなかつたものである。

しからば、勞働力なる商品は、資本家により買取られることにより、如何にして資本家のために剰餘價値を生むに至るか？　吾々は章を改めてその問題を考察するであらう。

第四章　剰餘價値の生産

第一節　勞働過程（Arbeitsprozess, labour process.）

前章において述べたやうに、吾々に與へられてゐる問題は、如何にして剰餘價値が等價物同志の交換を前提した場合にも尙ほ生じうるか、といふことであるが、今この問題の考察に際し、もし吾々が、

G——W……W′——G′

なる過程のうち、流通界において行はれるところの、G—W も W′—G′ も、共に等價物同志の交換であると假定する以上、吾々は、生産界において行はれるところの W……W′ のうちに、すなはち W によつてその價値を表示されてゐる商品が W′（または W+w）によつてその價値を表示さるべき商品に轉形する過程のうちに、剰餘價値の成立を求めなければならぬ。すなはち吾々は、以下專ら生産過程に立ち入り、そこで如何なることが資本家および賃勞働者のために起るかを考察することを、餘儀なくされる。

以上の諸章に述べたるところは、專ら流通界に限られたのであり、それは資本の生産過程——資本が剰餘價値を生産する過程——にとつての前提にすぎない。かくて單なる商品流通は、資本家的生産にとつて論理的の且つ歷史的の前提である。これを論理的の前提であるといふゆゑんは、資本家的生産の秘密は（資本による剰餘價値の生産の秘密は）、商品法則（等價物と等價物との交換を本質とする價値

法則）を前提とすることによつて、初めて曝露されうるからであり、また商品の價値は如何にして規定されるかといふ問題の解決が、商品としての勞働力の價値が如何にして規定されるかといふ問題の解決の前提になるからである。更にこれを歷史的前提といふゆゑんは、商品生産および商品流通が發展の一定の高さに達したところにおいてのみ、資本家的生産は初めて可能なものとなるからである。資本家的な商品生産は單なる商品生産よりも多かれ少かれより大なる規模のものであり、その成立のためには、何よりも先づ商品流通のための一定の市場が必要とされるのである。もちろん前提は更に結果となる。資本家的生産の成立および發展につれて、商品流通がまた發展することは、勿論のことである。

言ふまでもなく、勞働力の消費は勞働そのものとなつて現はれる。すなはち資本家が勞働者からその勞働力を買入れるのは、これを使用することにより、言ひ換へれば、勞働者をして勞働せしむることにより、何等かの商品を生産せんがためである。しかるに、商品を生産するためには、必ず何等かの使用價値を生産しなければならぬ。ところで、その使用價値の生産は人間が存在するかぎり、如何なる社會形態のもとでも、必ず行はれる。そこで吾々は、資本家的な生産の仕方の特徴を明かにするため、先づ特定な生産の仕方から離れて、生産そのものの一般的性質を（生産過程の最も捨象的な姿としての單なる勞働過程を）吟味しなければならぬ。

一定の使用價値を生産するためには、人間はその勞働を外界の物質に加へなければならぬ。即ち勞働は、人間が自分自身の行爲によつて媒介し且つ制御（control）するところの、人間と自然との間における

物質代謝（Stoffwechsel）の自然的必然の過程である。人間は此の如き彼れ自身の肉體の運動によつて自然に働きかけ、自然の物質を動かすことにより自然の物質の形態を變更すると同時に（過程としての運動——結果としての自然的物質の形態變化）、彼れ自身を變更するのであり、かくて人間と自然といへる對立物の闘爭過程としての、人間のための世界の無限なる發展がそこに實現されてゆくのである。

斯様に勞働過程なるものは、人間と自然と相俟つて初めて行はれるのだから、謂はゆる生産の要素は、人的要素たる勞働と物的要素たる勞働條件との二つから成り立つ。後者は更にこれを分つて、勞働對象および勞働手段の二種類となすことができる。茲に勞働對象といふのは、勞働が働きかけるための對象となるもののことである。そのうちには、ただ自然全體から切り離されるだけの勞働の對象物たるに止まるもの（例へば水中で捕獲さるべき自然生の魚類、地中から掘り出される鑛石、自然林から伐り取られる木材等）もあるが、これと異り、それ自身が已に勞働の生産物であるものは、これを原料（Rohmaterial）と名づける。つぎに勞働手段とは、勞働者が彼れ自身と勞働對象との間に挿み、これによつて彼れの勞働をばその對象の上に傳達するの用をなさしむるところの、物または物の集合體である。この勞働手段の殆ど全部は、それ自身、勞働の生産物である。（かゝる勞働手段を生産するは、殆ど人間に限られる。それゆゑフランクリンは人間を指して tool-making animal——道具を製造する動物——と言つたのである。）

さて人間は、一定の勞働手段の助けにより、一定の勞働對象の上に、彼れの勞働を加へるのであつて、その結果、人間の勞働は對象の上に凝結して、こゝに一つの使用價値が生産せられるのである。かくて勞働者の側においては流動的な運動の形態を採つた勞働が、生産物の側においては固着的な休止の形態を採

ることになり、生ける勞働が物の上に蓄積されることになる。これがすなはち勞働過程であるが、今その全過程をばその結果たる生産物の立場から見れば、勞働手段および勞働對象は、生産手段（Produktionsmittel）として現はれ、勞働は生産的勞働（produktive Arbeit）として現はれるのである。

勞働手段も勞働對象もその大部分は勞働の生産物であり勞働の結果であるが、しかし過去における勞働過程の結果は、新たなる勞働過程の前提となるのであつて、この見地から見れば、生産の結果ではなく生産の手段として現はれる。すなはち一定の使用價値は、勞働過程におけるその時々のその物の位地——機能——の如何によつて、生産手段ともなれば生産物ともなる。そしてかゝる機能の差異、それが吾々にとつての問題なのである。なほそれと同じやうに、勞働は人間の生活それ自體であるが、その勞働の結果たる生産物の立場から見れば、その生産物を生産するための手段たる勞働（生産的勞働）として現はれるのである。尤もこゝに述べたところは、最も抽象的な單なる勞働過程の立場から見ての生産的勞働である。もしこれを資本家的生産の立場から見るならば、資本家的生産の目的が剰餘價値の生産にあるのだから、剰餘價値を生産する勞働が生産的勞働とされるであらう。

以上述べたるが如き抽象的な單なる勞働過程の立場から、その條件と看做さるべき生産物をば、資本であると説明するのが、普通の教科書のやりかたである。これらの教科書の筆者は、マアカンティリズムが貨幣の性質を誤解したことを嗤つてゐるが、しかしその貨幣がより具象的な資本に轉形すると、彼等にとつても、それはマルクスの謂はゆる物神崇拜性をもつて現はれ、人と人との社會關係が物の自然的性質の如くに誤解されてしまふ。かくて資本とは生産手段たるべき生産物と解され、それは人間が初

めてこの地球上に生まれたときから存在し、且つ永遠に存在すべき、自然的永久的範疇に化せられる。

勞働過程においては、勞働力が消費されると共に、生産手段も消費される。だから、その方面から見れば、勞働過程はすなはち消費過程であり、生産はすなはち消費である。ただこの場合には、消費の結果として新たな生産物が生産せられるために、それは生産的消費と稱せられ、個人的消費と區別せられる。しかし個人的消費の場合にも、物が消費せられる代はりに人のいのちが生産せられるのである。ただ生産的消費の結果は、消費者と區別されるところの一つの生産物であるに反し、個人的消費の生産物は、消費者それ自身であるといふ差異がある。

これを要するに、勞働過程は、これをその單純な捨象的な契機において見るならば、人間の欲望を滿足せんがために自然物を占有しこれに加工するといふ合目的な活動（zweckmässige Tätigkeit）に外ならぬものであるが、此の如きは既に述べたやうに人間と自然との間における物質代謝（Stoffwechsel）の一般的條件であり、人間の生活についての永久的な自然的條件であるから、苟くも人間がこの地球上に存在する限り、人間相互の關係はどうであらうとも、言ひ換へれば彼等の社會形態は如何やうであらうとも、それには全く關係がない。それゆゑ吾々は、以上の範圍においては、人と人との關係を全く捨象し、ただ人間と自然との對立をのみ見たのである。しかし吾々は更に進んで、資本家的生産の特徴を明かにせねばならぬ。（序に述べておくが、普通の教科書に生産論と題して述べてあることは、その大部分が此の如き生産に關する一般的條件を述べたものである。しかし此の如き一般的條件を明かにすることは、現代社會の特殊的な歴史性を知るための前提にはなるけれども、それ自身からは現代の特殊性を理解することはできない。）

第二節　價値增殖過程（Verwertungsprozess）

さて以上述べたるところは、勞働過程の一般的性質であるから、勞働者がそれを自分自身のためにでなく、資本家のために行ふ場合にでも、別に變りはない。資本家はただ、生産手段および勞働力をば商品として買ひ入れ、勞働者をして一定の生産物を生産せしむるだけである。なほ勞働の仕方（Arbeitsweise）も、資本家が新たに介在することになつたからと言つて、最初のうちは、差し當り何等の變化をも受けない。（それは論理的にもさうであり、歴史的にもさうである）。

しかしそれには、先づ次のやうな二つの特徴が現はれる。

1. 勞働者は資本家の管理のもとに勞働することになる。すべて人間の勞働は本能的な無目的な活動（遊戯）から分化するに從つて、目的に合致した意志（zweckgemässe wille）の支配を受けなければならぬのであるが、この場合、かゝる意志の所在は、勞働者自身を離れて資本家に移る。すなはち生産管理の權は、實際の生産者たる勞働者を離れて、非勞働者たる資本家に屬することになる。

2. これと同時に、その勞働過程から出てくる生産物も、勞働者の所有に歸せずして、やはり資本家に屬することになる。勞働者はその勞働力の代價としての勞賃を受取る代りに、勞働力の使用價値は資本家に歸する。商品の購買者はその買ひ取りたる商品の上に完全なる所有權を有することが原則であり、從つて資本家はその買ひ入れた勞働力を自由に使用する權利を有する。だから資本家の立場からすれば、勞働

過程は、畢竟、彼れの買ひ入れた勞働力といふ商品の消費過程に外ならぬ。しかし既に述べたやうに、これを生産的に消費するためには、一定の生産手段を必要とするがゆゑに、彼れは勞働力を買ひ入れると同時に、また一定の生産手段をも買ひ入れ、これら二つのものを組み合はせて之を生産過程に投げ入れる。買ひ入れられた此等二種の商品は完全に資本家の所有物であるがゆゑに、それらのものの結合によつて生じたる生産物もまた、その全部が資本家の所有に屬するのである。

さて以上は、資本の生産過程をば、ただ使用價値を生産するための過程として、簡單にいへば、單なる勞働過程としてのみ、これを觀察したに止まる。しかるに、資本家が一定の使用價値を生産するのは、これを自己の消費に充てんがためではなく、これを賣つて貨幣に換へんがためである。言ひ換へれば、資本の生産過程は、ただ生産物を生産するのではなく、これをば商品として生産するのである。しかるに、商品なるものは、既に第一章の冒頭で述べたやうに、使用價値および價値といふ對立物の統一體であるから、かかる商品の生産過程もまた、使用價値の生産過程としての勞働過程と、價値形成の過程と、かゝる對立的な二つの過程の統一體でなければならぬ。それゆゑ吾々は更に進んで、資本の生産過程をば、價値形成の方面から觀察しなければならぬ。そして此の方面から生産過程を觀察すれば、そこで費される勞働は、その品質が問題ではなく、專らその分量が問題となる。

先づ吾々の考ふべきものは、資本家が生産を營むために買ひ入れる諸商品の價値であるが、そのうち生産手段として役立つべき勞働生産物の價値については、すでに第一章において述べた所である。ただ茲に新たに問題となるのは、資本家的生産の前提として初めて現はれて來た特殊の商品たる、勞働力の價値である。勞働力が固有の意味の勞働生産物でないことは言ふまでもない。しかしそれは土地の如き自然物でもない。人間の生活は人間自身が生産してゆくのであるから、その勞働力もやはり人間の生産してゆくものであり、從つて勞働力が一たび商品の形態を採るやうになると、先きに第一章において述べたところが、そのまゝ之に妥當する。すなはち勞働力も、それが價値である限りにおいては、他の一般商品と同じやうに、その生産のため社會的に必要とされる勞働の分量を表示する。言ひ換へれば、商品としての勞働力の價値は、勞働者自身ならびに家族の生活を維持するために必要とされる生活資料の價値に等しい。

紡績の價値のなかへは、その生産のため必要とされる生産手段の價値がそのまゝ移轉する。それと同じやうに、勞働力の價値は、勞働力の生産のため必要とされる生活資料の價値に等しい。

勞働力が商品となるためには、先づ生きた人間が前提される。そしてすでに生きた人間が前提されるならば、勞働力の生産は、その人間の生活の維持において行はれる。ところで、その生活の維持のためには、一定の生活資料が必要である。だから勞働力の生産のため必要とされる勞働時間は、これら生活資料の生産のため必要とされる勞働時間に歸着する。

勞働者の生活程度は時代により國によつて相違する。こゝに生活の維持のために必要なといふのは、生理的に必要な絶對的の限度を指すのではない。

なほ勞働者は人間であるから、或る年齢に達すると死ぬる。それゆゑ、勞働力の生産が引續き行はれるためには、現在の勞働者のみならず、その家族が生きて行くための生活資料、言ひ換へれば、勞

働者の生存ならびに生殖のための生活資料が、必要とされるのである。

さて吾々の假定によれば、資本家は生産手段並びに勞働力をば、その價値通りに買入れる。(現實的には必ずしも價値通りに買入れるとは限らない。しかしこゝでは、それが價値通りに買入れられたとしても、なほ剩餘價値を生みだすといふことを明かにせんとするのである。) 今假に十封度の綿絲が生産されるものとなし、それに必要な生産手段をば、二十時間分の勞働を含める棉花と、四時間分の勞働を含める紡錘とによつて代表せしめる。(紡績機械は一回の生産により全部消耗するものではない。それで玆には假に、消耗せられる勞働手段をば、一個の紡錘によつて代表せしめる。)そして純金二分をもつて一圓となし、それだけの金の生産に必要とされる勞働時間を二時間だとするならば、これらの生産手段の價値は十二圓に相當することになる。ところで、これらの生産手段は十封度の綿絲を生産するために必要なものであるから、これが生産のために必要とされる勞働時間は、同時に綿絲を生産するために必要とされる勞働時間であり、從つてこれら生産手段の價値はそのまゝ生産物たる綿絲の上に移る。(生産手段の價値はいつでも生産物の上へそのまゝ移轉する。生産手段とは生産物の生産のため必要とされるものであるから、生産手段の生産のため必要とされる勞働時間は、そのまゝ生産物の生産のため必要とされる勞働時間となる)。次に勞働者の一日分の生活資料を生産するために必要とされる勞働時間を六時間とすれば、一日の勞働力の價値は三圓に相當することになる。なほ前に述べた生産手段を利用して十封度の綿絲を生産するためには、恰も六時間分の勞働が必要とされると假定する。今かゝる假定のもとに、一人の資本家が前に述べたやうな生産手段および勞働力を買ひ入れて、十封度の綿絲を生産したとするならば、その生産物の價値は次の如くなる。

Pm(生産手段)＋A(勞働力)＝＝20時間＋4時間＋6時間＝＝10圓＋2圓＋3圓＝15圓

ところが、これでは、資本家は十五圓を投じて十五圓の生産物を得るのだから、剩餘價値は少しも生産されず、從つて最初支出された貨幣は、實は資本となり得ないのである。吾々は斯かる限度に止まれる生産過程をば、單なる價値形成の過程(einfacher Wertbildungsprozess)と名づける。

しからば、資本家的生産過程は、如何にして此の如き單なる價値形成の過程たるに止まらず、更に進んで價値增殖の過程(Verwertungsprozess)となりうるかといふに、それは、勞働力なる商品の特殊の性質に基づく。けだし勞働力に含まれてゐる過去の勞働と、勞働力の發揮しうる生ける勞働とは、全くその大きさを異にする。例へば、勞働者を一日間生かしておくための生活資料の生産に要する勞働時間は、僅かに六時間であるとしても、その勞働者自身は一日のうち、例へば十二時間の勞働に從事することができる。前者は勞働力の價値を規定し、後者はその使用價値を形成する。そして資本家は、吾々の假定によるとかかる勞働力の使用價値をばその價値で買ひ入れたのである。ところで商品の購買者は、彼れの買入れた商品を思ふがまゝに利用するの權利を有つ。すなはち商品の販賣者は、彼れの商品がその購買者により如何に虐待されやうとも、一旦それを販賣した以上、これに對して何等の抗議をもなしえない。そこで一旦勞働力を買ひ取つた資本家は、前に假定したやうに、勞働者をしてただ六時間だけの勞働をなさしむるに止まらず、例へば十二時間の勞働をなさしむるに至るであらう。ところで勞働の分量が倍になれば、他の事情にして變化なきかぎり、その勞働を吸收すべき生産手段の分量もまた倍にならなければならぬ。さうしたなら

ば、前例に比し二倍の綿絲が生産され、その價値は三〇圓となるけれども、しかしこれを生産するために支出された資本家の價値は二七圓に過ぎない。從つて差引き三圓が剩餘價値として生産せられるのである。

勞働對象	20 圓	前例の二倍
勞働手段	4 圓	前例の二倍
勞賃	3 圓	前例のまゝ
合計	27 圓	

かくて問題は遺憾なく解決された。吾々に與へられてゐた問題は、價値相等しきものの交換を前提とする場合にも剩餘價値の成立は尙ほ如何にして可能であるか、といふことであつたが、この問題は、勞働力といふ特殊なる商品、すなはち生産的に消費されることによりそれ自身の價値よりもより多くの價値を生みうる商品が、市場に現はれるやうになつて、初めて解決されるのである。勞働力の販賣者たる賃勞働者と、その購買者たる貨幣所有者とは、たとひ流通の過程においては、完全に平等な人格者として對立し、互に等價物の交換をなすと假定しても、生産過程においては、等價を支拂はざるところの——すなはち實際においては無代價の——剩餘價値が勞働者から貨幣所有者の方へ引き渡されうるのであり、かくして先きの平等關係はその反對物たる搾取關係に轉化するのである。ところで、前に述べたところによつて見れば、此の如き轉化は、全く量から質への轉化に外ならぬことが明かであらう。すでに述べたやうに、價値增殖過程すなはち剩餘價値の形成される過程は、單なる價値形成の過程が或る點以上に延長されたものに過ぎない。詳しくいへば、資本によつて支拂はれた勞働力の價値が新たなる等價によつて補充される點以上に延長された場合に、初めて單なる價値形成の過程は轉化して價値增殖過程となるのである。だから或る限度以上における勞働時間の延長は、資本家的生産が成立するための絶對的條件である。

かくて生産過程を通過する資本の運動は、これを次の形式で現はすことができる。

$$G \text{——} W\left\{\begin{array}{l} A\ (\text{勞働力}) \\ Pm\ (\text{生産手段}) \end{array}\right. \cdots\cdots P \cdots\cdots W' \text{——} G'$$

（G：貨幣　W：商品　A：勞働力　Pm：生産手段　P：生産過程　W'：商品（W より多くの價値を有する）　G'：貨幣（G より多くの價値））

なほより詳しくは、第三篇に至つて之を說明するであらう。

吾々は以上において、生産過程をば、先づ使用價値の生産過程すなはち勞働過程としての側から觀察し、つぎに之をば價値形成の過程としての側から觀察し、それには單なる價値形成の過程と價値增殖過程との區別あることを明かにした。今商品なるものは、使用價値と價値との統一體であり、從つて商品を生産するための勞働は、使用價値を生産すると同時に價値を生産するのであるから、總じて商品の生産過程は、以上述べたるが如き意味における勞働過程と價値形成過程との統一でなければならぬが、特に資本家的な

生産過程に至つては、必ず勞働過程および價値增殖過程といへる對立物の統一でなければならぬのである。斯くて資本家的生産の發展は、かゝる對立物の闘爭、闘爭過程に外ならぬ。そして勞働の生産力の發展に對する桎梏を打破するの歴史的使命を負ふものとしての勞働者階級は、使用價値の生産過程としての勞働過程の利益を代表し、現存せる生産諸關係の維持を代表するものとしての資本家階級は、價値增殖過程の利益を代表することにおいて、資本家的な商品生産の仕方に内在するところの生産力と生産關係との矛盾は、社會の表面には、勞働者階級と資本家階級との間における階級闘爭となつて現はれる。だから以下吾々が問題とするところの、資本家的生産の發展過程の研究は、同時にかゝる特殊なる生産の仕方のもとで生産力と生産關係との矛盾が如何にして次第に增大され且つ如何にして次第にその解決のための物質的諸條件を生産するに至るかの研究であり、同時にまた、勞働者階級と資本家階級との間における階級闘爭が如何にして次第に激烈化され且つ如何にしてそれが遂に止揚されるに至るべきかの研究である。

第三節　不變資本および可變資本 (konstantes Kapital und variables Kapital)

吾々は次に、資本家的生産の理解にとつての重要な範疇を形成すべき、不變資本および可變資本の區別につき、一言せねばならぬ。すでに述べたやうに、勞働過程の人的要素たる勞働力と　その物的要素たる生産手段とは、生産物の價値の形成に對して、異なつた關係を有つ。すなはち後者はその價値をばそのまま生産物の上に移轉するに反し、前者は勞働對象の上に新たなる價値を附け加へる。ところでかゝる舊價値の移轉ならびに新價値の附加は、勞働過程において、勞働が生産手段を生産物に轉形する間において、同時に行はれる。けだし商品を生産するための勞働は、一方においては特定の使用價値を生産するための具體的な有用的勞働であると同時に、他方においては價値を形成するところの捨象的な人間的勞働であるといふ點において、二重の性質を有するがために、勞働の結果もまた二重に現はれるのである。委〻言へば、勞働者は、勞働對象に向つて一定分量の勞働を附加することにより、その勞働對象に新たなる價値を加へるのだけれども、しかし彼れの勞働が斯かる效果を齎らすためには、それは同時に、一定の使用價値を生産する有用的勞働でなければならぬ。例へば、彼れが紡績工であるならば、彼れは紡ぐといふ具體的な有用的勞働によつてのみ、その勞働對象に新價値を附加しうるのである。そして、彼れはすでに紡ぐといふ勞働に從事するならば、その勞働對象たる棉花は、勞働手段たる紡錘と共に、その舊形態を消失するのであるが、しかし其等のものは、同時に他方において、綿絲といふ使用價値の新たなる形態を取つて現はれる。ところで、すでに述べたやうに、或る使用價値が他の新たなる使用價値の生産のため適當に消費されたのであるならば、その消費された舊使用價値の生産のため必要とされる勞働時間は、そのまゝ、新たなる使用價値の生産のため必要とされる勞働時間を形成することになる。だから、勞働者が絲を紡ぐといふ一定の具體的な有用的勞働をなした結果として、生産手段の價値はそのまゝ新たなる生産物の上に移轉されることになるのである。しかし斯かる具體的な特殊の有用的勞働は、それが一定量の綿絲の生産のため社會的に必要とされる分量の勞働であるかぎり、その品質の如何に拘らず、捨象的な・人間的な・勞

働の一定の分量として、言ひ換ふれば、その勞働が特殊な有用的性質を有するがゆゑにではなく、それが一定の時間繼續されるがゆゑに、一定の大きさの價値を、生産手段の價値に附け加へるのである。價値形成の過程から見れば、勞働の品質は問題にならず、ただその分量のみが問題となるといふことは、すでに注意しておいた通りである。

生産手段の價値は、以上述ぶるが如く、そのまゝ生産物の上に移轉されるのであるが、しかし、その價値移轉の樣式は種々である。けだし生産物が生産手段の價値を攝取するのは、勞働過程において生産手段が失ふところの價値に止まるのであるが、一定期間の生産過程においてその失ふところの價値の分量は、生産手段の種類を異にするによつて相違するからである。固定資本および流動資本の區別はそこから生ずる。

例へば燃料としての石炭の如きは、跡方もなく消え失せる。また染料の如きも、同じやうに、その獨立の存在を失ふけれども、しかしこれらのものは、生産物のうちにその跡方を殘す。次に原料は、生産物の實體を形成するものであるが、しかしその形態は變はる。いづれにしても、これらの原料および助成材料は、それらのものが使用價値として勞働過程に這入つたときの、獨立の姿を失ふのであり、從つて、それらのものの價値は、全部、生産物の上に移るのである。ところが機械、建物等の勞働手段になると、それは現狀を維持しながら、繰り返し何回もの勞働過程に役立つ。だから、一回分の勞働過程において失ふところの使用價値は、その一部分に過ぎぬのであり、從つてそのものから生産物の上に移轉されるところの價値も、その一部分づつである。（人間は毎日二十四時間づつ死んでゆく。今日一日生きて働いたのは、すなはち今日一日分だけ死んだのである。生きたのは死んだのである。生産は消費である。それと同じやうに機械や建物も毎日死んでゆく。しかしそれ自身が死ぬる代りに、そのものの價値は切れ切れに生産物の上に移轉する）。今、一定の勞働手段が何回分の勞働過程に役立つかは、經驗によつて知られる。（生命保險の基礎である人間の平均的壽命が大凡そ一定してゐるやうに、機械などの平均的壽命も確立されうる）。そして、その經驗による計算に基づき、例へば一定の機械の價値は、その千分の一づつが、日々生産物の上に移轉するものと計算されるのである。すでに屢々述べたやうに、生産手段がその價値を生産物の上に移すのは、その生産手段を生産するための勞働時間が、生産物を生産するための勞働時間のうちに、算入されるがために外ならぬのであるから、生産手段は、勞働過程においてその使用價値を失ふことによつて失ふところの・價値以上のものを、生産物の上に移すものではない。だから、もしその生産手段が何等人間の勞働を加ふることなしに、自然によつて供給されたるものであれば、それは如何に使用價値の生産に役立つても、價値の形成には無關係である。それゆゑ機械の如きも、使用價値としては、そのからだ全體をもつて一纏めに各々の勞働過程に入り込むけれども、それが價値形成の過程に入り込むのは、ただ部分的に切れ切れにである。

此の如くその樣式は樣々であるけれども、要するに、生産手段が勞働過程において消費されるといふのは、その使用價値に關する限りにおいてである。そしてその使用價値が消費されることによつて、同時に或る新たなる使用價値が生産されるのであるから、生産手段そのものの價値は、その使用價値の消費につれて、新たなる生産物の上に移轉されるのである。言ひ換へれば、生産手段に關するかぎりにおいては、勞働過程において價値の再生産――すなはち舊價値の消費ならびに新價値の生産――が行はれるのではない。

しかるに、勞働力に至つては之と異なる。けだし商品を生産する勞働は、使用價値を作り出だすと同時に價値を形成するといふ二重の性質を有つてゐるがために、その勞働によつて生産手段が生産物に轉形され、從つて舊價値が前者から後者に移轉されると同時に、かゝる勞働そのものが、その分量に應じて、新たなる價値をその勞働對象の上に加へるのである。もちろん勞働力が提供されるためには、勞働者によつて一定の生活資料が消費される。そして吾々の假定によれば、その生活資料に相當する價値は、勞賃として資本家から勞働者に支拂はれるのであるから、もし勞働者が彼れ自身の勞働力の價値に相當するだけの等價を生産した點で、例へば前に掲げた例について言へば、六時間の勞働に從事しただけで、彼れの勞働を中止するならば、資本家が彼れに勞賃として支拂つただけの價値が恢復されるに止まる。けれども勞働者による生活資料の消費は生産過程の外部に行はれる謂はゆる個人的消費であり、從つて生活資料の價値はその消費と共に消え失せるのであるから、それは勞働によつて新たに再生産されるのである。ところが、資本家的生産のもとにあつては、勞働時間はなほそれ以上に延長される。從つて勞働力が生産的に消費される結果は、そのもの自身の價値が再生産されるばかりでなく、なほそれ以上の剩餘價値が生産せられるのである。だから吾々は、勞働力に轉形される部分の資本を可變資本（variables Kapital）と名づけ、これに對立するものとして、生産手段に轉形される部分の資本を不變資本（konstantes Kapital）と名づける。かくて勞働過程の立場から生産手段および勞働力として區別されたものが、價値增殖の過程からは、今や不變資本および可變資本として區別されることになるのである。

自然と人間との對立は、生産手段と勞働力との對立を生み、それはまた不變資本と可變資本との對立を生む。そして社會の總資本は、常に此の如き不變資本および可變資本といへる對立的要素から構成されてゐるのである。ところで、人間はなくとも自然はありうる。人間と自然との闘爭において、より强きものは自然である。しかるに一旦人間の歴史――人類の生存――を前提するならば、人間の勞働はその生存にとつて不可缺の條件であるがゆゑに、勞働者の生存がまたその不可缺の條件である。ところで、資本家的社會においては、勞働者の生存に必要な資料は、資本家の側においては可變資本として現はれる。かくて不變資本と可變資本との闘爭において、可變資本が不變資本のため次第に壓迫されるといふことは、社會的に重大な結果を齎らさずにはおかない。そのことは吾々が後に至つて見るところである。

第四節　剩餘價値率

さて前節において述べたる不變資本をCで現はし、可變資本をVで、剩餘價値をMで現はすならば、吾々は價値增殖の過程を（すなはち産業資本の循環運動を）次の如き式で表はしうる。（なほGは貨幣を、Wは商品を、Aは勞働力を、P_mは生産手段を、――線は流通を、……線は流通の中斷を、現はす。）

$$G—W\begin{cases}A\ \ =V\\ P_m=C\end{cases}\cdots\cdots W'\begin{cases}V+M\\ C\end{cases}—G'(C+V+M)$$

だから過程の純粋な分析は、しばらく不變資本 C をなきものと假定し、先づ V と M との關係を見ることを要求する。（なぜならば、C は W にも W′ にも G′ にも一樣に含まれてゐるのだから）。もちろん資本總額すなはち C+V に對する M の關係は、資本家にとつて決定的な重要さを有つものであり、それは社會の表面に利潤率なる現象形態を採るものであつて、吾々が後の篇に至つて更に攻究せんとするところである。しかし不變資本は價値增殖にとつて單なる條件たるにすぎない。一定の可變資本が價値增殖の機能を實現するためには、勞働過程の一定の技術的性質に從ひ、適當な比において不變資本がそれに組合はされねばならぬが、しかしそれ自身の價値を增大するのは可變資本に限られる。譬へば、湯を沸かすためには、吾々は先づ水を釜に入れ、しかる後その釜に熱を加へなければならぬが、しかしこの場合に、水が湯となる原因はこれに加へられる熱にあるのだから、水が水蒸氣に轉形する過程を純粋に考察するためには、水の容器はこれを無視して差支ないのと同じである。今 V と M との比、すなはち可變資本とそれに生ずる剩餘價値との比は、これを剩餘價値率と名づける。この率は、一方においては、支拂はれた勞働（すなはち勞働者が資本家から受取つた勞賃に相當するだけの價値を再生產するための勞働）と、他方においては、不拂の勞働（すなはち勞働者が實際においては何等の對價をも受けずして資本家のために提供する勞働）との間における比を示す。すなはちそれは資本家により勞働者が搾取される程度の正確なる表現である。なほ吾々がもし、勞働力の再生產のために必要な勞働または勞働時間をば、必要勞働または必要勞働時間と名づくるならば、剩餘價値率は、この必要勞働または必要勞働時間と、勞働者がなほそれ以上に提供するところの、剩餘勞働または剩餘勞働時間との間における比に等しい。

社會的分業が行はれてゐる結果、賃勞働者は彼等の生活資料を直接に生產しつゝあるのではない。例へば紡績工が一日十二時間の勞働に服し、そしてそのうちの六時間は必要勞働であり、殘りの六時間は剩餘勞働であるとするならば、彼れは彼れの六時間に亘る必要勞働をもつて彼れの生活に必要な消費資料を生產するのであるかといふに、決してそんなことはない。彼れは彼れの必要勞働をもつて、彼れの剩餘勞働の生產物と同じやうな絲を生產するに止まる。なほ彼れは、彼れの必要勞働をもつて生產した絲そのものを、勞賃として、資本家から受取るのであるかといふと、決してそんなこともない。彼れは彼れの必要勞働に對する報酬を、貨幣で受取り、そしてその貨幣をもつて、彼れの必要とする生活資料を市場において（彼れの直接の雇主にあらざる種々なる資本家から）購買するのである。すなはち問題は貨幣の介在のために稍々複雜となつてゐる。それゆゑに、俗流經濟學者はこの點に關しマルクス說の理解においてさへ蹉跌する。私はその一例として土方敎授を擧げることができる。敎授は、同じ社會、同じ時期にあつても、勞働の生產力の發展してゐる生產部門では、しからざる部門に比し、必要勞働が少量ですむものの如く考へてゐられる。詳しくは拙著『社會問題研究』第八十六冊、（昭和三年七月發行）を參照せられたし。

なほ資本家によりその對價を支拂はれる部分の勞働は、必要勞働の範圍に止まるのだけれども、しかし資本家から勞働者に支拂はれる勞賃は、その外觀においては、全體の勞働に向つて支拂はれたものの如く見ゆる。すなはち此の場合にも、事物の本質とその現象とは全く逆になるのである。だから、價値をば勞働の凝結物として把握することが、價値一般の認識にとつて決定的な重要さを有すると同

じやうに、剰餘價値をば剰餘勞働の凝結物として把握することは、剰餘價値の認識にとつて決定的な重要さを有する。

剰餘勞働の結果が非勞働者に歸屬するといふことは、資本家的社會の特徴ではない。むしろ斯かる剰餘勞働が如何なる形式によつて勞働者から取り去られるかによつて、今日までの諸々の經濟的社會構成は區別されるのである。尤も勞働者が彼れ自身および彼れの家族の生活維持のため必要とされる生活資料を生産するために、すべての彼れの時間を必要とするならば、第三者のために無償で勞働しうる時間は殘らない。だから剰餘勞働の成立は、勞働の生産力の或る程度以上における發展を前提とするものであり、それゆゑに、生産力の極めて幼稚なりし時代には、かの奴隷制の成立も不可能とされたのである。

剰餘勞働の結果を無償で領有するものは、奴隷制にあつては奴隷の主人であり、封建制にあつては土地の領主であり、資本制にあつては資本家であり、更に共産制のもとにあつては、子供、病人、不具癈疾者、老人等の勞働不能者および物質的生産以外の有用なる勞働に從事する人々に限られる。

奴隷制のもとにあつては、奴隷の勞働の結果はすべて奴隷の主人に歸屬するが如く見ゆる。けれども、奴隷も生きて行かねばならぬから、彼れの勞働によつて生産された物の一部は、彼れ自身のために消費されるのであり、從つて彼れの勞働もまた、實は必要勞働と剰餘勞働とに分かれてゐるのである。農奴の勞働にあつては、彼れ自身のための勞働と領主のための勞働との區別が、時間的にもまた場所的にも、外觀の上に明白になつてゐる。しかるに賃勞働者の場合には、前に述べたやうに、彼れの勞働はその總てが支拂はれたものなるかの外觀をとるのである。

第五章　絶對的剰餘價値の生産

第一節　勞働時間の延長

資本家階級の所得に歸する剰餘價値は、前章において述べたる如く、賃勞働者の剰餘勞働から生ずる。しかるに資本家的生産は專ら斯かる剰餘價値の獲得を目的とするのであるから、資本家の努力は、出來うるかぎり多くの剰餘勞働を、勞働者から搾取することに向けられる。吾々は、本章以下において、その方法の主なるものを吟味するであらう。

第一に述ぶべきものは、勞働時間の延長である。すでに前章で述べたやうに、剰餘價値の生産は、勞働者がその必要勞働以上の勞働に從事することを前提とするのであるから、彼等の勞働時間がその必要勞働に相當する時間以上に延長されることは、資本家的生産にとつて絶對に必要なことであり、從つてそれは、資本家的生産が成立した最初の時から行はれ、且ついつまでもその一般的基礎を成すものである。かゝる方法に基づく剰餘價値の生産は、勞働の仕方の上に何等の質的變化を加へずとも、ただその勞働時間の延長によつて行はれる。自然、資本家的生産の成立の初期にあつては、この方法に主力が用ひられた。もちろん資本家的生産の發展に伴うて、勞働の仕方の上にも著しき變化が加へられるのであり、それは次の章において説明する如く、剰餘價値生産の有力なる原因となるものである。しかし吾々は問題を分析的に觀

察するために、先づ勞働の仕方――從つてまた勞働の生産力、その能率等――はこれを一定せるものと假定し、たゞ勞働時間の延長による剩餘價値の生産をのみ玆に問題とするのである。それは剩餘價値の生產にとつて理論的な出發點であると同時に、また歷史的な出發點でもある。

明治三十年代における日本の織物工場に關する事情は、明治三十六年農商務省の公けにした『織物職工事情』を見ると、その一斑を知ることができる。例へば淺野工場(美濃)、森嘉七工場(尾張)、山本工場(尾張)、山森工場(米澤)、香野機業場(川俣)等の諸工場においては、始業時間は午前五時、終業時間は午後十時、實に前後十七時間に亙る勞働が强制されてゐたのである。織物作業そのものは手工業時代に行はれた舊式のまゝであつても、かゝる長時間に亙る勞働は、資本家のために剩餘價値の生產を可能ならしめたのであり、(單なる商品生產たる手工業は、これによつて資本家的なる商品生產に轉化する)。また作業過程が舊式のまゝであればあるほど、資本家は剩餘價値の生產のため、勞働者に對し出來うるかぎり長時間の勞働を課する必要があつたのである。

明治三十五年八月五日の日附をもつて、埼玉縣知事木下周一が農商務大臣男爵平田東助に宛てたる『機織工女虐待事件報告書』、ならびに右報告書に現はれたる機業者金子初五郎以下三名に對して、明治三十六年三月十四日東京控訴院において下されし判決文は、我國の資本家的生產の初期における勞働者虐待の一事例として、或ひは歷史的の價値を有つであらう。試に判決文における理由書の一節を抄錄して見よう。

『被告初五郎はその邸內に二棟の工場を有し、工女二十七八名を使役し、機業に從事するものにて、工場の周圍には堅牢なる柵を設け、その間、表門および裏木戸の設けあるも晝夜の別なく常に之を鎖し、少しも工女の外出を許さず、また外部より工場の模樣を窺ふことを得ざらしめ、工女を使役する極めて苛酷にして、日々その織るべき過度の定尺を課し、被告マンと共に、雇人たる被告誠治、宇吉、および元次郎、周三郎を指揮して工場を監視せしめ、定尺を織る能はざる工女に對しては、夜間深更に至るも强ひて就業せしめ、且つ或はその食を減じ、或は全くその食を屏去し、或はその衣服を屏去し、或は寒中裸體となして毆打し若しくは冷水を注ぎ、或は制縛して毆打し若しくは衣服を屏去する等、頗る苛酷を極めたるものにして、明治三十三年以後自宅において左の行爲をなしたり。

第一、工女藤澤カノが定尺を織り得ざるため、(一)明治三十三年中……被告初五郎は自らカノを縛し、被告マン、周三郎と共に之を毆打し、(二)明治三十四年一月頃、被告初五郎は、被告元次郎に命じ、カノを裸體となして縛し、雪中邸內を引廻さしめ、(三)明治三十三年十二月より明治三十四年八月に至る間において、被告初五郎、周三郎相謀り、カノを裸體となし、股より肩に掛けて之を縛し、居宅鴨居に釣上げおき毆打し、

第二、工女岡田セキが(一)虐待に堪へずして逃亡したるも、その居所を覺知せられ、明治三十三年十二月頃、被告初五郎方に連戻さるゝや、初五郎、マン、周三郎相謀り、セキを裸體となし、その股間に小枠を挾みたるまゝ、繩を以て兩足を縛し、……セキの臀部を毆打し、なほセキが定尺を織り得ざるため、(二)明治三十四年中、……セキを裸體となし、股より肩に掛けて之を縛し、居宅鴨居に釣上げ、數十分間放置し、(三)同年中……セキを裸體となし、その片足を他の工女の片足に

縛せしめ、セキに命じ板の間に起立せしめ、同人が苦痛に堪へずして腰を屈する毎に、共に箒を以て臀部を毆打し、

第三、工女横田タカが定尺を織り得ざるため、明治三十四年四月より明治三十五年六月までの間において、被告初五郎、マン相謀り、タカを裸體となし共に之を毆打し、

第四、工女田畑ツヤが(一)虐待に堪へずして逃亡したるも、その居所を覺知せられ、明治三十四年十二月頃、被告初五郎方に連戻さるゝや、被告初五郎、マン、宇吉相謀りツヤを裸體となして縛し共に之を毆打し、なほツヤが定尺を織り得ざるため、(二)明治三十五年中……ツヤを裸體となして縛し、之を仰向に倒しおき、竹箆を以て□□に差入れ之を搔廻し、(三)明治三十五年一月より四月までの間において、……土藏内においてツヤを縛し之を毆打せしめ云々』(以下第五、工女岡田キク、第六、工女佐野キヨ、第七、工女姫野ミヨ、第八、工女堀下ミナ、第九、工女高神サト、第十、工女柿本フサ、第十一、工女鈴木イネに關する記事を省略す)。』

以上は裁判沙汰にまでなつたものだから、これをもつて當時における一般的の事態と看做すことは決してできないが、しかし資本家的生産の初期における資本家の勞働時間の延長に對する吸血鬼的渇望を象徴するに足るものである。

資本家的生産が非常な發展を遂げた今日でも、それが可能できへあれば、資本家は絶えず勞働時間を延長するの機會をねらつてゐる。その一例としては、故細井和喜藏氏著『女工哀史』一一〇—一一一頁を參照せられたし。

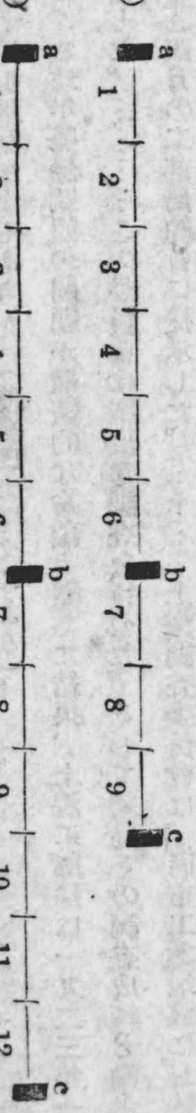
支那においても、資本家的生産の勃興に伴ひ、工場内における勞働者の虐待は恐るべき狀態を呈しつつある。私は Dolsen, Awakening of China, 1926. (蓬臺恒治氏譯『支那は何處へ往くか?』)から、ここに若干の引用をなすであらう。(蓬臺氏の譯文による)。

『諸工場における幼年勞働狀態の問題が繼續的な論議を釀した結果、上海工部局は一九二三年一調査委員會を任命した。……この委員會は廣汎な調査を行つた。そして結局その調査成績と勸告を昨年(一九二四年)四月の工部局總會に提示した。……上海調査委員會は、同市工業地域における二百七十四工場に、十二歳以下の幼兒が二萬二千人以上働いてゐるのを知つた。勞働の就業時間は午前六時から午後の六時まで、もしくはその逆に、一日十二時間が普通である。委員會は終日終夜「六歳に足るか足らぬかの幼兒が非常に多勢働いてゐる」のを見た。同市外人居留地の幼年勞働調査委員は、「幼兒は五歳になれば往々雇はれる」と報告してゐる。……晝間あるひは夜間十二時間働いてもまだ足りないのか、「幼兒たちは往々四六時中働かねばならぬ」と報告書は書いてゐる。……』

『上に掲げられた報告は上海方面に關するものであつたが、それは又全國の産業區域についても同樣である。基督教青年聯盟國際書記シャアウッド・エディは一九二三年支那の勞働狀態を詳細に研究して、彼れが知つたことを次のやうに報告してゐる。……彼れが訪れた四工場は「原始的な手織機を用ふる支那の布工場」だつた。支那の古い手工業は作業がいつも困難であつたが、近代的工場競爭により一層惡くなり、從來全く請負仕事で辛うじて餘命を繋いでゐた大多數のものを崩壞せしめた。エディは彼れが(一九二三年に)訪問したとき、「この手織機で働く一萬五千の都市の少年がゐ

た」と述べてゐる。「平時は二萬五千就業してゐるが、現在は多く失業してゐる。大人が支拂はれる賃銀は一ケ月平均九圓乃至一日三十錢である。勞働者は平均一日十八時間、午前五時から午後十一時まで、一週七日間勞働する。多數の少年はたゞ食ふだけで、一文も賃銀を受けない徒弟である。……』……（蓬臺氏譯本、六七頁以下七七頁に亟る間の抄錄。）

さて吾々は、元來、勞働力はその價値通りに賣買されるとの假定から出發してゐる。だから、もし必要勞働時間を假に六時間とするならば、剩餘勞働時間は、簡單に、一日の勞働時間がこの六時間以上に延長せられる程度に正比例することになる。すなはち次の三つの場合において、a bをもつて必要勞働時間を現はし、a cをもつて一日の勞働時間（一勞働日の長さ）を現はすならば、剩餘勞働時間は、第一の場合には一時間、第二の場合には三時間、第三の場合には六時間となるであらう。



一日の勞働時間は決して固定した大きさのものではない。一方において、その最高限度は、次の事情により、二重に規定されてゐるといふに止まる。その第一は、生理的限界である。けだし一日は二十四時間であるが、その二十四時間を休みなしに年中引續き勞働することは、生理的に不可能であるから。その第二は、道德的限界である。けだし勞働者はたゞ動物として生きて行きさへすれば可いといふわけではなく、一般文化の狀態によつてその範圍と程度とは一樣でないけれども、彼等もまた諸種の精神的および社會的欲望を有し、これを充たすために一定の時間を必要とするのであるから。他方において、その最低限度は、資本家的生產のもとでは、必要勞働時間に何程かの時間を加へたものである。一日の勞働時間はかゝる限界のうちに決定されるものであるから、それは非常にエラスティックな性質を有してをるのであり、從つてそこには勞資双方の間における大なる爭ひの餘地が存在するのである。

いま資本家は、その價値を支拂つて勞働力なる商品を購買したのである。それは、例へば、一個の帽子をその價値通りに二圓で買うたといふのと、同じである。商品の購買者は、購買した商品の使用價値を我がものとする。そして既にそれが我がものである以上、如何にその使用價値を利用しても、他人の權利を侵害するものではない。ローマの法諺にいふ如く、『自己の權利を行使する者は、何人に對しても不法を行ふものではない』。だから資本家は彼れの勞働者をして出來うるかぎり長時間の勞働に服せしむることを、商品購買者の權利において主張しうるのである。けれども、他方において勞働者もまた、同じ商品交換の法則に立脚して、勞働時間の短縮を要求しうる。けだし、他の諸商品と異なり、勞働力なる特殊の商品は、生きた人間に宿つてゐる力であるから、これを或る限度以上過度に使用することは、勞働者の生命を害することになる。それがため、例へば三十年間勞働しうる者が十年間しか勞働しえなくなつたとすれば、その結果から言ふと、資本家は勞働者に一日分の勞働力の價値を支拂ひながら、實は二日分の勞働力

を使用したことになる。それゆゑ、勞働者は商品の販賣者といふ立場から、その勞働時間をば、一定のノルマルな大きさに制限しようと主張する權利を有つのである。そこで同じ商品交換の法則によつて裏書された權利と權利との對抗が起る。そして平等な權利と權利との間における衝突は、たゞ力がこれを裁決する。それゆゑ資本家的生産の歴史においては、勞働時間の標準化は、必然的に勞働者階級と資本家階級との間における對立となつて現はれる。かゝる對立過程においては、勞働時間の出來うるかぎりの延長に對する資本家の熱望は最も露骨に最も執拗に現はれるのであり、そこでは資本家の剰餘價値が勞働者の提供する剰餘勞働から成り立つといふことが、眼で見るごとく明かとなる。言ひ換へれば、剰餘價値の本質が現象形態の上に露出してくるのである。

この段階における勞働者の鬪爭は、商品交換の法則に立脚しての鬪爭であるがゆゑに、それは商品世界――資本家的社會――において合法性を獲得しうる。だがそれは『現存制度の結果に對するゲリラ戰』にすぎないから、勞働者にして自分を斯かる鬪爭(經濟鬪爭)にのみ局限し、『それと同時に現存の制度(商品生産の制度そのもの)を變改せんと試むることなく、彼等の組織されたる力をば、勞働者階級の最後の解放、すなはち勞賃制度の窮極の廢止に向つての一槓杆として使用することなくば、彼等は全般的に失敗する』。(マルクス『勞賃・價格および利潤』の結語)。このことは、吾々がなほ後の章において說明せんとするところである。

勞働力が一旦商品形態を採るに至るや否や、商品の販賣者と購買者との間における平等の關係は、必然的に資本家による勞働者の搾取關係に轉化する。それと同時に、勞働力なる商品の販賣者としての勞働者とその購買者としての資本家との間に、一の對立が生まれる。それは一の階級的なる對立である。これによつて、かの勞資協調論の狡猾さを看取せよ。それは勞働者をして資本家の搾取に從順ならしめんとするものに外ならぬ。

勞働者と資本家との間における上記の鬪爭は、鬪爭當事者の双方が等しく商品交換の法則に立脚する鬪爭である。資本家側が現行の法制を楯にとつて自己の立場の正當性を主張することにより、勞働者を無法のものなるかに言ひなすは、誤謬である。この場合双方とも法律的には正當性を維持してゐるのである。兩者の鬪爭は、商品社會の根本原則が解決することを得ざる性質の鬪爭である。

勞働時間の限りなき延長は、資本家の要求である。それにも拘らず、今日の資本家的社會においては、工場法に基づく勞働時間の制限が行はれてゐる。それは十九世紀の前半期においては單に例外的立法として現はれたに過ぎぬが、その後立法は次第にかゝる例外的性質を脱ぎ棄てることを餘儀なくされた。それは個々の資本家の貪慾を制限して勞働者階級のノルマルな生存を維持してゆくことが、資本家階級自體の全體的利益であるといふことが、分かつて來たからである。資本は賃勞働を離れて存立することはできぬ。それは臣下なくんば君主なく、奴隷なくんば奴隷主なきに等しい。しかるかぎりにおいて或る程度の勞働者保護は資本家階級の利益である。勞働者保護のためのあらゆる社會政策は、かゝる意義とかゝる限度とを有つものである。

日本においては、勞働者階級の抗爭に基づき餘儀なくされるを待たずして、工場法の制定が早くから問題となりえた。それは西歐諸國の經驗が、或る程度の勞働者保護は結局資本家階級自體の利益で

あることを、すでに敎へてゐたからである。だが、かゝる經驗材料ありしにも拘らず、工場法の制定は非常におくれたし、その內容も今に至るもなほ甚しく不十分である。

謂はゆる社會政策的な最初の立法たるこの工場法の制定は、資本家的社會自體が、商品法則に基づく形式上の平等と自由とは、勞働力が商品となつて市場に現はれるやうになると、不平等と不自由とに轉化するものだといふ事實を、初めて認識するに至つたことを意味する。

第二節　勞賃の引下げ

資本家が剩餘價値を增大するために用ふる第二の方法は、勞賃の引下げである。吾々が以上の諸章において問題としたところは、資本家が勞働力をその價値通りに買入れたと假定した場合にも、なほ如何にして剩餘價値が發生しうるかと云ふことであつた。從つて吾々は、流通界においては常に價値の相等しきものが交換されると假定し、剩餘價値はたゞ生產界においてのみ生產されうるものと看做してきた。しかしながら、實際においては、勞働力は屢々その價値以下に買入れられ、從つて資本家は勞働力の賣買自體においても、一定の剩餘價値を攫みうるものである。もちろん、價値は單なる賣買によつて生產されうるものではないから、かゝる方面から吸取られる剩餘價値は、新たに生產されたものではなく、從つてそれは、嚴密にいへば、剩餘價値の生產なる項目中に編入せらるべきものではない。かゝる剩餘價値は、資本家による商品法則の破壞によつてのみ、資本家の所得に歸するのであり、しかるかぎりにおいて、それは資本家的生產以前の商業資本が吸取つた剩餘價値と、同じ性質を有するものであり、その本質からいへば謂はゆる本源的蓄積に屬するものである。

實際の勞賃が、やゝもすれば勞働力の價値以下に低落するのは、主として次の二つの理由からである。第一に、人間の勞働力は、流通界においては、單なる商品としての取扱を受けるに過ぎぬけれども、人間そのものは、他の諸商品の如く資本家により營利の目的のために生產されるものでないから、勞働力の供給は、普通の商品におけるが如く需要供給の關係によつて左右されることが銳敏でない。殊に後の章において述ぶるが如き理由により、資本家的な生產の仕方は絕えず產業豫備軍を造り出す必然性を有するがために、勞働力の或る部分はいつも賣れずに殘つてゐる。このことは、勞賃の水準をば絕えず勞働力の價値以下に低下せしめんとする有力な原因となる。第二に、商品としての勞働力の價値は、他の諸商品のそれと同じやうに、これが生產のため社會的に必要な勞働の分量によつて規定される。しかしながらその社會的に必要といふことは、生理的に必要といふことと、同じではない。從つて、その範圍は、勞働者の生活程度の向上につれて變動するのであり、（英米の勞働者と支那の苦力とを比較せよ）、それには一定の限界がない。それは恰も勞働時間の限界に一定の長さがないのと、同じことである。それゆゑ、この點からしても、勞賃は絕えず勞働力の價値以下に低落せんとする傾向を有するのである。

だから、勞働力がその價値通りに賣買されるといふこと自體が、（すなはち吾々がこれまで假定してきた事實自體が、）先きに述べたる勞働時間の標準化と同じやうに、資本家階級と勞働者階級との間における鬪爭――この鬪爭のための階級的組織――によつて初めて實現されうることなのである。勞働時間と勞賃

とが常に資本家と勞働者との間における鬪爭の主要題目となるのは、かゝる理由に基づくのである。しかし勞働者階級がその勞働力をば價値通りに販賣せんと主張することは、商品交換の法則に基づく商品販賣者としての權利の主張にすぎざるがゆゑに、それは資本家的生産自體を顚覆せんとするものではない。それゆゑに、この種の鬪爭もまた、資本家的社會において合法性を獲得する。

これを要するに、吾々が第一節および第二節において見たる如く、資本家的生産は、平和的なるべき商品と商品との交換それ自體のうちに、解決しがたき激烈なる階級鬪爭の必然性を内包するものである。

第六章　相對的剰餘價値の生産

第一節　相對的剰餘價値の意義

資本家的生産の起つた最初の時期には、諸國の歴史が示してゐるやうに、勞働時間の延長による絶對的剰餘價値の生産が極度の殘酷さをもつて行はれた。しかるに、その後勞働者の團結による反抗があり、また立法による勞働時間の制限が次第に原則的に行はれるやうになつたため、それにつれて斯かる方法による剰餘價値の搾取は次第に制限を受けるやうになつた。そこで資本家は、もつと抵抗の少い方面に、その剰餘價値を增大するための工夫を講じなければならなくなつた。

しからば、勞働時間を延長することなくして、剰餘價値は如何にして增大せられうるか？

假に一日の勞働時間の長さを十二時間とし、そのうち十時間を必要勞働時間、二時間を剰餘勞働時間とするならば、たとひ全體の勞働時間には變化がなくとも、必要勞働時間が何程か短縮すれば、それに應じて剰餘勞働時間は增大する。今かゝる原因より生ずる剰餘價値を相對的剰餘價値と名づける。それは必要勞働の剰餘勞働への轉化によつて生ずるものである。しからば必要勞働時間は如何にして短縮されるか？それは前章の第二節に述べた如く、勞働者に支拂ふ勞賃を、その勞働力の價値以下に引下げることによつても、行はれうる。けれども、それは既に述べたやうに、商品法則の破壞に立脚するものであり、嚴密に

いへば、剰餘價値の生産なる項目中に算へらるべきものではない。そして吾々は今、商品法則の基礎の上に如何にして相對的剰餘價値の生産が可能であるかを、考察せんとするのである。しかるに斯かる前提のもとにおいては、必要勞働時間の短縮は、ただ勞働力の價値そのものが減少する場合にのみ、實現されうる。ところで、勞働力の價値が減少するためには、例へば以前十時間分の勞働で生産されたと同じ分量の勞働者用の生活資料が、それよりも少き分量の勞働で、例へば今は八時間の勞働で生産されることにならなければならぬ。しかるに、それは勞働の生産力の增加を前提とする。けだし勞働の生産力の增加とは、一定分量の勞働により、言ひ換へれば一定の勞働時間において、造り出される使用價値の分量の增加のことであつて、それは取りも直さず、一定分量の使用價値の生産のため必要とされる勞働量の減少となつて現はれるのである。ところで此の如き生産力の增加は、勞働者の用ふる勞働手段にか、彼等の勞働の仕方にか、または同時に兩者の上に、或る變化が起るのでなければ、有力に實現されえない。だから、これまで觀察した形態における剰餘價値の生産に關しては、勞働過程をば一定せるものと假定したのであるけれども、必要勞働の剰餘勞働への轉化による剰餘價値の生産については、資本は、勞働過程をば歴史的に持ち來たされた姿において征服し、ただその繼續時間を延長するといふだけでは決して足れりとしない。それは、勞働の生産力を高め、これによつて勞働力の價値を減少せしめ、かくて勞働力の價値の再生産に必要な勞働時間を短縮するために、勞働過程の技術的および社會的條件を變革せねばならない。かくて相對的剰餘價値の生産は、資本家が勞働者を支配するといふ形式的條件が具はるばかりでなく、資本家が勞働過程そのものの上に實質的變化を加へてゆくといふ條件が具はらなければ、實現されえないといふことになる。

以下吾々は、資本家的な生産の仕方のもとにおける勞働の生産力の發展階段の主なるものを吟味するであらう。

第二節　簡單なる協業(einfache Kooperation, simple cooperation)

前章において絶對的剰餘價値の生産を考察せし際には、吾々は勞働の質的變化をば全く無視した。これは勞働時間の延長または勞賃の引下げに基づく剰餘價値の生産を純粋に觀察せんがためであつた。しかしながら、實際においては、主としてこれらの方法で剰餘價値の生産增加が行はれてゐた場合にも、同時にまた、何等かの程度において勞働の生産力の增加が行はれたのである。ゆゑに勞働の生産力の發展に關する吾々の考察は、先づ歴史的にも論理的にも資本家的生産の出發點をなすところの、單なる協業から始められねばならぬ。

こゝに協業といふのは、多數の勞働者が同一の生産過程において、または相違せる・しかし聯絡せる・生産諸過程において、計畫的に相並び相共に勞働するところの、勞働の形態をさす。それは簡單な姿から複雜な姿へと轉形する。その複雜な姿における協業は、後に述ぶべき分業である。こゝには先づ單なる協業について考察する。

なほ吾々が玆に考察せんとする協業そのものは、決して資本家的生産に特有なものではない。それは人

類の文化發端期における共産體において、すでに有力な地位を占めてゐた。また古代のアッシリア、バビロン、エヂプト、等々においても、この協業によつて、今日その遺物が吾々を驚殺せしめつゝあるやうな、巨大な建築物が造り出されたのである。けれども、前者にあつては生産手段の共有、後者にあつては奴隷が、これら協業の基礎となつてゐるのであるから、それは生産手段の私有ならびに賃勞働制を基礎とする資本家的協業と、その性質を異にするのである。要するに、資本家的協業は、協業の特殊なる歴史的の一形態にすぎない。しかしながら、歴史的にいふと、それは農民經濟および獨立の手工業に對抗して發展したものであるから、協業そのものが、資本家的生産に固有な歴史的形態であるかの如く現はれて來るのである。（日本における生絲工場または足袋製造工場の成立過程を顧みよ。）

資本家的協業の最も簡單な場合は、一人の資本家が多數の勞働者を雇ひ入れ、同じ種類の商品の生産のため、同時に同じ場所で勞働せしむるといふだけのことが、實現されつゝある場合である。それは、資本家的生産の成立について理論上考へられる最も簡單な場合であり、從つてまた、事實上その最初の形態でもあつた。すなはちそれは、資本家的生産の現實の出發點たると同時に、その最も發展せるものにとつても、その姿の一面を形成することにおいて、依然としてその Element たるものである。

この出發點における資本家的生産、例へば初期の Manufacture（工場的手工業）を、ツンフトの手工業に比べるならば、勞働の仕方そのものに關しては殆ど何等の差異がない。けれども、同一種類の商品を生産するためより多數の勞働者が協力するといふだけで、勞働過程のうへに或る變化がひとりでに起り、（量より質への轉化）、そのことが少からず勞働の生産力を高める。今そのうちの最も主なる事情を述ぶれば次の如くである。

第一、勞働の仕方は以前と同じでも、より多くの勞働者が同時に同じ作業に從事することになれば、生産手段の一部が共同に利用せられるがため、その使用價値をより十分に利用しうるといふことと、生産規模の擴大に比較すれば、相對的により小なる價値の生産手段をもつて足れりとするといふことと、（五人の職工が五臺の機を織るための工場の建築費は、五十人の職工が五十臺の機を織るための工場の建築費に比すれば、必ずその十分の一以上である）、この二つの利益が生ずる。

第二、多數の力を集めるときは、個々の力の合計とは違つた一つの新たな力が生まれる。全體はその部分の合計に等しいといふことは、この場合、もはや正當でなくなる。（例へば大きな石を動かさうとするとき、一人でも動かず、二人でも三人でも乃至九人でも動かないといふ場合に、最後に今一人加はつて、十人の力で押せば、今まで微動だもしなかつたその大きな石が、初めて動くといふやうになる。動くといふことと、動かないといふこととは、全く反對の事柄である。しかるに、たゞ力を合はす人數が殖えるといふだけで、すなはち單なる分量の增加で、結果は此の如く反對になり、力の機能に品質上根本的な差異を生ずる。かくてこの場合にも、量から質への轉化——分量の增加が品質の變化となるといふこと——が實現されるのである。十人が協力するために生ずる機能は、單獨な一人の力の機能を十倍したものでは決してない。全體は決して部分の合計に等しくないのである。

第三、多數の者が協同して同時に、同一または同種類の仕事に從事するときは、ただそれだけのことに

よつて、各個人の勞働は、全體の勞働の一部たる性質を有つことにより、同一の勞働對象に對し別々の方面から同時に働きかけることができ、そのために著しく勞働の生産力を高める。(協業せる各勞働者が別々の仕事をすれば、結果の上からは、分業をやつてゐるやうに見える。しかしそれは分業として結晶したのでなく、そこには分業としての固定性が缺けてゐるのである)。

第四、多くの生産部門には、例へば農産物の刈入れの如く、一定の期間内に、一定の仕事をば、必ず仕上げねばならぬ危機がある。仕事そのものは、一人の勞働者でも、多くの日數をさへ掛ければ、仕遂げられないことはなくとも、多くの日數を掛けることが許されない場合がある。

以上列擧したる事情のほか、なほ種々なる事情のために、離れ離れの個人的勞働に比較すれば、同じ百日分の勞働でも、結合された勞働は、使用價値のより大なる分量を生産し、從つて生産物の各單位の價値を減少する。

すでに述べたやうに、協業は資本家的生産に特有なものではない。從つてそれは種々の條件のもとに行はれる。しかし吾々が茲に問題とする資本家的協業は、一定額の資本を有する資本家の存在を前提條件とする。生産手段の所有から隔離されてゐる賃勞働者は、自分等が勝手に集まつて協業をなすことはできない。彼等は同一の資本家により同時にその勞働力を買取られることにより、初めて同じ場所に集まり、彼等の勞働を結合することができる。それと同時に、多數の賃勞働者が一つ場所に結合されるといふことは、資本家的生産の——從つて資本が資本となるための——前提條件である。それゆゑ、協業の成立と資本の成立とは同時的であり、從つてまた、資本の成立は勞働過程が一の社會的過程に轉形するための歴史的必然を表示するものである。

一定の貨幣所有者が資本家となるためには、彼れは先づ協業すべき勞働者に對し勞賃を支拂ふに足るだけの貨幣額を準備せねばならぬ。協業すべき勞働者の員數、從つて協業の範圍すなはち生産の規模は、先づかゝる資本の大きさに依存する。なほ資本家は勞働者に勞賃を支拂ふだけでは足りない。彼れは彼れの雇入れた勞働者の數に應じて、一定の生産手段——建物、原料、勞働手段等——を供給しなければならぬから、そのためにまた一定の貨幣を必要とする。最後になほ、これらの目的のために準備さるべき貨幣額には、その最小限度がある。けだし同時に使用される勞働者の數、從つて生産される剩餘價値の大きさが、それら勞働者の雇主をして、肉體的勞働に從事することなしに、相當の生活を營ましむるに至つて、初めて手工業の親方は産業資本家となりうるものだからである。しかも最初の資本家的協業にあつては、すでに述べし如く、その勞働過程の上には殆ど何等の變化も起らぬのであるから、資本家的生産の出發點は、純粹に量の增加が——委しくいへば、一方においては、一人の手に集中される貨幣量の增加、他方においては、一つ場所に集合せしめられる勞働者の員數の增加が、——質の轉化を喚び起したものと見ることができる。

第三節　分　業 (Arbeitsteilung, division of labour.)

前節において述べたる如き簡單なる協業は、資本家的生産の出發形態であり、それはマニュファクテュアの初期において、やゝ時代を特徴づける生産形態に近いものであつた。なほその後になつても、分業または機械が著しき役目を演ぜずに、たゞ資本のみが大規模に働いてゐるやうな生産部門——例へば或る種の農業——では、ほぼこれに近き形態が維持される。しかしこれを一般的にいへば、協業は發展するにつれて次第に複雜な姿をとり、從つて簡單なる協業は、協業の特殊なる一形態たるに止まることになるけれども、かゝる場合においても、協業そのものは依然として資本家的生産の基本形態（Grundform）である。多數の勞働者が同時に同じ場所で同じ資本の命令のもとに働くといふことは、簡單な姿においてなり複雜な姿においてなり、資本家的生産の行はれるところには必ず行はれなければならぬからである。しかる限りにおいて、前節に述べたるところは、すべての資本家的生産に當嵌まるのである。

複雜な姿における協業は、分業に基づく協業（die auf Teilung der Arbeit beruhende Kooperation）または分業である。それは、ヨーロッパでは、ほぼ十六世紀の半ばから十八世紀の七十年代まで續いたところの、Manufacture（工場的手工業）の時期を通じ、資本家的生産過程の特徴的な形態として、久しく優勢であつたものである。（アダム・スミスが『諸國民の富』の第一章『分業について』において引用してゐるピン製造業の實例は、すなはちこのマニュファクテュアに屬せるものである）。

このマニュファクテュアは二樣の道行を採つて發生した。一個の生産物の最後の完成までに必要な別々の仕事が、從前は、それぞれ獨立してゐる種類の異なつた手工業の勞働者によつて行はれてをり、從つて生産物は、その最後の完成に至るまでに、これらの人々の手を順次通過しなければならぬことになつてゐた場合に、一個の資本家が現はれてそれらの仕事を一つの企業に統一し、それらの仕事のために必要な勞働者をば、一つの作業場に寄せ集めたならば、こゝに一個のマニュファクテュアが成り立つわけであるが、斯樣なのがその發生に關する二樣の道行の一つである。（例へば、四輪馬車のマニュファクテュアは、（一）車を製造してゐた手工業者、（二）馬具を製造してゐた手工業者、（三）裁縫を業としてゐた手工業者、（四）錠前を專門に造つてゐた者、（五）帶革を專門に造つてゐた者、（六）旋盤工、（七）緣飾工、（八）硝子細工人、（九）畫工、（十）塗物師、（十一）鍍金師、等々のものを一つの工場に寄せ集めることによつて出來上つたものである。）ところで今まで獨立してゐた勞働者が、たゞ一つの工場に寄せ集められ、從前通りの仕事をするといふだけのことならば、それは前節に述べた單なる協業に過ぎないのであり、從つてそれ自身については茲に繰返し述べる必要はない。しかしそこには、勞働過程の上にひとりでに或る本質的の變化が起る。すなはちこの場合にも、量の增加は質の變化に轉化するのである。如何にして斯かる變化が起るか？　例へば、馬車の製造について見るに、これに關係ある樣々の手工業者は、彼等が馬車のマニュファクテュアに結合せられる以前には、皆なそれぞれの專門に屬する範圍内において、たゞに馬車に關する仕事のみならず、その他の樣々の仕事を請負うてゐたのである。しかるに彼等が一旦馬車のマニュファクテュアに結合せられることになれば、彼等は馬車に關する仕事にのみ從事するやうになる。そこで彼等は、彼等の從前の手工をばその全體の擴がりにおいて行ふといふ習慣を失ひ、それにつれてまた段々にその能力をも失ふことになるが、それと同時に、他方においては、彼等の局限されたる活動が、狹められたる範圍の作業にとつて、最も適當な形態を採るやうになる。だから、馬車のマニュファクテュアは、最初、獨立

せる手工業の結合として現はれたけれども、それは後になると、馬車の生産がその種々なる特殊作業に分割されたものに轉形し、それら一々の特殊作業は一勞働者の專門的機能に結晶し、勞働者は馬車の生産に對する部分勞働者（Teilarbeiter）となり、その全體の作業は、これら部分勞働者の勞働結合に轉形する。簡單にいへば、單なる協業は、轉形して、分業に基づく協業となり、勞働過程に對する資本の支配は、單に形式的に止まらず、その實質の上に及ぶことになる。これが分業に基づくマニュファクテュアの發生過程の一つである。

しかるにマニュファクテュアはまた、前の場合と異なり、同一の或ひは同種の仕事をしてゐる多數の手工業者が、同一の資本家の下で同時に同じ仕事場で勞働することによつて發生する。ところで、ただそれだけのことが行はれるのみならば、その形態は前に述べた場合よりもなほ一層簡單であり、それは協業の最も簡單なる形態に屬するのである。けれども、この場合にもまた、量から質への轉化がひとりでに行はれるのであり、かくてそれは間もなく、分業に基づく協業に轉形するのである。例へばピンのマニュファクテュアについて見るに、最初は、一つ工場に集まつてゐる個々の手工勞働者が、一人なり二人なりの助手に手傳はせて、針金の切斷からピンの最後の仕上げに至るまでの全部の仕事を受持つてゐた。從つて勞働の仕方は從來の手工業と全く同じであつた。しかし、多數の勞働者が同じ場所に集まつて、同時に勞働に從事してゐるといふ事實がすでに存在してゐるならば、その事實をば何か外のことに利用せしむるやうな、外部からの事情が起る。例へば、一時に澤山の注文があつて、短時日のうちに多量の生産物を供給せねばならぬといふやうな必要が起ると、一つの工場内の人々が手分けをして、各自仕事の分擔をするやうになる。ところで、斯樣な一時的の分業が度々繰り返されてゐると、繰り返しによる變化が起り、次第にその利益が意識されるやうになるので、それは漸を追ふて系統的な分業に結晶するのである。かくてこの場合にも、單なる協業は、間もなく轉形して分業に基づく協業となる。なほこれらの作業が、經驗の結果、更に分割されて、その一つ一つが個々の勞働者の專門の作業となるに至ることは、言ふまでもない。

日本における生糸工場は、今なほこのマニュファクテュアの段階に屬するものである。そこでは、次の章に述ぶるが如き機械が主要な役割を演じてゐるのではない。早川直瀨氏『製絲經濟論』（大正二年刊）には次の如く述べてある。

『謂はゆる製絲器械は器械に非ずして器具に屬する者也と稱する方、至當なるべし、……繰絲工程上最も必要なる索緒添緒等は、全く人力に依るものにして技術主たるものなり、卽ち製絲器械なるものは發動機傳動機のみにして、作業機なるものは全くこれを缺く有樣なり。』（八九頁）

『現今器械製絲工業における、作業機に關する勞働の分化としては、煮繰分業なるものあり、然れども、なほこれ以上において、索緒に、或ひは添緒に、分業行はるべしとも思はれず。……』（九〇頁）

右の記事を見ると、製絲工場では繭を煮ることと絲を繰ることとが分業になつてゐるだけで、それ以上の分業は『行はるべしとも思はれず』としてあるが、しかし勞働のそれ以上の分割は必ずひとりでに行はれることになるので、今日では索緒（くちだて）が工場によつては或る勞働者の專門的な分擔に歸してゐる。德島における實例によれば、この索緒を專門勞働となすことによつて、工女一日の生産量百二十匁は約二百匁に增加したと言はれてゐる。

足袋の製造に關しては、今日では種々の機械が使用されてゐるには相違ないが、しかし大工場の作業も實質的にはマニュファクテュア（工場的手工業）の段階に屬してゐるのである。福助足袋製造會社の現狀については、本多芳郎氏『足袋の製造工程』（『經濟論叢』第二十三卷、大正十五年刊、第一號乃至第二號）、特にその第五節『足袋製造のマニュファクテュア性』を見よ。前記の會社では、分業は約五十五段に分れてゐる。そのため手工業時代の熟練工は一日十足を生産してゐたのに、今日では職工一人の平均生産高が七十足以上となつてゐる。

さて手工業がマニュファクテュアに成長してからでも、その作業の基礎は依然手でやる仕事であるが、しかし新たに成立せる分業は、次の如き理由により勞働の生産力の增加ならびに勞働能率の增進を惹き起すのである。

第一に、勞働の仕方は元のまゝであるとしても、個々の勞働者は終生同一の單純な作業に從事するのであるから、勞働の熟練を增すことにより、より少き時間内により多くのものを生産しうるに至る。

第二、しかし勞働の仕方そのものも改良される。それは勞働者が、全生産過程の一部分に相當する作業を絶えず繰り返してをり、それに注意を集中するために、經驗上おのづから、最少な力の支出をもつて目的とする效果を擧げうる方法を工夫するに至るからである。

第三、一生産物の完成に要する種々の作業を逐次に自分一人でやつてゐる手工業者は、作業の變る毎に、あるひは場所を動かし、あるひは道具を變へねばならぬが、マニュファクテュアにあつては、分業が行はれてゐる結果かゝる必要が著しく減少される。從つて一方においては、勞働力の不生産的な消費が減

少されることにより、勞働の生産力が高められ、他方においては、勞働時間の間隙がより十分に埋められることにより、勞働能率が高められるのである。

第四、勞働の生産力は、ただに勞働の仕方に依存するのみならず、また勞働手段に依存する。言ふまでもなく、マニュファクテュアの時代における主要なる勞働手段は、道具である。ところで、この道具なるものは、同じ種類のものが、種々なる勞働過程に用ひられ、（例へば、ハンマアが、建築にも、造船にも、採礦にも、冶金にも、乃至机を造るにも、椅子を造るにも、文房具を製造するにも、書物を製本するにも、その他樣々の生産物の生産過程に用ひられ、今日では、外科醫、齒科醫でも、それぞれのハンマアを用ふる）、また同じ道具が單一の勞働過程において種々なる目的に役立ちうる。（例へばナイフが紙を切るためにも、鉛筆を削るためにも、役立つといふが如く）。しかしながら、一勞働過程の種々なる作業が相互に分離されてきて、それぞれの部分作業が部分勞働者の手において一つの適當な特殊の形態に結晶してくると、以前は數個の目的に役立つてゐた道具の上に、必然的に或る變化が起る。かゝる變化の方向は、道具の形態の不變なる結果經驗されるところの困難によつて定まる。（例へば物を切るための刄物について見よ。人を殺すための刀劍、文房具としてのナイフ、かみそり、庖丁、等々、その種類は無數であり、またそのなかで、料理用の刄物すなはち庖丁だけについて見ても、肉庖丁と野菜庖丁とはその形態を異にしてをり、更に同じ肉庖丁でも、獸肉用と魚肉用とは異つてをり、また同じ魚肉用の範圍内においても、さしみを作るためのもの、骨切り用のもの、鱗をとるためのもの、等々は、各々その形態を異にしてゐる。）マニュファクテュアの時代は勞働手段をば、專ら個々の部分勞働者の特定の作業に適應せしめることによ